

かな や みなみ
富山市金屋南遺跡
発掘調査報告書Ⅱ

—金屋企業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（2）—

2003年

富山市教育委員会

かな やみなみ
富山市金屋南遺跡
発掘調査報告書Ⅱ

—金屋企業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（2）—

2003

富山市教育委員会



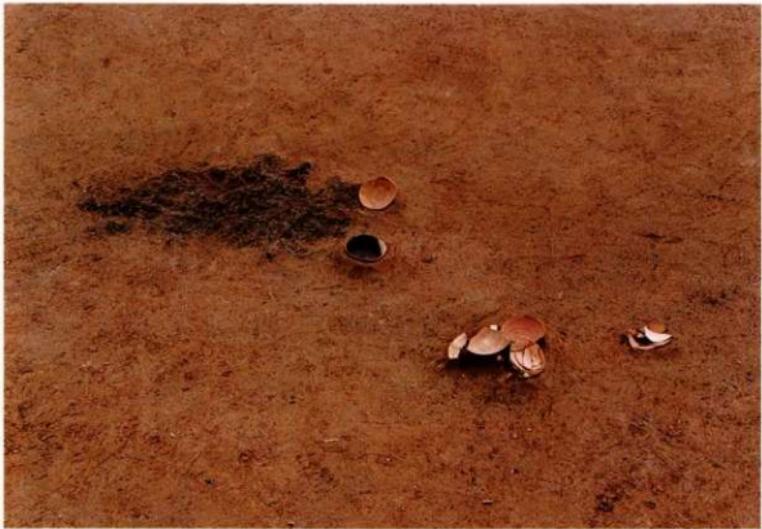
調査区全景（北から）



第53号土坑遺物出土状況



河川跡土層断面



土器祭祀遺構



出土した多量の土錘



土器祭祀遺構出土遺物（「北」の朱書）

序

富山市は、北は日本海に面し、東に3,000m級の立山連峰を仰ぎ、緑豊かな呉羽山丘陵を市の西部に擁する自然環境に恵まれた都市であります。このような土地に先人が残した遺跡は、郷土富山の歴史を知るためのかけがえのない遺産であります。これを保護し、未来へ継承していくことは現代に生きる私達の努めと考えております。

現在、富山市内には約600か所の遺跡があります。近年、大規模開発に伴い、遺跡の発掘調査が数多く行われ、先人たちが歩んだ歴史の一端が明らかになってまいりました。

呉羽山丘陵には古くは旧石器時代から人々の営みがあり、その後も絶え間なく数多くの遺跡が残されております。金屋南遺跡は丘陵の東側、神通川支流の井田川に面しており、周辺には白鳥城、大峪城、安山城が築かれるなど歴史的にも交通・物流の重要な位置にあります。

本委員会では金屋企業団地造成事業に伴い、平成8年度から平成13年度までの6か年にわたり、金屋南遺跡の発掘調査を実施いたしました。調査により、溝で区画された建物、井戸、上槽が多数発掘され、鎌倉～室町時代の大規模集落のほぼ全体像が明らかになりました。

この報告書は平成13年度に行った遺跡の南西部を対象とした第6次調査の内容をまとめたものです。この調査では主に平安時代の堅穴住居、掘立柱建物、土坑などが検出され、川べりで行われた祭祀や古代の村の姿などを探るうえで貴重な資料が得られました。

本書が富山市域における古代・中世史に新たな一頁を加えるとともに、私達の共有財産である埋蔵文化財を理解していただくうえで参考になれば幸いです。

最後に、発掘調査にあたりご協力いただきました地元金屋地区の皆様をはじめ、富山市商工労働部企業立地推進室、文化庁、富山県教育委員会、富山県埋蔵文化財センター、大成エンジニアリング株式会社及び各関係機関の方々に厚くお礼申し上げます。

平成15年3月28日

富山市教育委員会
教育長 大島哲夫

例　　言

1. 本書は富山市金屋字川端地内に所在する金屋南遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書は平成13年度に実施した第6次金屋南遺跡発掘調査のうち、西側調査区約4,700m²についての調査報告成果を報告するものである。
3. 発掘調査は、富山市金屋企業団地造成事業に伴うもので、富山市商工労働部企業立地推進室が大成エンジニアリング株式会社に委託し、富山市教育委員会が監理した。
- 調査面積　　9,600m²
調査期間　　平成13年5月14日～平成13年12月13日
調査担当者　小林高範（富山市教育委員会埋蔵文化財センター）
受託機関　　大成エンジニアリング株式会社
　　　　　　埋蔵文化財調査室（室長　早川泉）
　　　　　　統括調査員　板野伸彦
　　　　　　調査員　小林貴郎
　　　　　　監督員　金子明浩
4. 出土品整理・報告書作成業務は富山市商工労働部企業立地推進室の委託を受けて、富山市教育委員会の監理のもとに大成エンジニアリング株式会社が実施した。
実施期間　平成14年7月14日～平成15年3月28日
5. 自然化学分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に分析を依頼し、その成果を附録として掲載した。
6. 本書の執筆担当は以下のとおりである。
I・II・2・III・IV章　　小林貴郎
II-1章　　小林高範
7. 本書の挿図・写真の表示は次のとおりである。
(1)方位は真北、水平標準は海拔高である。
(2)遺構の表記は、竪穴住居：S I、掘立柱建物：S B、溝：S D、土坑：S K、ピット：P、不明遺構：S Xを用いた。
(3)出土品及び原図・写真類は富山市教育委員会が保管している。
8. 本書の作成にあたり、下記の諸機関、諸氏から指導・助言・協力をいただいた。記して謝意を表します。（敬称略・順不同）
岡田　茂弘、平川　南、富山県埋蔵文化財センター、富山県立図書館、名古屋市博物館

目 次

I 遺跡の位置と環境	1
II 調査の経緯	4
III 調査の概要	6
第1節 古代の遺構	6
第2節 近世の遺構	50
第3節 時期不明の遺構	57
第4節 包含層出土の遺物	61
IV 調査のまとめ	63
附編 金屋南遺跡の自然科学分析	68
写真図版1～10（遺構）	82
写真図版11～16（遺物）	92

I 遺跡の位置と環境

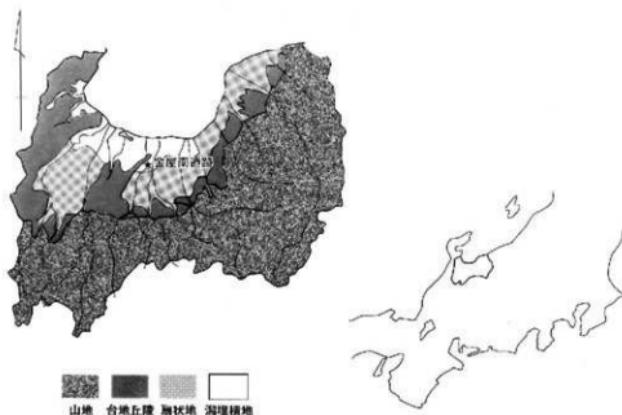
金屋南遺跡はJR高山本線西富山駅の南西方向約2km、富山市南西端の金屋字川端地内に所在する。金屋周辺は、主要地方道富山・庄川線に沿って集落が連なり、その周囲には水田が展開する閑静なたたずまいを残している。しかし近年、金屋企業団地や分譲住宅の造成もはじまり、次第に都市化の進んできた地域である。

遺跡の西方約500mには呉羽山丘陵が南北に連なり、西の砺波平野と東の富山平野を分離している。南方約200mには井田川が蛇行しており、一帯の現状は標高11mを測る平坦地である。

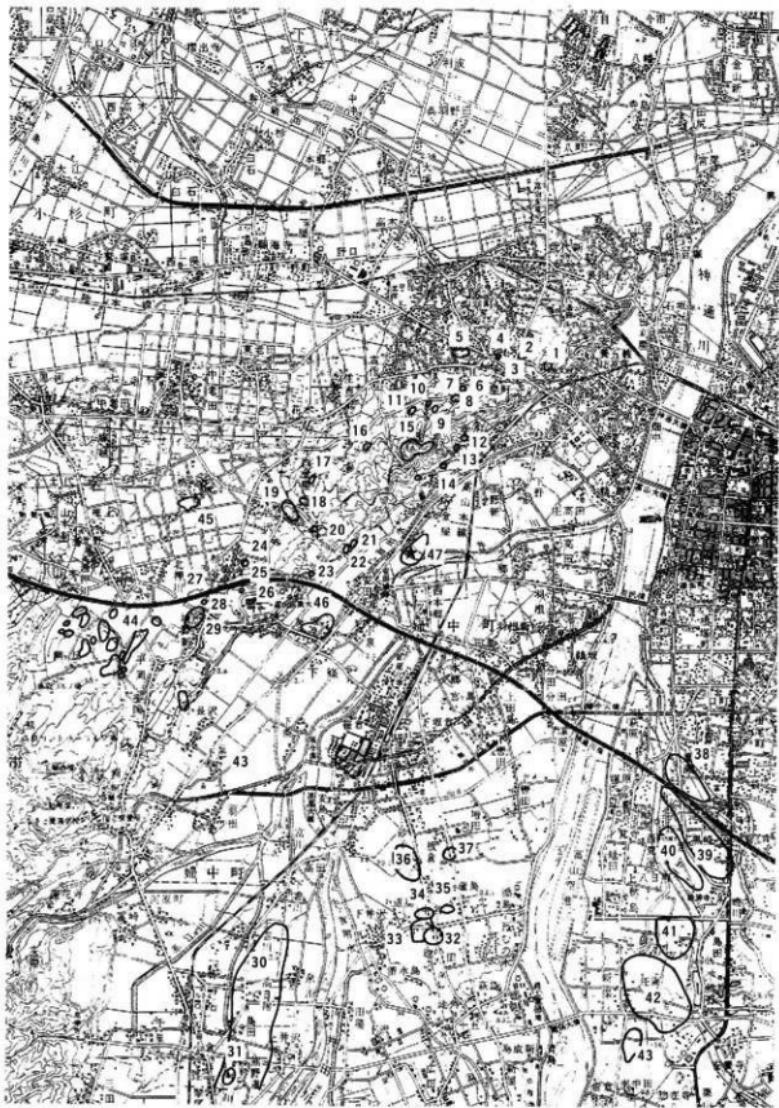
ここで、富山県全体の自然地形について概観してみる。富山県の地形を見ると、東部・南部には山地が、北部の臨海部には扇状地及び潟埋積地の平野が広がっており、その中間には帶状に台地・丘陵地が展開する。県内の平均標高は600mを超えるが、これは全国を見ても、富山県・岐阜県・長野県・群馬県・山梨県の5県のみであり、さらにこのうち富山県が唯一の臨海県である。この事実は山間部から平野部への傾斜が非常に急峻であることを物語っている。

遺跡が立地する富山平野は、太古の井田川や神通川・常願寺川など数多くの大小河川が形成した「複合扇状地」と海岸地帯にあたる「自然堤防帶・潟埋積地」に大別される。富山市金屋の地は、このうち「自然堤防帶・潟埋積地」上に立地するが、複合扇状地の先端部とは至近の位置にある。日本有数の多雨地帯を上流に持つ神通川や井田川の洪水により、多量の土砂がこの地にもたらされ、堆積したことにより、現状のような平坦な土地が形成されたことは想像に難くない。またその事実は、一方で、平坦な現状では把握できない土地の起伏が地中に眠っている事も同時に示す。

金屋南遺跡は古代・中世と、およそ二つの時期にわたる集落跡であるが、今回報告する地区の調査



第1図 富山県の自然地形



第2図 周辺の遺跡分布

では主に平安時代の遺構を検出した。そのために、ここでは該期の主要な遺跡について概観する。

金屋南遺跡と同じく井山川の氾濫によって形成された自然堤防上に立地する遺跡としては、市境を越えた、本遺跡より南西2kmの姫中町友坂地区に所在する友坂遺跡を挙げる事ができる。9次にわたる調査のうち、7次調査では遺跡の東端を画すると思われる谷状の落ち込みが検出され、ここに7世紀後半から9世紀初頭の須恵器、土師器が廃棄されていた。この谷状の落ち込みは井山川の旧流路であると思われるが、この落ち込みと今回検出された河川跡はおよそ延長線上に所在している。

東方に目を転じると、富山市南部の神通川と熊野川に挟まれた複合扇状地には任海宮山遺跡が所在する。9世紀前半が遺跡の中心と考えられ、礎石を持つ建物跡、大型の掘立柱建物跡や土師器焼成遺構が検出され、また多数の墨書き器が出土しており、地方豪族の居館跡等と考えられている。神通川左岸には姫中町名I遺跡、名II遺跡、名IV遺跡などがあり、中世を主体としながら8~9世紀の古代の堅穴住居跡、掘立柱建物跡などが検出され、金屋南遺跡と様相が似ている。

一方、西方の丘陵地では、金草第一古窯跡などの須恵器窯が早くから知られているが、最近の調査により、集落跡のほかに起伏の多い地形を利用した窯跡などの生産遺跡も発見されている。向野池遺跡では9世紀中葉から10世紀初頭にかけての掘立柱建物跡や戸戸跡、土師器焼成遺構が検出されている。このうち戸戸には焼成に失敗した瓦塔を一括投棄しており、検出された土師器焼成遺構で瓦塔が焼かれていた可能性が指摘されている。また開ヶ丘中遺跡では、およそ9世紀代と考えられる堅穴住居跡、掘立柱建物跡、礎石建物跡、土師器焼成遺構が検出されている。このうち礎石建物跡は瓦塔の出土と関連するものとされ、祀堂と考えられている。須恵器の焼成不良品も出土している事から須恵器生産との関わりが指摘されており、周辺の土師器生産の中心的な位置を占める工人集落と考えられている。

周辺の奈良・平安時代の遺跡（番号は第2図に対応する）

1 富山市 安養坊遺跡	19 富山市 古沢遺跡	37 姫中町 板倉II遺跡
2 富山市 茶屋町嶺山ノ下遺跡	20 富山市 古沢東窓跡	38 富山市 黒瀬大屋遺跡
3 富山市 茶屋町裏山遺跡	21 富山市 古沢宮の山遺跡	39 富山市 黒瀬極山遺跡
4 富山市 羽羽向開遺跡	22 富山市 法尻遺跡	40 富山市 八日町遺跡
5 富山市 異羽モグラ池遺跡	23 富山市 吉沢塚山Ⅶ遺跡	41 富山市 友杉遺跡
6 富山市 岩屋町南I遺跡	24 富山市 杉谷北遺跡	42 富山市 任海宮田遺跡
7 富山市 茶屋町南Ⅲ遺跡	25 富山市 杉谷Ⅱ遺跡	43 富山市 吉倉B遺跡
8 富山市 異羽町長谷遺跡	26 富山市 杉谷Ⅳ遺跡	44 富山市 開ヶ丘地区的遺跡群
9 富山市 異羽町大谷I遺跡	27 富山市 杉谷67遺跡	45 富山市 柳谷南遺跡
10 富山市 追分茶屋大谷遺跡	28 富山市 境野新遺跡	46 姫中町 友坂遺跡
11 富山市 吉作南IV遺跡	29 富山市 地野新南I遺跡	47 富山市 金原南遺跡
12 富山市 小町城東I遺跡	30 姫中町 南部I遺跡	
13 富山市 司町城東II遺跡	31 姫中町 小舟越水河原遺跡	
14 富山市 司町大平下遺跡	32 姫中町 中名I遺跡	
15 富山市 白鳥城跡	33 姫中町 中名V遺跡	
16 富山市 金草B遺跡	34 姫中町 中名IV遺跡	
17 富山市 西金屋スキーパー場遺跡	35 姫中町 特工I遺跡	
18 富山市 古沢△遺跡	36 姫中町 砂子工I遺跡	

II 調査の経緯

1 調査に至る経緯

平成5年12月、富山市金屋地内での遺跡分布調査により、金屋孫八遺跡、金屋南遺跡の2遺跡が新たに確認され、「富山市遺跡地図改訂版」に追加登載された。

平成6年に富山市では富山西インターチェンジ周辺開発事業として、金屋地内で企業団地を造成する計画（市商工労働部）を明らかにした。計画地にはこの2遺跡が含まれていたため、市教育委員会と市商工労働部で協議を行い、試掘確認調査を実施することとした。

試掘確認調査は、平成8年4月～5月に約69,000m²を対象として実施した。調査により、2遺跡が約62,500m²の範囲にまとまっており、同一遺跡であると確認されたため、「金屋南遺跡」として名称を統合した。遺跡は、全域に中世（鎌倉～室町時代）の遺構が広がり、南部の一部には平安時代の遺構の重複が確認された。

この調査結果をもとに工事計画との調整を行ったところ、幹線・区画道路、造成敷地部分について事前の発掘調査が必要であり、公園・緑地帯部分約5,300m²は盛土保存することで協議が整った。

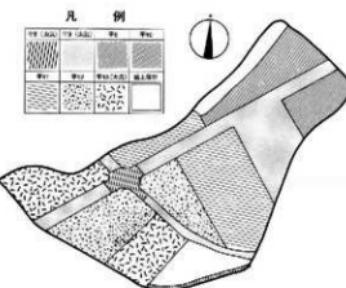
発掘調査は、平成8年度から13年度まで約57,200m²を対象として実施した。平成8年度及び9年度調査の一部については、山武考古学研究所に発掘調査を委託し、市教育委員会が監理を行った（富山市教育委員会1999）。

平成9年度から12年度までは市教育委員会が発掘調査を実施した。調査により、溝で区画された短冊状の敷地に掘立柱建物、井戸、土壤が密集し、周間に畠が広がるなど鎌倉～室町時代を中心とした計画的な集落構造が明らかになった。平成11年度の調査では、集落東側の川べりで溶解炉、廐津場を確認した。廐津場から鉄鍋や梵鐘の鋳型、炉壁、鐵滓、炭等が大量に出土し、室町時代後半（15世紀）に鋳物生産を行っていたことが判明した。また、溶解炉から15m離れた川の中から鏡や太刀部品の入った提子が出土した。一括出土の例としては初めてであり、文化庁主催の「発掘された日本列島2001—新発見考古速報展」に取り上げられ、全国で巡回展示された。

平成13年度は、造成敷地部分約9,600m²について、大成エンジニアリング株式会社に発掘調査を委託し、市教育委員会が監理を行った。13年度ですべての現地調査を完了した。

年度	面積m ²	主な遺跡	主な遺物	備考
8	2,200	土塹、溝、畠	土器類、漆器類、土器、漆碗、中世 土器類、骨質、鐵製	8件：11件考古 學研究会
9	15,200	既往建物、井戸、土塹、 溝、畠、廐津	土器類、漆器類、土器、漆碗、中世 土器類、八足器、青磁、四足器、石器類	1件：10件考古 學研究会
	2,940	既往建物、土塹、溝	皮削削、中世土器類、青磁、四足器、鐵 既往性建物がまとめて検出	
10	5,900	既往建物、土塹、溝	井戸、中世土器類、骨器、瓦器、新 鐵、当社（美戸様）	
11	10,900	既往建物、井戸、土塹、 溝、廐津、溶解炉、廐津 井戸	漆器類、土器類、土器、漆碗、中世 中世土器類、骨器、廢鐵、馬糞、鐵器、 印記、青磁、鍍金、鐵、大刀部品	既ち太刀部品の 入った提子が出土 した
12	10,500	既穴・既廐津、既立柱建 物、井戸、土塹、溝、畠	瓦器類、土器類、土器、廐津、中世 土器類、骨器、鐵器、漆器、鐵器（漆 器：金属容器：a）	井戸の芯礫み内 から漆碗が出土 した
13	9,600	既穴・既廐津、既立柱建 物、井戸、溝、畠	漆器類、土器類、土器、廐津、中世 土器類、青磁	大成エン ジニアリング
計	57,200			

表 年度別調査一覧



第3図 年度別発掘調査区割図

2 調査の経過

平成13年度の調査対象地区は第3図に示した年度別発掘調査区別図に示したが、道路を挟んで東西に離れて所在している。調査時は便宜上の通称として東側をA区（KYM5A、約4,900m²）、西側をB区（KYM5B、約4,700m²）と呼称し、同時並行して調査を実施した。本書はこのうちB区の調査成果に関する報告書である。ここではB区を中心に調査経過の概略を以下に示す。

なお、B区の調査は排土置き場を設定する理由から南北に二分割（B-1・B-2区）して行った。B-1区の調査時にはB-2区に、B-2区調査時には調査の完了したB-1区へと排土置き場を移動した。

調査日誌抄

平成13年5月10日	富山市教育委員会埋蔵文化財センターにて事前の打ち合わせを行う。
14日	現地にて事務所施設・トイレなどを設置。
16日	A区、重機による表土掘削開始。
21日	B-1区、重機による表土掘削開始。
30日	全調査区の表土掘削完了。
31日	調査開始を前に全作業員を対象に安全講習会を実施。
6月1日	A区、B-1区調査開始。整理作業も同時並行で開始する。
7月23日	B-1区調査完了
24日	B-1区航空測量・写真撮影を実施。
30日	B-1区埋め戻し、B-2区表土掘削開始。
8月8日	B-2区表土掘削完了。
8日	B-2区調査開始。
21日	大型の台風が接近。調査区の養生を徹底する。
9月7日	排水対策強化のため現場内の電力を増設する。
10月4日	B-2区航空測量・撮影。
10日	B-2区調査完了。
17日	A区航空測量・撮影実施。
20日	市民対象の現地説明会を実施。約100名の参加を得る。
22日	引き続き調査を行う。整理作業に従事する作業員を増員する。
31日	A区調査完了。
11月1日	整理作業に従事する作業員を増員する。
30日	整理作業完了。現地調査が完了した。
12月3日	現地事務所施設の撤去作業を開始する。
13日	施設の撤去を全て完了。現地の引渡しを行った。

III 調査の概要

第1節 古代の遺構

検出した遺構の概要

平安時代の竪穴住居跡5棟、掘立柱建物跡1棟、構列1基、土坑2基、畠畝遺構14群、土器祭祀遺構1ヶ所、河川跡1ヶ所、自然地形の落ち込み1ヶ所を検出した。出土した遺物の年代観から、ほとんどが9世紀後半から10世紀前半のものと考えられる。

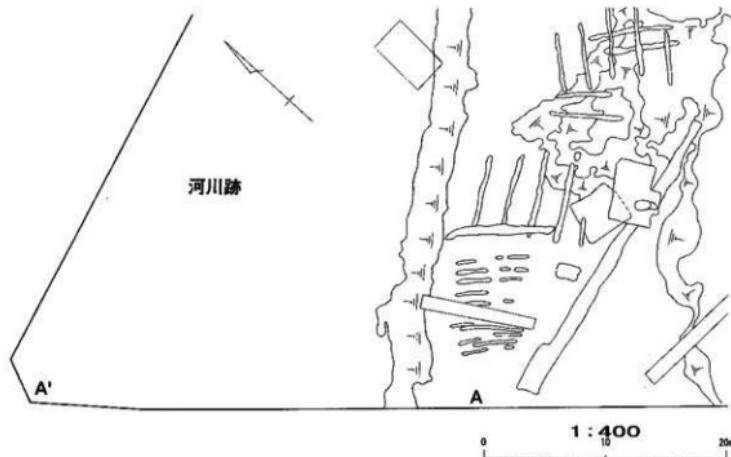
古代集落は現在の県道富山・庄川線に沿う形で南北に伸びると推定される自然堤防上に立地している。洪水による土砂流失によるものか、遺構、とりわけ竪穴住居跡の造存状態は非常に悪く、その深度は20cmに満たない。

検出した竪穴住居跡、掘立柱建物跡は、おしなべて西側の河川跡（流水を伴わない湿地の可能性もある）に沿うような配置をみせている。また、第4・5号竪穴住居跡は調査区東側の自然地形の落ち込みの真際に位置している。これらの事から、往時の自然地形による集落展開の立地的な制約を認めることが出来る。

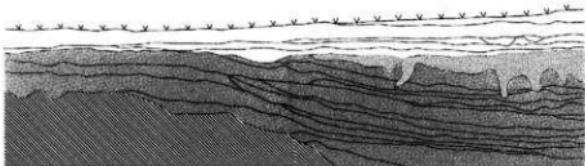
畠畝遺構は、方向性や重複関係から、計14グループのまとまりを確認した。出土遺物がごく僅かではあるが、河川跡の上層断面で確認した古代の洪水堆積土（黄褐色土）に覆土がほぼ近似する事から、古代の所産ととらえた。

土坑では、土錐が大量に出土した第5号土坑、土器器の壺の底部を蓋にした小壺を埋納した第53号土坑などバラエティーに富んだものを検出した。

土器祭祀遺構は、河川跡の掘り込み（肩）が少し河川跡側に入った位置で検出した。祭祀遺構



第4図 河川跡周辺 (S=1/400)



第5図 基本層序 ($S=1/100$)

は、7つの土師器の塊(うちひとつには「北」の朱書きがある)と炭化物集中区で構成されている。

基本層序

ここでは、河川跡の土層断面図を用いて遺跡の基本層序を捉え、今回報告する調査区のみでなく金屋南遺跡の環境全般について年代観をまじえてその解釈を試みたい。(土層番号は、第7図 河川跡土層断面図のものによる)

1層は地山とした基盤層で、遺構確認面である。既刊の報告書(富山市教育委員会1999)では「浅黄色シルト」と報告されている層に相当するものと思われる。

2層から19層は古代遺物包含層である。4層以下19層に至るまで草木腐食土と洪水堆積土が交互に堆積する。現地調査時に実施した自然科学分析では、草木腐植土中からイネ科やナデシコ科などの植物遺体が検出された。また、5層などからは井田川上流域の八尾累層・音川累層といった海成層から流出してきたものと考えられる海水生種が多量に検出された。これは同層が、洪水によって上流域からもたらされた洪水堆積土である事を示している。後述する土器祭祀遺構(1号不明遺構)は4層中で検出した。よって本遺構が指標する、9世紀末から10世紀初頭という年代を4層に与える事が可能である。

20層は草木腐食土である。同質の21層~24層を含めると、他層に比べ圧倒的な厚さをもって堆積している。これは堆積した時期がこの地に洪水の影響を受けずに草木類が安定して生育し得た環境であった事を強く示唆している。そこで、この地の洪水を防ぐ何らかの治水事業が行われた可能性を考える事ができる。これまでの発掘調査の成果により、この地に治水事業を行ひ得る規模の人の営みが認められるのは、金屋南遺跡が大規模鉄造集落であった15世紀であることが判明しており、年代を示す土器の出土がないものの、20~24層の堆積時期をおよそ15世紀以降に比定し得るを考えたい。また、20層からイネ属が検出された事から水稻耕作が行われていた可能性を指摘できる。

ちなみに、大型掘立柱建物跡と同時期であると考えられる1号溝状遺構は、水田耕作土直下の本層(23層に相当か)より掘り込まれている。

25層~33層は水田耕作土で、調査時は重機により除去した。土層観察によると26層の堆積に至りこの河川跡は窪地でなくなり、水田が広がる平坦な景観が現出されたようである。34層の、およそ

3m間隔に溝が走るという有り様は畠などを惹起させる。年代については、調査区周辺が企業団地造成前には水田であった事から、最上面の33層がごく最近のものである事は確かだが、最下面の25層・26層については出土遺物にも恵まれず具体的には不明である。ただし、周辺の状況などから推定すると近世初頭の17世紀前半になる可能性がある。

河川跡

以上の層序観察によって得られた情報をまとめ、以下に各時代の河川跡の姿について述べる。

今回検出した河川跡は調査区のはば1/3を占める。一方の岸辺を確認したが、その対岸はさらに西方の呉羽山丘陵方向にあると考えられるが、現状の観察からはその存在をうかがい知る事はできない。

遺構確認面を追って精査を進めた結果、標高11.00m等の高線ラインを頂点に西方になだらかな傾斜をみせた。4層中より9世紀末～10世紀初頭の土師器塊が出土したが、同層が草木腐食土層である事をふまえると古代集落があった頃の河川跡の姿は、深さ1m以上の窪地ではあったが標高11m、つまり地表面付近にまで植物が生い茂る湿地であったと考えられる。

その後、中世に至るまでにこの地は8回の洪水を経験している。その間に堆積した土の厚さは確認しただけでも2mを超える。15世紀に至り、中世大集落が築かれて再び人々の生活がこの地に営まれると、治水事業が進んだのか、この地に洪水の痕跡を確認できなくなる。集落の中心は遺跡の東側であり本調査区はムラのはずれであったようで、この河川跡も古代のものとさほど模様を変えず、草木が生い茂る深さ1mほどの湿地であったようだ。ただし、前述したとおり、中世集落に伴う水田が営まれていた可能性がある。

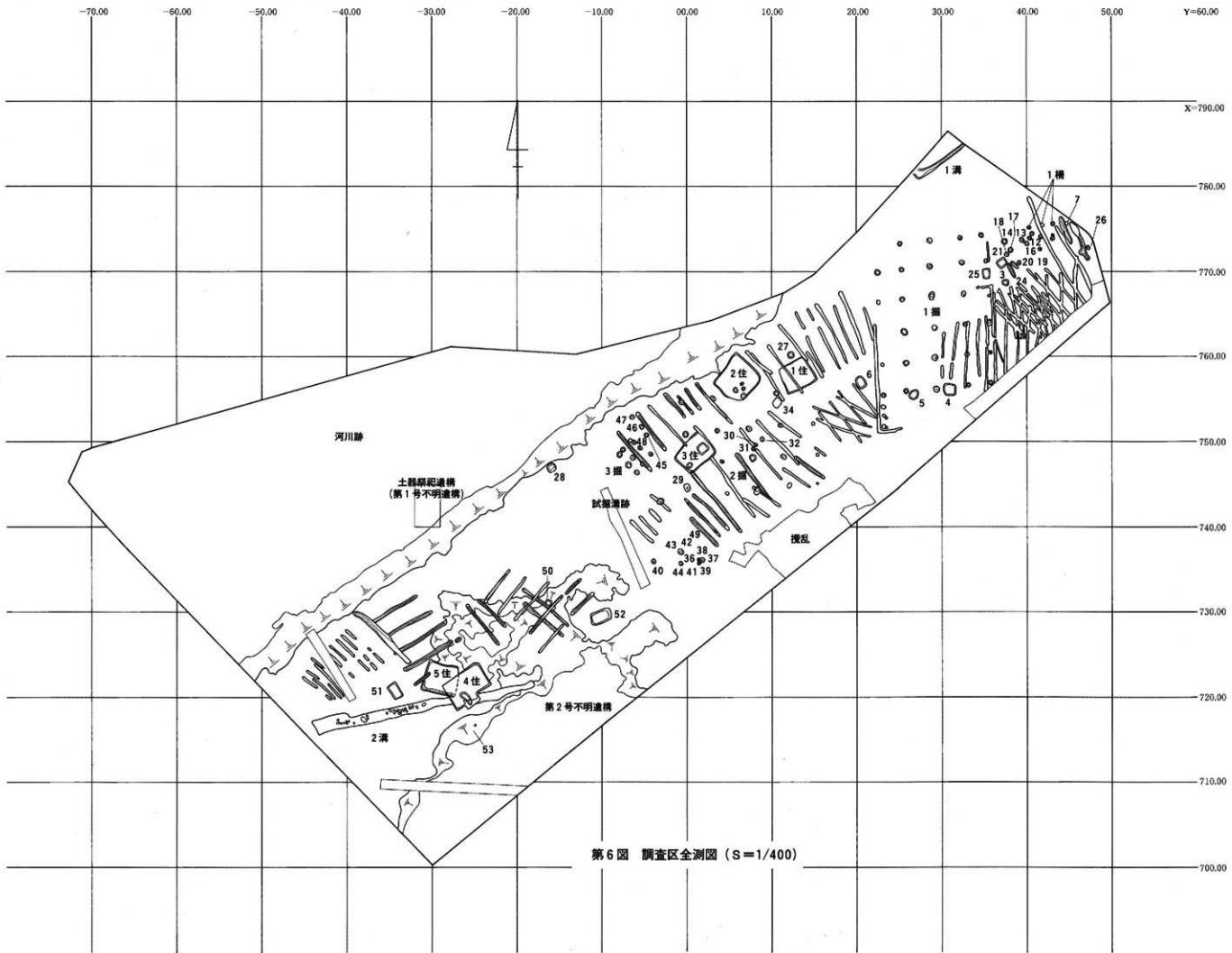
中世集落廃絶の後、近年に至るまでこの地は水田になったようで、計8面の水田面を確認することができた。この時点において河川跡の窪地は均されてしまい、現在のような一面の平坦な地形が現出されて、人々の記憶から河川跡の存在は忘却去られたようである。

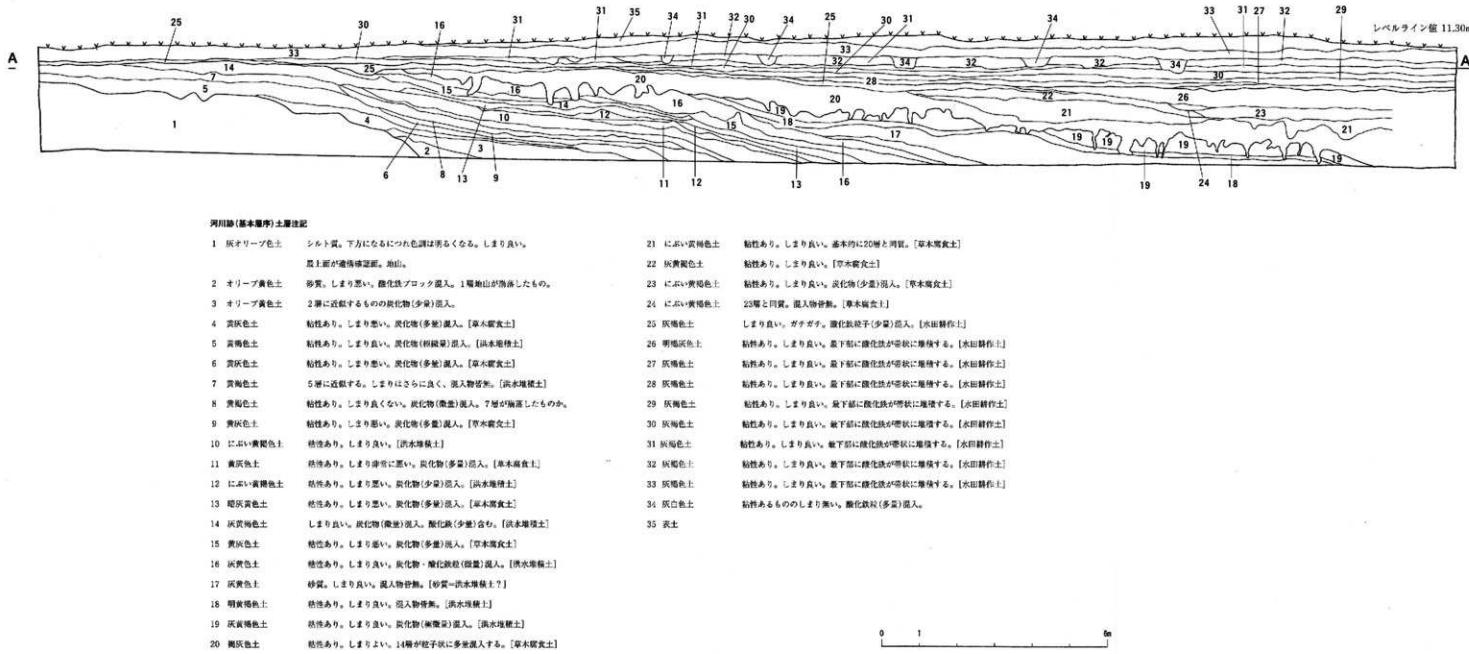
ちなみに調査終了間際に、河川跡の底を探るべく試掘溝を設定して掘削を試みた。軟弱な土質で絶えず土砂の崩落があったため図化記録ができなかったが、以下にその観察記録を書き留めておく。

基盤層の1層は標高約9mの深さに至り、水平堆積に移る。その上面には変わらず草木腐食土の4層が約20cmの厚さで堆積する。流水の存在をしめす砂粒などの痕跡は確認されなかった。1層の下方には約1mの厚さで、酸化鉄を多く含んだ青灰色粘土が堆積している。さらにその下方の標高約9.40mでは、酸化した赤銅色を呈す砂礫層に至る。これは湧水帯にあたりその水量は激しく、排水ポンプを設置しなければ5m×10mの試掘溝が半日で満水になる有り様であった。この地山1層以下の二つの層も、上方層と同様、西に向かって傾斜をみせている。おそらくこの二つの層が堆積した時点、すなわち古代以前の井

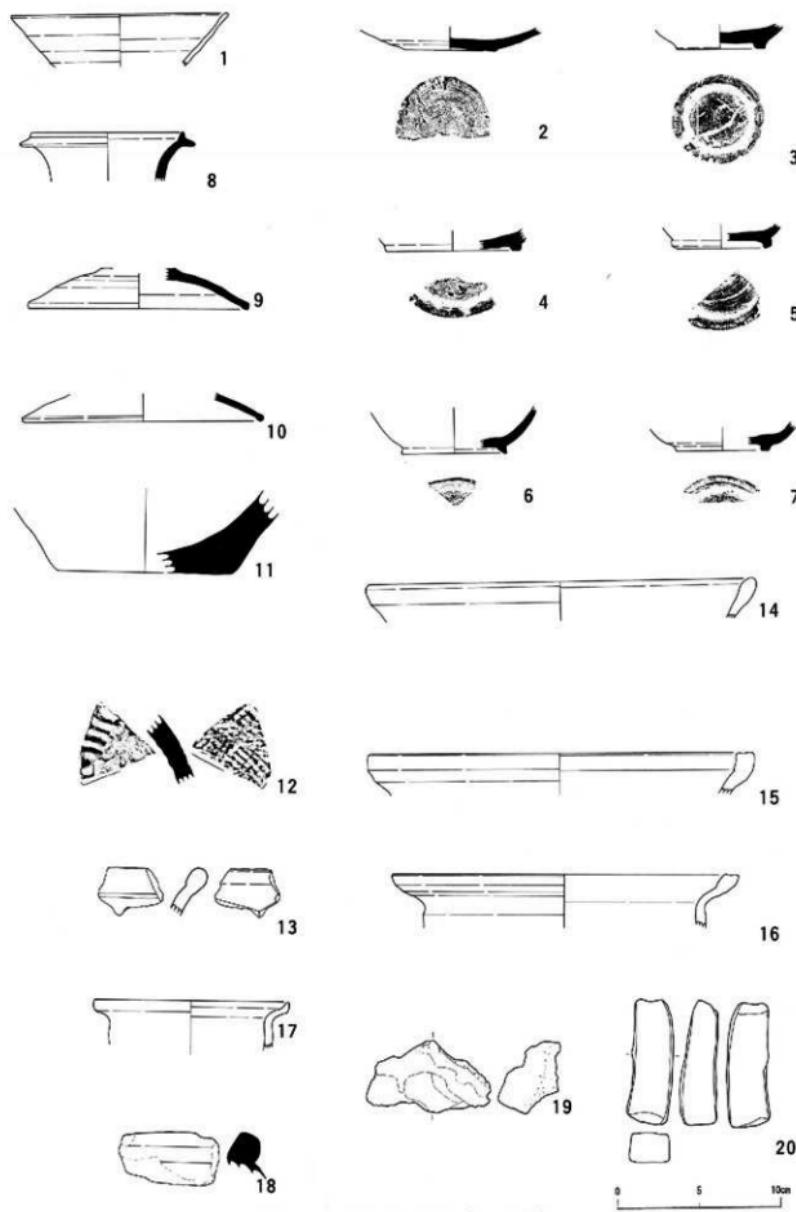


河川跡下層断面状況

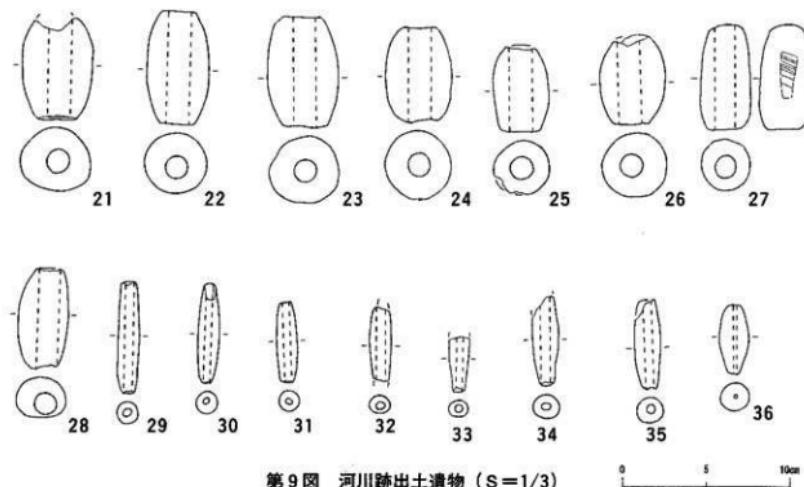




第7図 河川跡土層断面図 ($S=1/100$)



第8図 河川跡出土遺物 (S=1/3)



第9図 河川跡出土遺物 (S=1/3)

河川跡出土遺物

遺物番号	山土地点	種別	器種	口径(基体)	底径	高さ	重量(g)	胎土混入物	焼成	形態・手法の特徴・その他
1	河川跡	土師器	丸か	(13.5)				白色砂粒	良	ロクロ開き痕明瞭。内面赤み?
2	河川跡	須恵器	平口		(5.7)			白色砂粒	良・堅強	底部丸形軸孔切りぬ。
3	河川跡	須恵器	环口		5.4				不良	付高台。底部凹削切りぬ。堅強。
4	河川跡	須恵器	环口		(8.3)			白色針状物質	やや不良	付高台。底部凹削切りぬ。堅強。
5	河川跡	須恵器	环口		(5.5)			白色針状物質	やや良	付高台。底部凹削切りぬ。堅強。
6	河川跡	須恵器	环口		(3.5)			白色砂粒	良・堅強	付高台。
7	河川跡	須恵器	环口		(5.7)			白色砂粒・白色針 状物質	良・堅強	付高台。
8	河川跡	須恵器	長颈壺	(9.4)					良・堅強	
9	河川跡	須恵器	壺	(13.8)				白色針状物質	やや良	口沿外側にナガ調整。端部や丸 みを帯びる。
10	河川跡	須恵器	壺	(15.1)					やや良	
11	河川跡	須恵器	壺の底部 少		(10.9)			白色砂粒・白色針 状物質	やや良	
12	河川跡	須恵器	壺					白色砂粒	やや不良	全体内外面ともに當て具痕
13	河川跡	土師器	丸か					白色砂粒	良	口縁端部を折り返しにくく成型。
14	河川跡	土師器	丸か	(24.2)				白色針状物質	良	口縁端部を折り返しにくく成型。
15	河川跡	土師器	丸か	(24.1)				白色砂粒	やや良	口縁端部を折り返し方形に成型。
16	河川跡	土師器	壺	(21.6)				白色砂粒	やや良	口縁端部を折り返し方形に成型。
17	河川跡	土師器	小型壺	(12.2)					不良	底盤した口縁端部が直立する。
18	河川跡	須恵器	壺				70.2g	白色砂粒	やや良	口縁端部破片。堅強。
19	河川跡	鉄滓					85.0g			全ての面が均一。
20	河川跡	鐵石								

遺物番号	出土場所	種別	目録	全長	外径	孔径	重量(g)	胎土混入物	焼成	形態・手法の特徴・その他
21	河川跡	土錐		6.2	4.2	1.4	86.3	白色砂粒	やや良	
22	河川跡	土錐		6.9	3.8	1.4	86.6	白色砂粒	やや良	
23	河川跡	土錐		6.8	4.3	1.4	97.2	白色砂粒	やや良	
24	河川跡	土錐		5.8	4.1	1.4	87.6	白色砂粒	やや良	
25	河川跡	土錐		5.2	3.4	1.4	45.8	白色砂粒	やや不良	
26	河川跡	土錐		5.43	4.0	1.4	70.1	白色砂粒	やや良	
27	河川跡	土錐		6.4	3.1	1.35	58.4	白色砂粒	やや良	中位に雙形痕?
28	河川跡	土錐		6.1	3.0	1.3	35.1	白色砂粒	良	
29	河川跡	土錐		6.8	1.3	0.6	10.0	白色砂粒	良	
30	河川跡	土錐		6.1	1.3	0.4	8.5	白色砂粒	やや良	
31	河川跡	土錐		4.9	1.25	0.4	7.4	白色砂粒	良	
32	河川跡	土錐			1.3	0.55	6.5	白色砂粒	やや良	
33	河川跡	土錐			1.25	0.4	3.8	白色砂粒	やや良	
34	河川跡	土錐		5.45	1.6	0.6	11.3	白色砂粒	良	
35	河川跡	土錐		5.4	1.6	0.5	11.1	白色砂粒	良	
36	河川跡	土錐		5.8	4.1	1.4	87.6		やや良	

田川は現在のように遺跡の南方で東に蛇行することなく、そのまま直進ないしは西方に流れおり、この作用によって古代集落が立地することになる自然堤防が形成されたのではないだろうか。結果、この微高地に流れを遮られた井田川は東にその流れを変えて、現在のような流路を形成したのであろう。

出土遺物量は掲載分も含めて、須恵器片57点、土師器片268点、土錐16点、陶器15点、鉄滓1点、小石19点である。

図版には掲載していない出土遺物のうち、陶器は近世の越中瀬戸焼の破片であると思われるが、ほとんどが固化不可能な程の小破片ばかりである。その他には径10~15cmの川原石が2層から24層を掘削する中で出土した。洪水に伴い流れてきたものであろう。

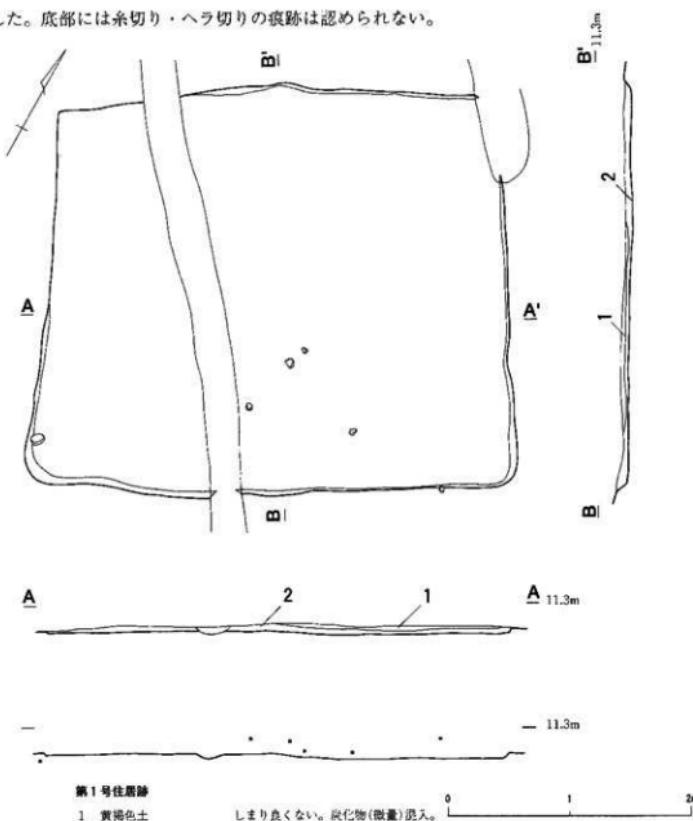
遺物の年代は4層の9世紀末~10世紀初頭におおよそ比定できる。摩滅の激しい破片もある事から、中には上流の別集落から流れ込んだものも含まれる可能性はある。土錐も例えば1ヶ所にまとまって出土するという事ではなく、河川跡全体から漫然と出土した。

第1号住居跡

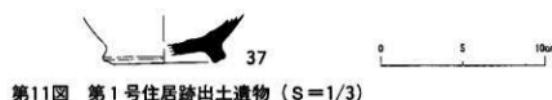
調査区中央や東側で検出した。第2~3号住居跡や第3号掘立柱建物跡で構成される、河川跡きわの遺構群のうちのひとつである。竪穴跡第4群と重複し、これに前出する。全面にわたって削平されており、遺構確認面から床面へは6cm程の深さを残すのみである。カマドや柱穴、壁周溝といった施設は検出されない。貼り床も構築されず、遺構の掘り方をそのまま床面として使用していたようだが、硬化面は確認されなかった。覆土には黄褐色シルトが充填されており、自然堆積の様相を呈している。

出土遺物は少なく、掲載分も含めて須恵器片1点と土師器片5点が出土したのみである。ほとんどが覆土の中~上位よりの出土で、僅かに掲載した壺の底部(37)の1点のみが床面近くより

出土した。底部には糸切り・ヘラ切りの痕跡は認められない。



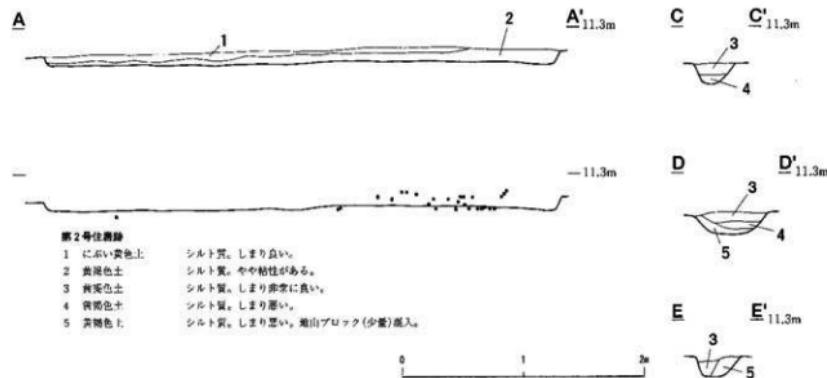
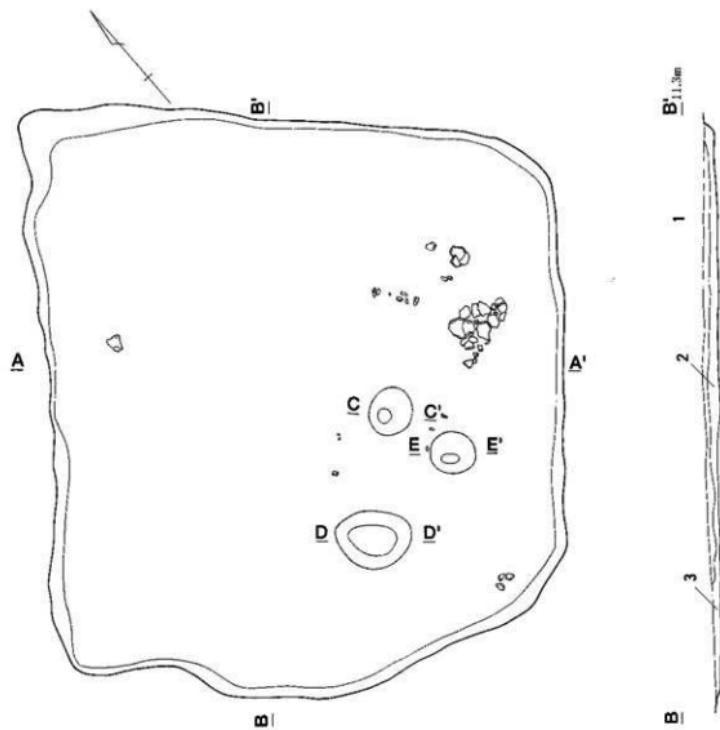
第10図 第1号住居跡 ($S=1/40$)



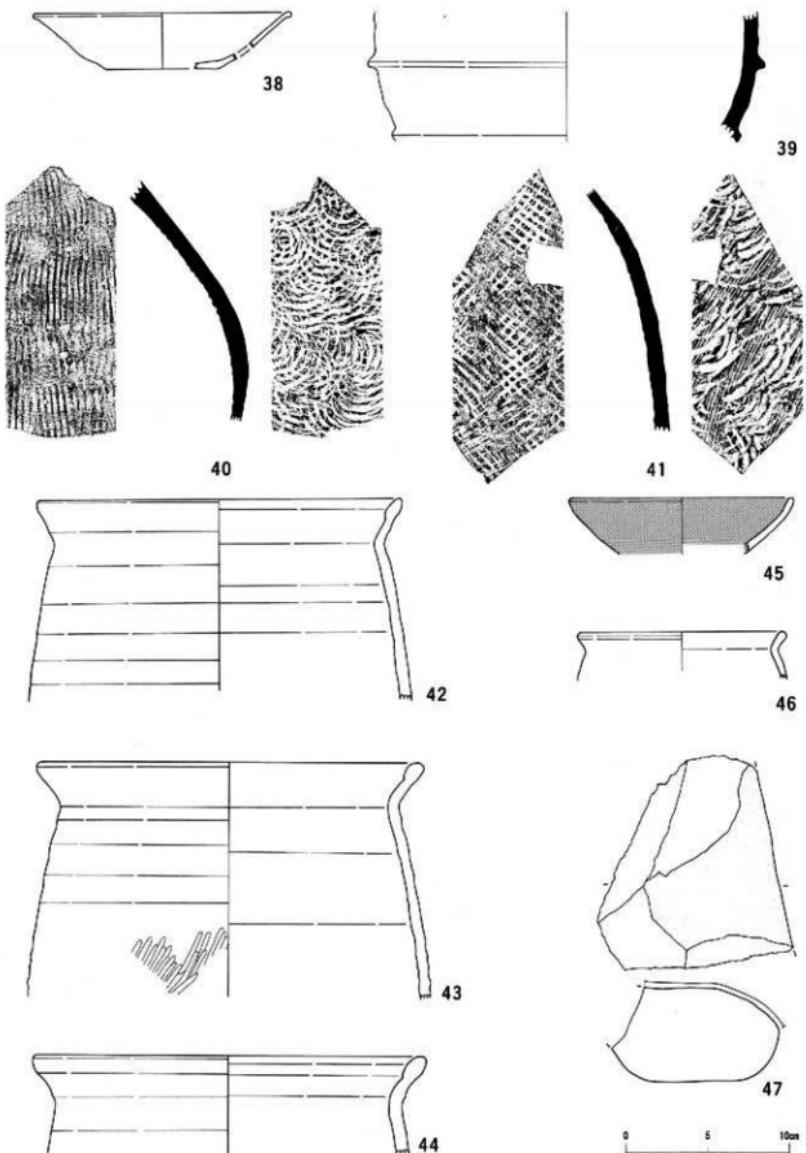
第11図 第1号住居跡出土遺物 ($S=1/3$)

第1号住居跡

遺物番号	出土場所	種別	器種	11種(基準)	基径	高さ	重量(g)	出土品目	測定	形態・手仕の特徴・その他
37	1号住居跡	鉛筆	墨		(6.4)			白色砂粒	直・整脚	付高台。



第12図 第2号住居跡 ($S=1/40$)



第13図 第2号住居跡出土遺物 (S=1/3)

第2号住居跡

調査区中央やや東側で検出した。前述の河川跡きわの遺構群のうちのひとつである。平面形態はやや不整の方形を呈しており、第1号住居跡ほどではないが全面に削平を受けている。

カマドや壁周溝などの施設は検出されなかった。遺構中央よりやや南方にはピットを3基検出した。その配置から3本の柱（大型の1本を小型の2本が支えるような）の姿を惹起させるが、土層断面では柱痕等その痕跡を見つけ出す事ができなかった。

貼り床は構築されず、掘り方をそのまま床面として使用していたようだ。硬化面は土器が集中して出土した付近に、部分的に認められたが全面には広がらない。覆土には第1号住居跡と同質な黄褐色シルトが充填されており、自然堆積の様相を呈している。

出土遺物量は掲載分も含めて、土師器片22点、須恵器片4点、石製品2点である。掲載した遺物はすべて床面直上もしくはその付近より出土した。

38は土師器の皿である。非常に薄手で他の塊とは異質な印象を受ける。39は双耳瓶の体部破片である。第4号住居跡出土（61）に後出する形式である。45は土師器の境で、内外面に赤彩を施している。47は石製品で、全面を磨耗しており床面直上から出土した事を考えあわせて砾石として用いられたと判断した。

2号住居跡出土遺物

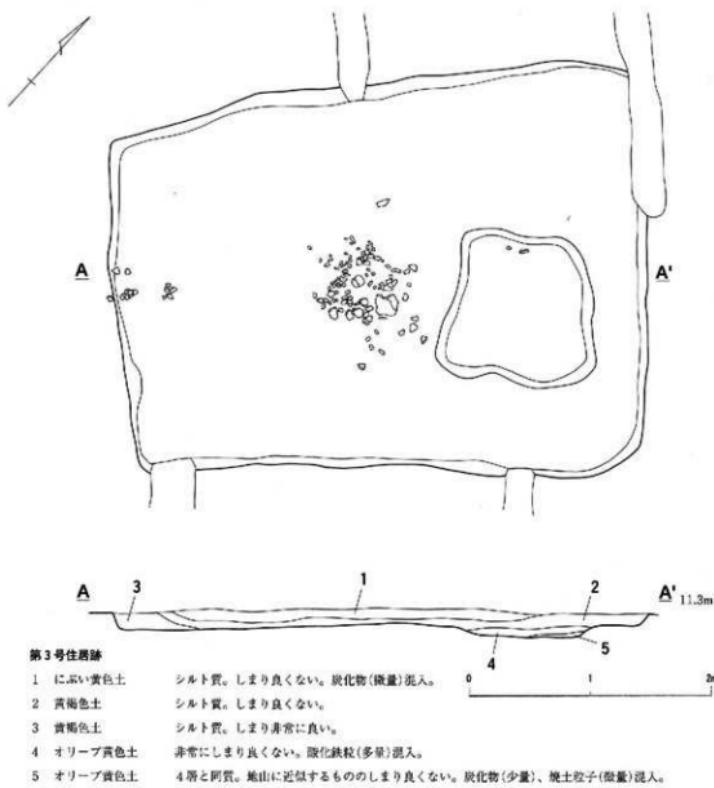
遺物番号	出土地点	種別	香椎	口径(厘米)	底径	高さ	重量(g)	出土器物	焼成	形態・手法の特徴・その他
38	2号住居跡	土師器	皿か	(15.1)	(6.8)	(3.5)		白色釉・白色均窓目	やや良	底面均窓目切り底。摩滅認者。
39	2号住居跡	須恵器	双耳瓶					白色砂粒	不良	
40	2号住居跡	須恵器	壺					白色釉・白色均窓目	良・堅微	肩・体部上方。質然釉かかる。
41	2号住居跡	須恵器	壺					白色砂粒	良・堅微	体部腹裏。内外面に埠さ、当て穴孔。
42	2号住居跡	土師器	壺	(26.5)				白色釉・白色均窓目	良	
43	2号住居跡	土師器	壺	(24.1)				白色砂粒	良	腹部中位にヘラ削り調整。
44	2号住居跡	土師器	壺	(24.2)				白色砂粒	良	
45	2号住居跡	土師器	壺	(14.0)				白色砂粒	やや良	内外面に赤彩？
46	2号住居跡	土師器	小型甌	(13.0)				白色砂粒	やや良	口縁部内面に擦付着。
47	2号住居跡	武石？					1151.3			表面が磨耗している。

第3号住居跡

調査区のはば中央で検出した。前述の河川跡きわの遺構群のうちのひとつである。畠跡第7・9群と重複し、これらに前出する。カマドや壁周溝は検出されなかった。遺構中央より東側には不整の隅丸方形のくぼみがある。上層断面の観察によると住居跡本体と同時に自然堆積によって覆土が充填されており、この事からこのくぼみは住居機能時には開口していたものと考えられる。貼り床は構築されず、掘り方をそのまま床面として使用していたようだ。硬化面は全く認められない。

出土遺物は掲載分も含めて土師器片115点、須恵器片4点、石（製品？）8点である。遺構の中央より集中して遺物（49～53など）が出土したが、これらは覆土上～中層よりのものである。多量の出土にもかかわらず接合しなかった事は、これらが別の場所から持ち込まれて投棄された土器片であり、本住居跡が機能終了後にゴミ捨て場として利用されていた事を示す。

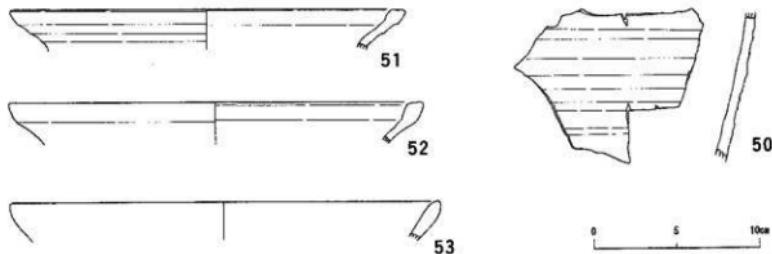
48は住居跡の西壁沿いの、床面に近い覆土中から出土した。はば住居跡の年代を示すものとしてよいであろう。



第14図 第3号住居跡 (S=1/40)



第15図 第3号住居跡出土遺物 (S=1/3)



第16図 第3号住居出土遺物 (S=1/3)

3号住居跡出土遺物

遺物番号	出土位置	種別	器種	口径(直径)	底径	高さ	重量(g)	黏土面入物	施成	形態・手法の特徴・その他
48	3号住居跡	須恵器	蓋	14.8				白色砂粒	やや不良	フマキは欠損。
49	3号住居跡	土師器	便					白色砂粒	良	刷毛外周に叩き痕
50	3号住居跡	土師器	蓋					白色砂粒	良	
51	3号住居跡	土師器	鍋	(24.2)				白色砂粒	やや良	11枚調部を折り返し方形に成型。
52	3号住居跡	土師器	鍋	(25.2)					良	11枚調部を折り返し方形に成型。
53	3号住居跡	土師器	蓋	(26.4)					良	11枚調部を折り返し丸く成形。

第4号住居跡

調査区の南方で検出した。前出の第1～3号住居跡が構成する遺構群とはやや離れた場所に位置する。丁度、本住居跡付近を頂点に東南方向に自然地形が緩やかな傾斜をみせる（2号不明遺構）。第5号住居跡と重複し、これに後出す。また2号溝状遺構とはこれに前出する関係にある。

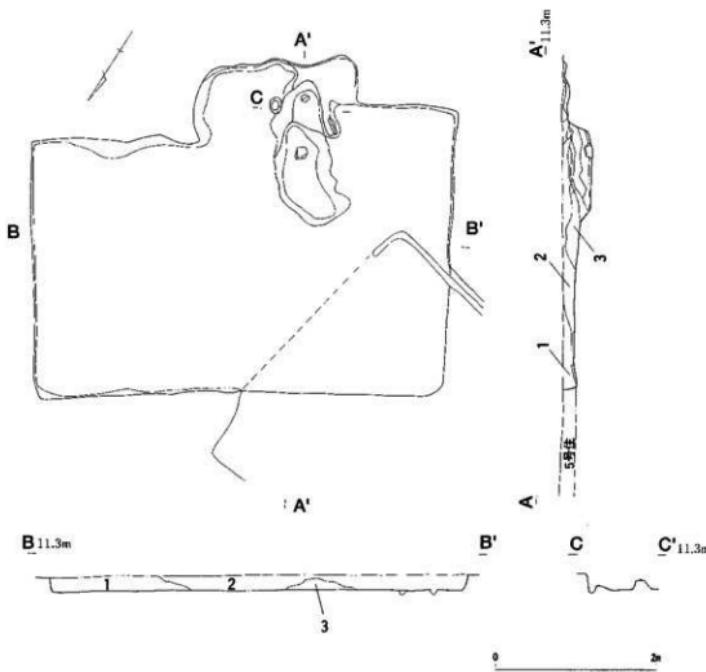
遺構の残存状況も良く、今回の調査で検出した堅穴住居跡の中では随一である。カマドは住居跡南壁に設置されている。カマドに付属するものなのか、住居跡のプランはこの南壁のみが一部張り出している。カマド焚口部は大きく広がっており、その端は住居跡のほぼ中央にまで至る。カマド燃焼部には支脚に用いられた切石が設置されており、約5cmの厚さで灰層を検出した。

土層観察によるとカマドの天井部は厚さ約10cmの白色粘土で構築されており、住居跡が廃絶されるのと同時に南方向からの土砂流入の圧力により崩落したようである。カマドのソデ構造を示すものは検出できなかった。天井部と同様に粘土で構築されていたものと推定されるが、詳細は不明である。

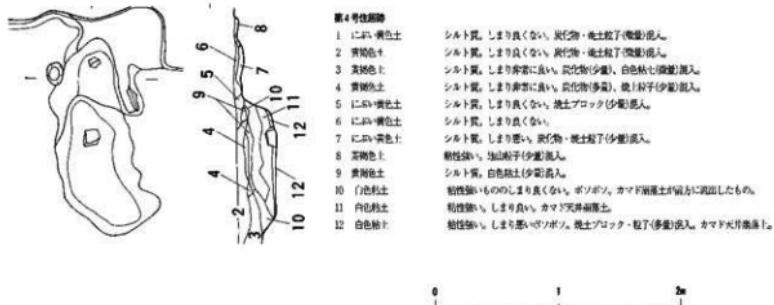
ただし、煙出部の脇に細長い切り石を検出し、あるいはソデの補強材として用いられたものかもしれない。煙出部のもう一方の脇には直徑約10cm、深さ20cmの小ピットがある。これもカマドに付随する可能性が高い。貼り床は構築されず、掘り方をそのまま床面として使用していたようだ。カマド付近にのみ床が硬化している。

出土遺物は掲載分も含めて、土師器252点、須恵器23点、石（製品）7点、土錐1点、鉄製品1点である。55、56、57は底部の高台状を意識したようなつくりで、土器祭祀遺構（1号不明遺構）出土の塊に類似する。61の双耳瓶は10世紀の第1四半期、65～66の小型・中型壺は9世紀第4四半期～10世紀第1四半期を指標する。

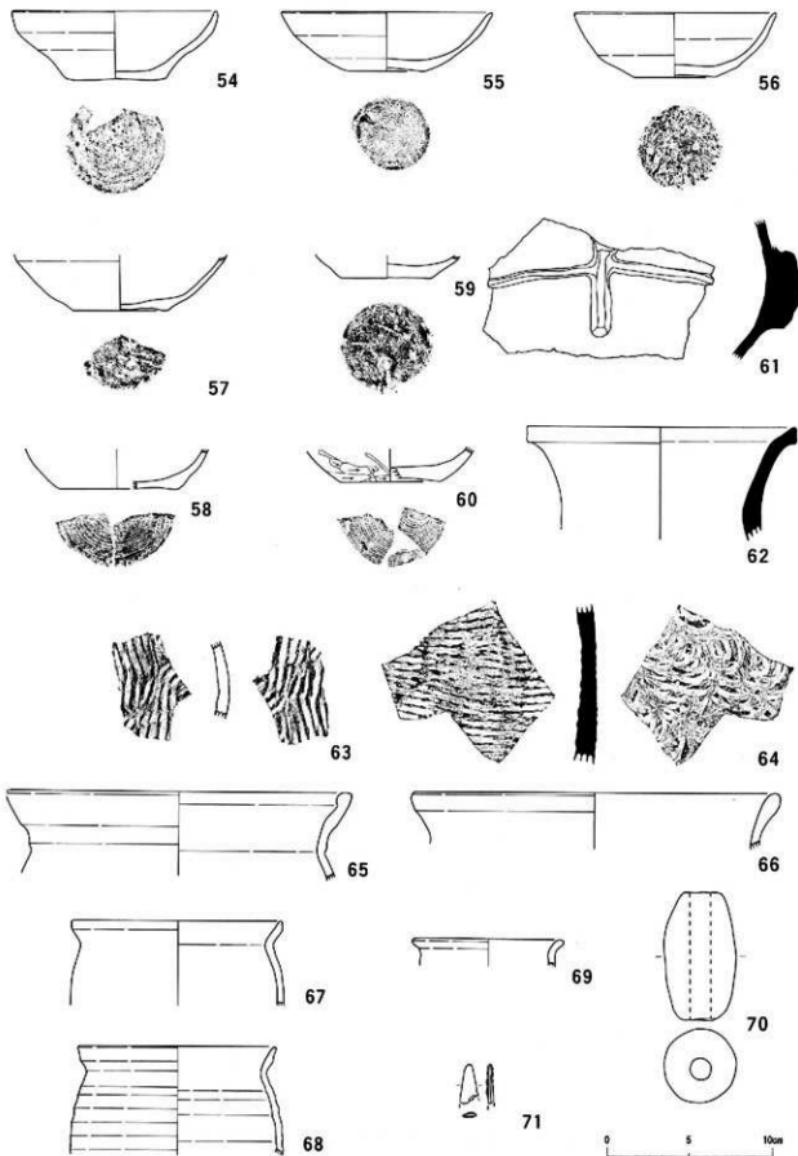
ちなみに、土師器小型壺を埋納した単独の柱穴跡である第53号土坑は本住居跡の丁度真南に位置し、出土遺物の年代もほぼ同じであり、このふたつの遺構が直接的・間接的な関係にあった事も推察できる。



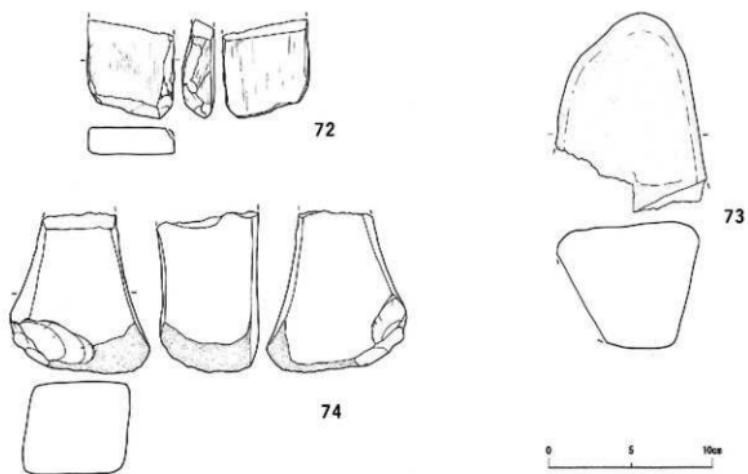
第17図 第4号住居跡 (S=1/60)



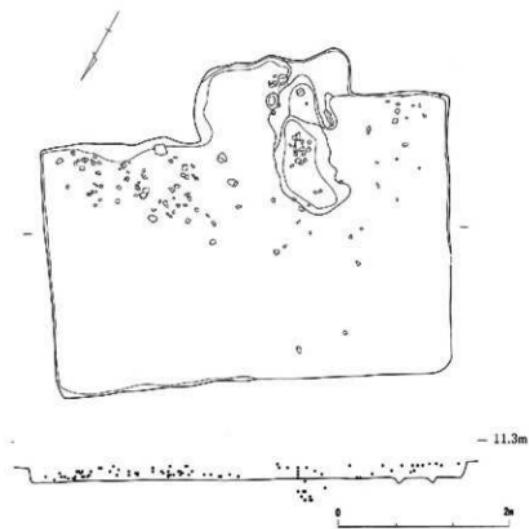
第18図 第4号住居跡力マド (S=1/40)



第19図 第4号住居跡出土遺物 ($S=1/3$)



第20図 第4号住居跡出土遺物 ($S=1/3$)



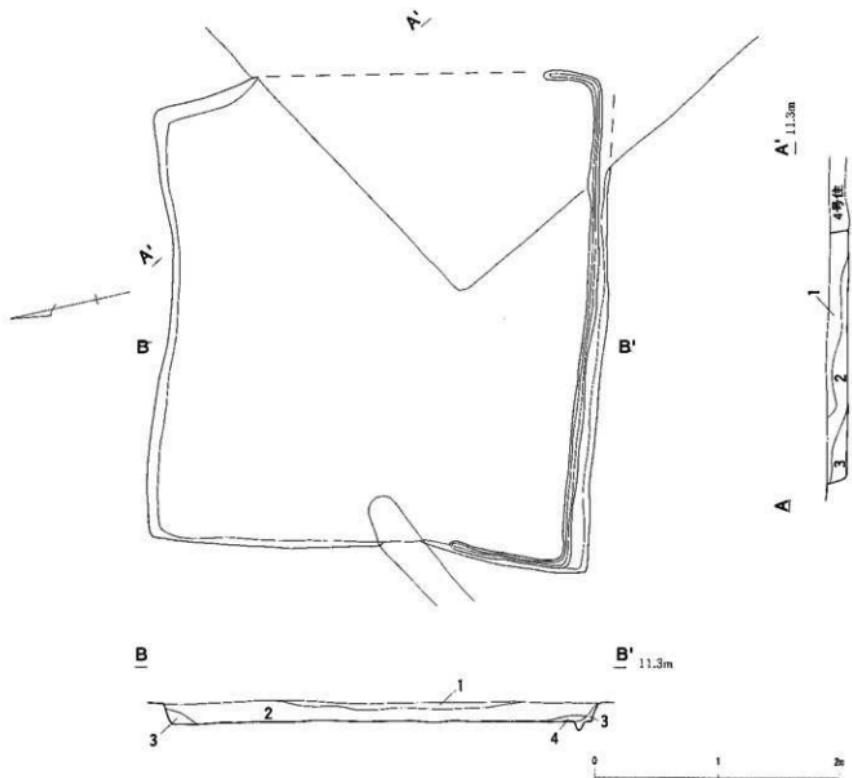
第21図 第4号住居跡遺物出土状況 ($S=1/60$)

4号住居跡出土遺物

遺物番号	出土地点	種別	器種	口径(直径)	底径	高さ	重量(g)	胎土深入物	構成	形態・手法の特徴・その他
54	4号住居跡	土器器	壺	(12.6)	(6.0)	4.35		素面粒	やや不良	底部には右回転系切り裏。内部を凸台状に残す。外側は口部器にナデ痕を施すが底部は無施設のまま。ロクロ底形が形成が困難に残る。内面は底盤が未調査のまま。
55	4号住居跡	土器器	壺	(13.0)	4.6	4.0		素面粒	良	底部には右回転系切り裏。内部にともに丁寧なナデ痕を施す。
56	4号住居跡	土器器	壺	12.4	5.0	4.1			不良	底部には右回転系切り裏。内部にともに丁寧なナデ痕を施す。
57	4号住居跡	土器器	壺		(3.6)				不良	底部には右回転系切り裏が墨面に認められる。全体の空氣感が新奇で調査等の評価は不明。
58	4号住居跡	土器器	壺		(7.0)			白色糞状物質	良	底部には右回転系切り裏。内外面とともに丁寧なナデ痕を施し、洗浄も良く丁寧な作り。
59	4号住居跡	土器器	壺		3.5			白色砂粒	不良	底部には右回転系切り裏。摩擦感が強められる。全体の空氣感が新奇で調査等の評価は不明。
60	4号住居跡	土器器	壺		(6.2)				良	底部には右回転系切り裏。内面に有機物が付着する。
61	4号住居跡	復原器	瓦片瓶						良、堅紙	
62	4号住居跡	復原器	壺	(10.0)				白色砂粒	やや不良	
63	4号住居跡	土器器	壺						やや不良	側部破片、内部面に叩き、当て具痕が認められる。
64	4号住居跡	復原器	壺					白色砂粒	良、堅紙	側部破片、内部面に叩き、当て具痕が認められる。
65	4号住居跡	土器器	壺	(21.4)				白色砂粒	良	口縁部分が切り落し丸く底面。
66	4号住居跡	土器器	壺	(22.4)					不良	口縁部分を丸く底面。
67	4号住居跡	土器器	小型壺	(12.9)					良	
68	4号住居跡	土器器	小型壺	(12.0)					良	
69	4号住居跡	土器器	小型壺	(9.4)					やや良	
70	4号住居跡	土器	全長8.05	外径4.6		孔径168.0	白色砂粒		良	
71	4号住居跡	刀子		残存長2.5	最大幅1.1	最大厚0.5	1.0			
遺物番号		出土地点	器種	全長	最大幅	最大厚	重量(g)	岩石の埋蔵		
72	4号住居跡	砾石		6.15	5.35	1.9	88.9	頁岩	全ての面を使用している。	
73	4号住居跡	自然石		9.35	12.4	8.0	1028.9	花崗岩	平緩面を持つ自然石。カマドの直近に出土し、全面に被熱を受けている。カマドの供給物か。	
74	4号住居跡	砾石		10.05	8.55	6.2	705.9	砂岩	ハチ状を呈する。それ程使い込まれていない。一部被熱を受けている。	

5号住居跡

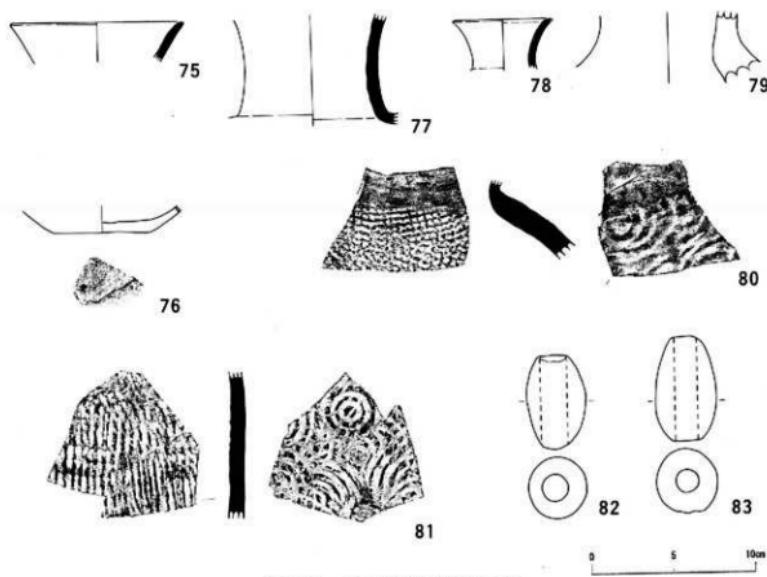
調査区南方で検出した。第4号住居跡、畠跡第13群と重複し、これらに前出する。カマドは検出できなかった。第4号住居跡によって壊されたのかもしれないが、掘り方の痕跡も見つからなかた事から第1～3号住居跡と同様にもともとカマドの無い住居跡であった可能性が高い。今回の調査で検出した住居跡のなかでは整周溝を唯一確認した。貼り床は構築されず、掘り方をそのまま床面として使用していたようだ。硬化面は認められない。覆上には暗褐色シルトが充填されてお



第5号住居跡

- | | |
|--------|------------------------------|
| 1 黄褐色土 | シルト質。しまり良くない。炭化物・焼土粒子(微量)混入。 |
| 2 暗褐色土 | シルト質。しまり良くない。炭化物(少量)混入。 |
| 3 褐褐色土 | シルト質。しまり非常に良い。地山粒子(多量)混入。 |
| 4 暗褐色土 | シルト質。炭化物(少々)混入。 |

第22図 第5号住居跡 ($S=1/40$)



第23図 第5号住居跡出土遺物

5号住居跡出土遺物

遺物番号	出土地点	種別	器種	口径(直径)	底径	高さ(寸)	胎土裏人物	焼成	形態・手法の特徴・その他
75	5号住居跡	須恵器	环	(10.0)					
76	5号住居跡	土師器	底		(6.0)				
77	5号住居跡	須恵器	瓶底						
78	5号住居跡	須恵器	小瓶	(6.0)			白色砂粒	良・堅致	
79	5号住居跡	土師器	渠				白色砂粒	不良	裏漆破片。焼成が悪く土師質。
80	5号住居跡	須恵器	渠				白色砂粒	良・堅致	道溝～肩部破片。
81	5号住居跡	須恵器	渠						体部破片。
遺物番号	出土地点	種別	器種	全長	外径	孔径	重量(㌘)	胎土裏人物	焼成
82	5号住居跡	土錐		5.6	3.8	1.6	61.8		やや良
83	5号住居跡	土錐		6.5	4.0	1.4	87.4		やや良

り、自然堆積の様相を呈する。出土遺物量は掲載分も含めて土師器片25点、須恵器片7点、土錐2で、全てが覆土中～上層よりのものである。

ちなみに「北」と朱書きされた土師器碗を出土した土器祭祀遺構の真北に本住居跡は位置しており、出土遺物の年代も凡そ合致する事から、二つの遺構は直接的な関係にあった可能性がある。

第53号土壙

調査区南側、自然地形の落ち込みの中程の標高約10.95mの位置で検出した。

土層断面の観察から柱の抜き取られた痕跡を持つ柱穴であると判断したので、周囲を注意深く精査しこれに並ぶ柱穴等を探したが、何の存在も確認できなかった。ゆえに本遺構は、単独で存在す

る柱穴であると判断せざるを得ない。

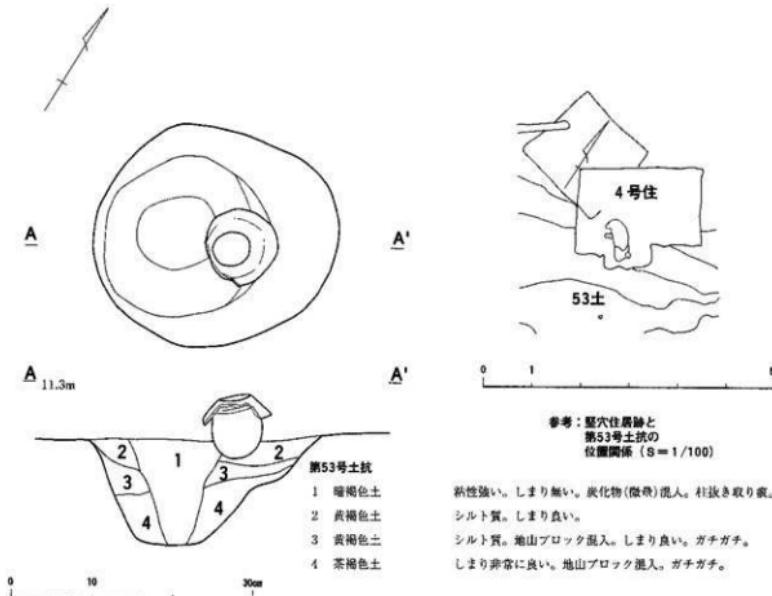
柱痕から推定される往時の柱の直径は32cmで、これを固定するために、つき固めた縄の良い土を3度投入している。

柱を抜き取った後に土師器の壺の底部(85)を蓋にした小型壺(84)を埋納したようである。85は上師器の中型壺の体部～底部の破片で、割れ口を摩滅させるなど蓋として使う際の二次成形は施していない。

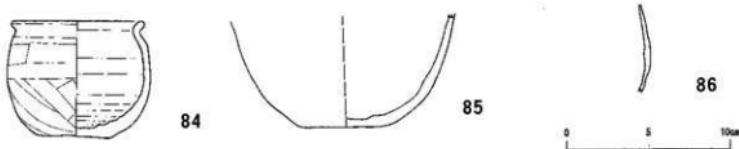
なお調査進行の便宜上、本来の遺構確認面より10cmほど下げる本遺構を検出したために、検出状況(第24図・写真図版3)では小型壺の上部まであらわになっているが、往時の姿は「蓋」が僅かに露頭するかしないかの状態であったと思われる。

この小型壺の内部には土が充填されており、炭化物の混入が認められたために自然化学分析を実施した。結果、種実遺体は検出されなかった。一方で動物に由来するリン酸が高濃度で認められた。

本遺構は第4号竪穴住居跡の丁度真南に位置する。出土遺物の年代もほぼ同じであり、このふたつの遺構の間に直接的・有機的な関係があった可能性もある。



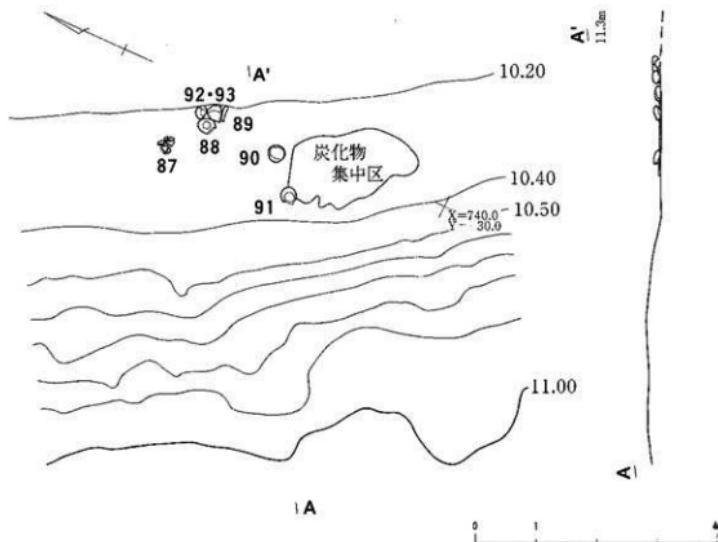
第24図 第53号土坑 (S=1/6)



第25図 第53号土坑出土遺物 (S=1/3)

53号土坑出土遺物

遺物番号	出土地点	種別	器種	口径(毫米)	底径	厚さ	出土人物	状況	形態・手仕の特徴	その他
84	53号土坑	土器部	小型甌	8.3	4.4	7.3	白色砂粒	良	体部外側面に下方に向かう方向へのラブリ痕。底部には圓弧形切り落が認められるものの、壊滅が激しく詳細は不明瞭。内面には全体的にコクロ成形痕が明瞭に残る。	
85	53号土坑	土器部	甌		5.3		白色砂粒	良	底部には斜面形切り落が認められるものの、壊滅が激しく詳細は不明瞭。削れ口には鋸歯を施す。	
86	53号土坑	土器部	甌				白色砂粒	やや不良	上縁唇部の体部破片であると見われる。	



第26図 土器祭祀遺構 (S=1/80)

土器祭祀遺構（第1号不明遺構）

調査区中央部やや西方の河川跡より検出した。川べり（湿地きわ）に設けられた土器祭祀遺構である。7つの土師器塊と1ヶ所の炭化物集中区で構成されている。

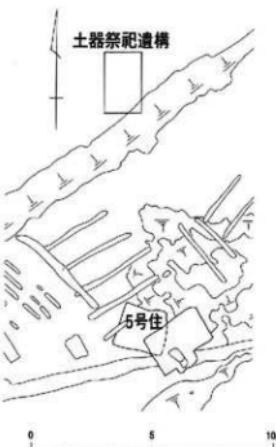
河川跡の検出作業の途中で、堆積土の地山直上の4層（第7図参照）を取り除いたところ、検出したものである。

炭化物集中区は約0.6m²の範囲で認められた。約0.5cmの厚さがあり、分布形状は方形に近いものの不整である。平面の形状から性格をうかがう事はできなかった。また、焼土など火を燃やした痕跡は全く見受けられなかったことから、これらの炭化物は燃焼の結果もたらされたものではなく、編み物などの有機物が腐食したものと判断し、調査中に自然科学分析を実施して解明を期した。

なお、この炭化物を草木腐食土層の4層に由来するものだと疑いも調査中に抱いたが、分析の結果、両者が全く異なる植物遺体である事が判明したため、本遺構に伴うと判断した。

土師器の塊は、標高10.20~10.40m間にほぼ正位を保ちながら据えられたままの状態で7点出土した。東側から順に、90と91が炭化物集中区の脇に、そして比高差数cmをもって下った場所に88・89・92・93が位置する。92と93は重なって（92が下93が上）いた。同じレベルのやや西方には「北」の朱書きの記された87が位置する。

炭化物集中区の隣に土師器の塊が並べて置かれていた。そのうちのひとつは朱書き土器である。往時は湿地であっただろう河川跡という立地。以上の3点から、本遺構は土器を用いた祭祀遺構であると判断した。



土器祭祀遺構と住居跡の位置関係 (S=1/200)



87



90



88



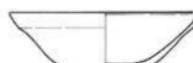
89



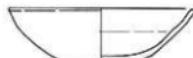
91



92



93



94



0 5 10m

第27図 第1号不明遺構出土遺物 (S=1/3)

土器祭祀遺構出土遺物

遺物番号	出土地点	種別	器種	口径(直径)	底径	部高	出土風入物	組成	形態・手縫の特徴・その他の
87	上部祭祀遺構	土加器	壺	12.3	6.0	4.3	白色小石	良	底部には左回転角切り底。底部外側の中段には「北」の墨書き。底部を高台状に残す。外縁は口縁部にナガ調整を施すが体部は無調整のままで、ロクロ成形底が明顯に残る。内面は見込み部が未調整のままで、口縁部の外縁は無調整。3世紀後葉四四型。
88	土器祭祀遺構	土加器	壺	13.2	6.3	4.1	白色小石	良	底部には右回転角切り底。底部を窓か状に残す。外縁は口縁部にナガ調整を施すが体部は無調整のままで、ロクロ成形底が明显に残る。内面は見込み部が未調整のままで、口縁部の外縁は無調整。3世紀後葉四四型。
89	土器祭祀遺構	土加器	壺	(14.2)	4.8	4.0	白色小石	不良	底部には右回転角切り底。底部を窓か状に残す。外縁は口縁部にナガ調整を施すが体部は無調整のままで、ロクロ成形底が明显に残る。内面は見込み部が未調整のままで、口縁部の外縁は無調整。10世紀第1四半期。
90	土器祭祀遺構	土加器	壺	13.0	5.6	5.0	白色砂粒	やや良	底部には右回転角切り底。底部を窓かに高台状に残す。外縁は口縁部にナガ調整を施すが体部は無調整のままで、ロクロ成形底が明显に残る。内面は全体にナガ調整が施され、内底面は内黒釉。唇部で口縁部が削り取られた。10世紀第1四半期。
91	土器祭祀遺構	土加器	壺	13.4	6.6	4.6	白色小石	不良	底部には右回転角切り底。底部を高台状に残す。外縁は口縁部にナガ調整を施すが体部は無調整のままで、ロクロ成形底が明显に残る。内面は体部にナガ調整を施すが、内底面は未調整のままで、底底が膨らむ。
92	土器祭祀遺構	土加器	壺	(10.0)	5.1	3.7	白色小石	良	底部には左回転角切り底。底部を高台状に残す。外縁は全面にナガ調整を施す。内底面は内黒釉。唇部で口縁部が削り取られた。薄手で丁寧なつくり。
93	上部祭祀遺構	土加器	壺	(11.4)	4.9	3.5	白色砂粒	やや不良	底部には右回転角切り底。底部を窓かに高台状に残す。外縁は全面にナガ調整を施す。内底面は内黒釉。唇部で口縁部を陰きナガ調整を施す。薄手で丁寧なつくり。



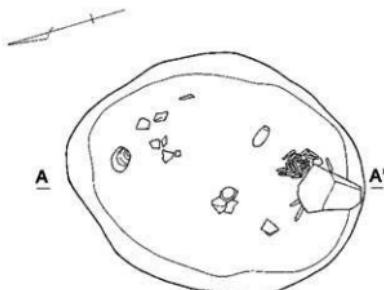
作業風景



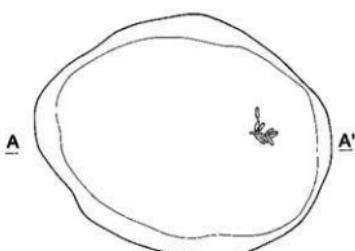
遺跡見学会

第5号土坑

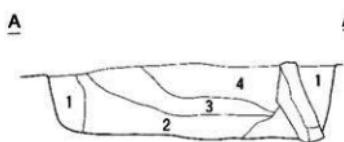
調査区中央部やや西方の、第1号掘立柱建物跡の至近で検出された。他の古代遺構とはやや離れた位置に単独で所在している。長軸62cm、短軸49cm、深さ15cmを測る楕円形の平面プランを呈し、坑底はほぼ平坦である。上層観察によると、全長約20cmの花崗岩が坑底に置かれ、炭化物を多量に含む粘性の強い黒色土が最下層（2層）ならびにその直上（3層）に堆積し、その後堅穴住居跡などの古代遺構に特有の黄褐色シルトが最上層に堆積する（4層）。



遺物出土状況（上方）



遺物出土状況（下方）



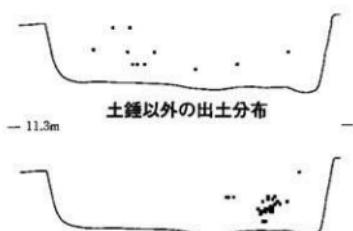
第5号土坑

- 1 黄褐色土 シルト質。しまり無い。块山ブロック・粒子(多量)混入。
- 2 黑色土 粘性強い。块山粒子混入。
- 3 黑色土 粘性強い。4層が堅穴住居に混入。
- 4 にじい黄褐色土 シルト質。しまり良い。

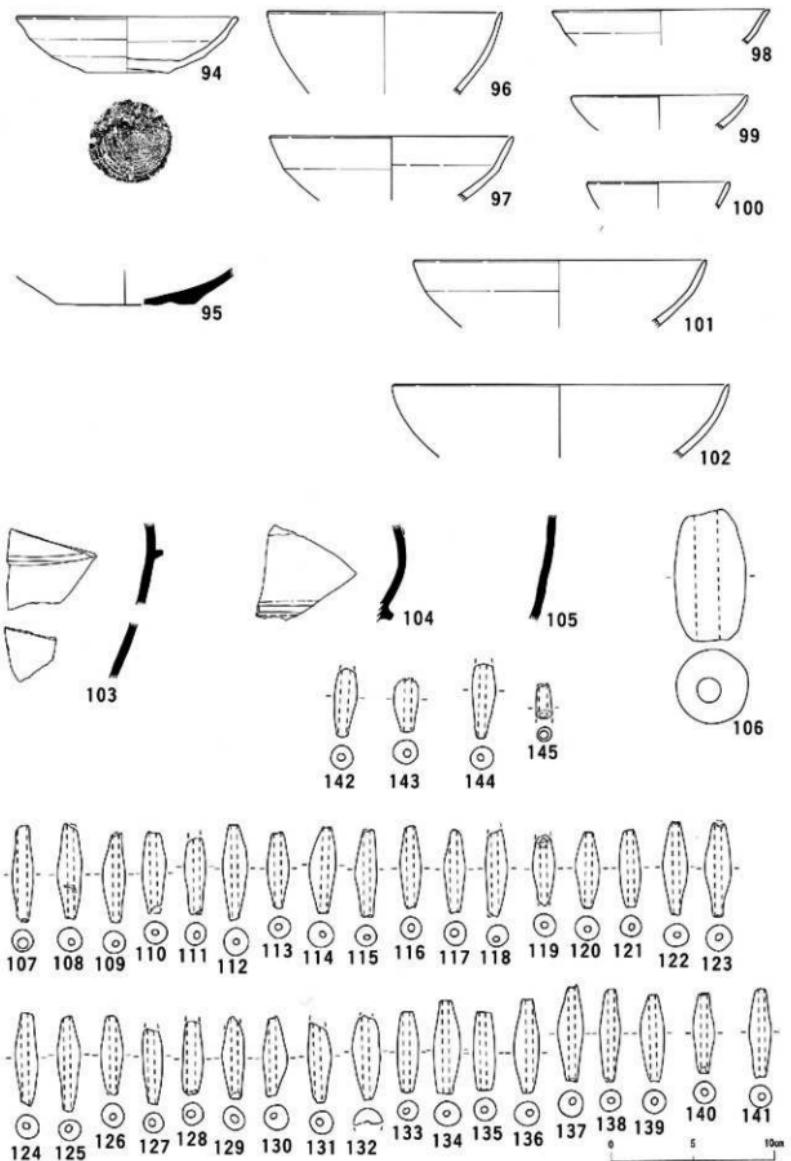
土錐が、計40点（大型1点・小型39点）一括して出土した。そのほぼ全てが2・3層より、花崗岩に寄り添うようにまとまって出土している。この2・3層は、その土質的特長から何かが腐食した結果に形成されたものとも考えられる。これら土錐の検出状況は、土錐が何か（網？）に付随したままのかたちで本遺構に投棄、あるいは収納されていた事を示唆している。

他の出土遺物は、未掲載分も含めて土師器片29点、須恵器片4点である。図版に掲載したものはすべて2・3層より出土したものである。94の土師器塊は、その成形・調整方法が第1号不明遺構出土のものに近似しており同型式であると思われる。つまり多量の土錐も含めて、本遺構は9世紀末～10世紀初頭に營まれたものと考える。

— 11.3m —



第28図 第5号土坑 ($S=1/10$)



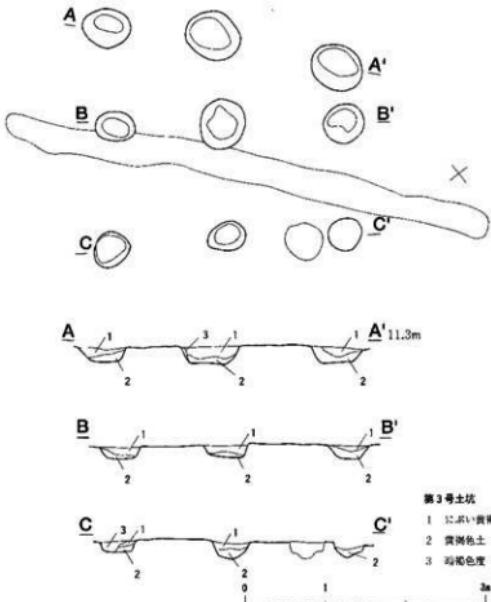
第29図 第5号土坑出土遺物 (S=1/3)

5号土坑出土遺物

遺物番号	出土地点	種別	形態	口径(基様)	底径	高さ	施主品入物	焼成	形態・手法の特徴・その他	
94	5号土坑	土器	甕	(13.8)	5.2	3.8	白色砂粒 白色粉粒状物質	やや良	底面には人型転がり痕、底部を 窓内状に焼す。外壁は口縁部にナ ラ木状を呈する。各部に火炎の跡 がある。内壁はクロス状の構造が現 れる。内底は外側にナラ調板を焼す が、内底面は本調査のまま。	
95	5号土坑	須恵器	蓋か		(8.6)		白色砂粒	不良	壊滅がはじらしく。	
96	5号土坑	土器	甕	(14.7)			ガラス質小石	やや良	内外面とともに全面的にナラ調板 を施す。	
97	5号土坑	土器	甕	(13.2)			ガラス質小石	良	体部中位で内側に削面する。	
98	5号土坑	土器	甕	(13.6)			白色砂粒 白色粉粒状物質	やや良	体部中位で内側に削面する。	
99	5号土坑	土器	甕	(11.0)			白色小石	不良		
100	5号土坑	土器	甕	(8.9)			白色砂粒 白色粉粒状物質	やや良		
101	5号土坑	土器	甕	(18.3)			白色砂粒 白色粉粒状物質	やや良	体部中位で内側に削面する。	
102	5号土坑	土器	甕	(24.0)			白色砂粒 白色粉粒状物質	やや良	体部中位で内側に削面する。	
103	5号土坑	須恵器	双耳瓶				白色砂粒	良・堅硬		
104	5号土坑	須恵器	双耳瓶				白色砂粒	良・堅硬		
105	5号土坑	須恵器	双耳瓶?				白色砂粒	良・堅硬		
度物番号	出土地点	種別	形態	全長	外径	孔径	重量(g)	施主品入物	焼成	形態・手法の特徴・その他
106	5号土坑	土師		8.2	4.6	1.5	150.1	白色砂粒	良	
107	5号土坑	土師		6.0	1.4	0.6	7.3	白色砂粒 白色粉粒状物質	良	
108	5号土坑	土師		6.0	1.5	0.4	10.0	白色砂粒 白色粉粒状物質	やや良	
109	5号土坑	土師		5.6	1.4	0.4	7.9	白色砂粒	良	
110	5号土坑	土師		5.1	1.4	0.4	9.0	白色砂粒	やや良	
111	5号土坑	土師			1.4	0.4	7.0	白色砂粒	良	
112	5号土坑	土師		5.9	1.7	0.4	12.4	白色砂粒	良	
113	5号土坑	土師		4.8	1.4	0.5	6.4	白色砂粒	良	
114	5号土坑	土師		5.4	1.7	0.4	11.5	白色砂粒	良	
115	5号土坑	土師		5.5	1.3	0.4	7.6	白色砂粒 白色粉粒状物質	良	
116	5号土坑	土師		5.2	1.4	0.45	7.1	白色砂粒	良	
117	5号土坑	土師		5.2	1.5	0.5	7.9	白色砂粒	良	
118	5号土坑	土師		5.4	1.4	0.4	8.0	白色砂粒	良	
119	5号土坑	土師			1.4	0.4	6.3	白色砂粒	良	
120	5号土坑	土師		4.7	1.5	0.4	8.1	白色砂粒	良	
121	5号土坑	土師		4.9	1.3	0.4	7.3	白色砂粒	良	
122	5号土坑	土師		5.8	1.55	0.45	10.8	白色砂粒	良	
123	5号土坑	土師		5.9	1.6	0.45	11.4	白色砂粒 白色粉粒状物質	良	
124	5号土坑	土師		5.4	1.5	0.4	9.5	白色砂粒	良	
125	5号土坑	土師		5.8	1.5	0.4	9.6	白色砂粒	良	
126	5号土坑	土師		6.0	1.4	0.4	7.7	白色砂粒	良	
127	5号土坑	土師		4.95	1.5	0.4	9.1	白色砂粒	良	
128	5号土坑	土師		4.7	1.3	0.4	6.4	白色小石 白色粉粒状物質	良	

5号土坑出土遺物

遺物番号	出土地點	種別	器種	全長	外径	孔径	重量(g)	粘土混入物	焼成	形態・手法の特徴・その他の
129	5号土坑	土器		4.6	1.4	0.5	6.6	白色砂粒	良	
130	5号土坑	土器		5.1	1.5	0.5	6.7	白色砂粒	良	
131	5号土坑	土器		5.0	1.6	0.4	8.6		良	
132	5号土坑	土器		5.0	1.5	0.45	7.7	白色砂粒 白色灰状物質	良	
133	5号土坑	土器		5.3	1.7	(4.5)	7.0	白色砂粒 白色灰状物質	良	
134	5号土坑	土器		5.0	1.3	0.4	8.2	白色砂粒	良	
135	5号土坑	土器		5.8	1.7	0.4	13.4	白色砂粒 白色灰状物質	良	
136	5号土坑	土器		4.9	1.4	0.4	9.8	白色砂粒 白色灰状物質	良	
137	5号土坑	土器		5.9	1.35	0.45	11.5	白色砂粒	良	
138	5号土坑	土器		6.0	1.65	0.4	12.3	白色砂粒	良	
139	5号土坑	土器		5.8	1.3	0.4	7.5	白色砂粒	良	
140	5号土坑	土器		5.5	1.4	0.45	8.0	白色砂粒	良	
141	5号土坑	土器		5.0	1.4	0.4	7.2	白色砂粒	良	
142	5号土坑	土器			1.5	0.5	7.1	白色砂粒	良	
143	5号土坑	土器			1.55	0.5	6.2	白色砂粒	良	
144	5号土坑	土器			1.45	0.4	7.9	白色砂粒	良	
145	5号土坑	土器			2.2	1.0	3.5	白色砂粒	良	



第3号掘立柱建物跡

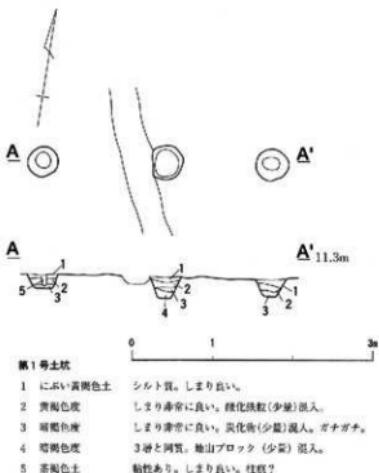
前述した、河川跡きわの遺構群を構成するもののうちの一つである。不整形ではあるが、2間×2間の総柱建物である。畠跡第7群と重複し、これに前に出する。覆土は第1～3号住居跡と同じ黄褐色シルトが充填されており、出土遺物がないものの同時期と判断した。

柱根は検出されなかった。隣地区で検出された掘立柱建物に比べると、脆弱なつくりである。

第3号土坑

- | | |
|-----------|-------------------------|
| 1 にいぶ黄褐色土 | シルト質。しまり良くない。炭化物(少量)混入。 |
| 2 黄褐色土 | シルト質。しまり良くない。炭化物(少量)混入。 |
| 3 黄褐色土 | しまり良い。 |

第30図 第3号掘立柱建物跡 (S=1/60)



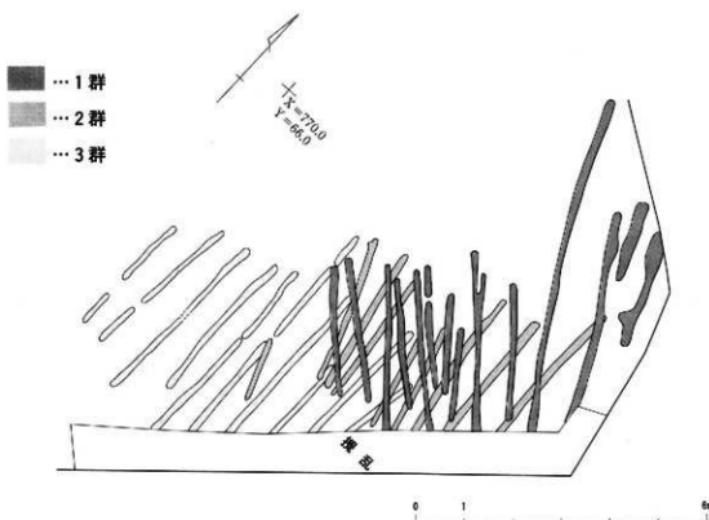
第31図 第1号柱列跡 (S=1/60)

第1号柱列跡

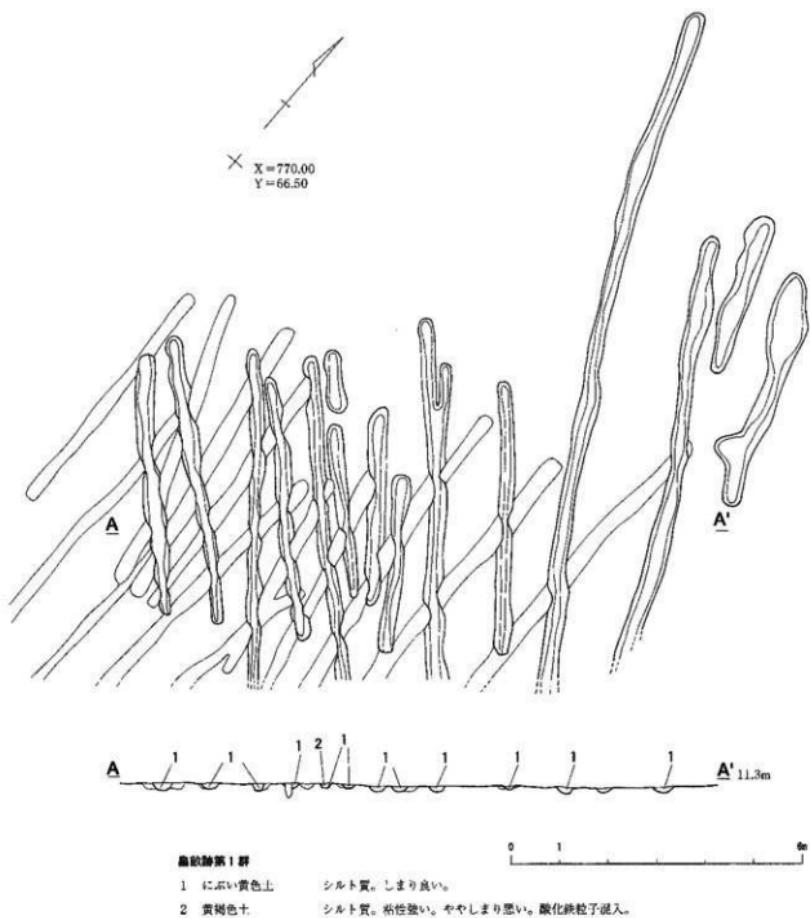
調査区北西部、土坑が密集している周辺で検出した。畠跡第1群と重複しており、これに前出する。

覆土は主に竪穴住居跡と同じ、しまりの良い黄褐色土シルトで占められており、出土遺物は無いが古代に属すると判断した。

柱痕が確認された事から周囲の土坑を精査したところ、同様の覆土を持つ土坑が1.5m間隔で直線上に並んだために、柱列と判断した。あるいは周辺の土坑の中にも本遺構に付随するものがあるかもしれない、掘立柱建物が存在する可能性も捨てきれないが、現時点では確認できなかった。



第32図 畠跡1・2・3群 模式図 (S=1/200)



第33図 鳥歯跡第1群 ($S=1/100$)

鳥歯跡第1群

調査区北東部で検出した。第2・3群と重複し、これ等に後出す。主軸の方位はおよそN-40°-Wをしめす。覆土は粘性の強い黄褐色土を中心に充填されている。各歯溝の間隔は不整であり、規模も大小様々である。あるいは別群とすべきものをも同一にしてしまった恐れもあるが、現時点では新たな可能性を探り出す事はできなかった。出土遺物は図版に掲載した2点のみである。

いずれも覆土中～上位より出土した。

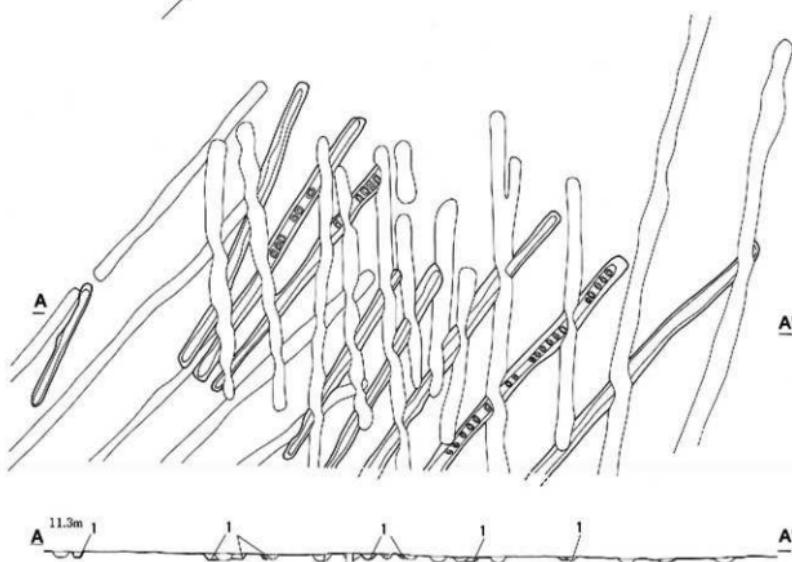


第34図 島歿跡1群出土遺物 ($S=1/3$)

島歿跡第1群出土遺物

遺物番号	出土地点	種別	否格	全長	外径	孔径	重量(g)	黏土混入物	焼成	形態・手法の特徴・その他
146	第1群2漢	土鍤		5.35	1.5	0.35	12.0	白色砂粒 白色針状物質	良	
147	第1群5漢	須志器	否格	口径(基部) 底径	器高	粘土混入物	燒成			形態・手法の特徴・その他
147	第1群5漢	須志器	否格	(12.4)		白色砂粒	良・堅硬			

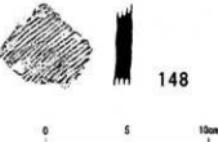
X
 $X = 770.00$
 $Y = 66.50$



島歿跡第2群
1 黄褐色土
粘性強い。しまり良い。地山粒子(少量)混入。
第35図 島歿跡第2群 ($S=1/100$)

島歿跡第2群出土遺物

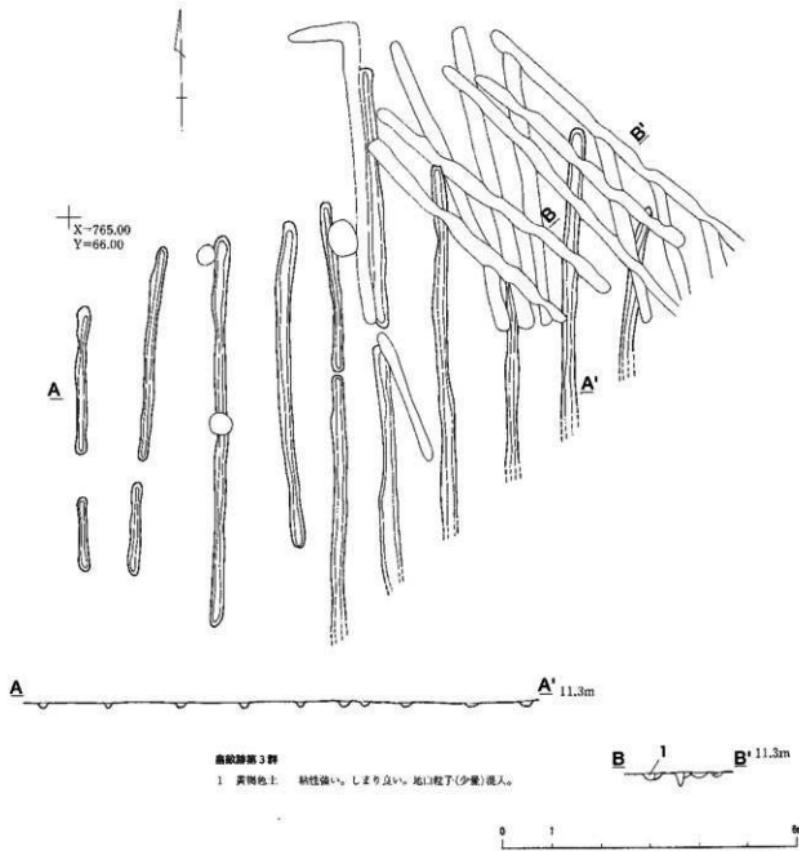
遺物番号	出土地点	種別	否格	口径(基部)	底径	器高
148	第2群5漢	須志器	良			
148	須志器					器形・手法の特徴・その他
148	須志器					大塊体形破片。外側には叩き痕。



第36図 島歿跡第2群出土遺物 ($S=1/3$)

島歎跡第2群

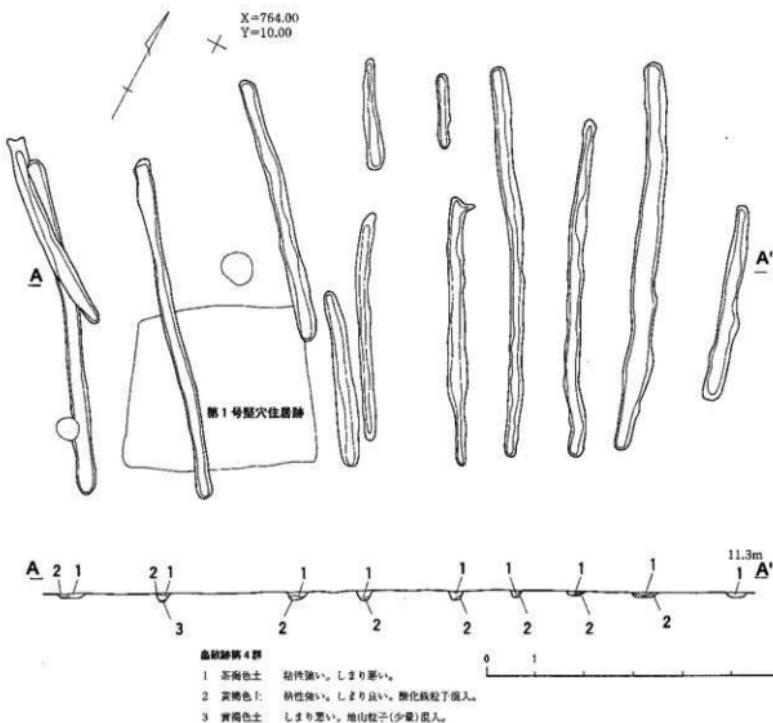
調査区北西部で検出した。第1・3群と重複する、第1群に前出し、第3群とは後出の関係にある。主軸の方位はおよそN-3°-Wをしめす。覆土は粘性の強い黄褐色土を中心に充填されている。第1・3群の覆土とは極めて近似しており、切り合い関係を把握するのに手間取った。各歎溝の間隔は不整である。一部の歎溝の底には径20cm、深さ5cmほどの小ピットが連続している。出土遺物は図版に掲載した1点のみで、覆土中位から出土した。



第37図 島歎跡第3群 ($S=1/100$)

島歎跡第3群

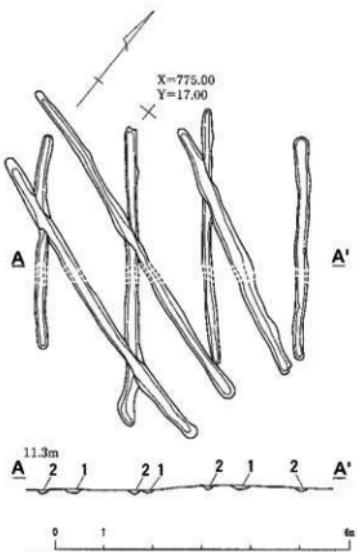
調査区北東部で検出した。第1・2群と重複し、これらに前出する。重複の激しい近辺の島歎跡の中では最も古いものである。主軸の方位はおよそ真北をしめす。覆土は粘性の強い黄褐色土を中心充填されている。第1・2群の覆土とは極めて近似しており、切り合い関係を把握するのに手間取った。各歎溝の間はおよそ1m間隔で整然と配置されている。出土遺物はない。



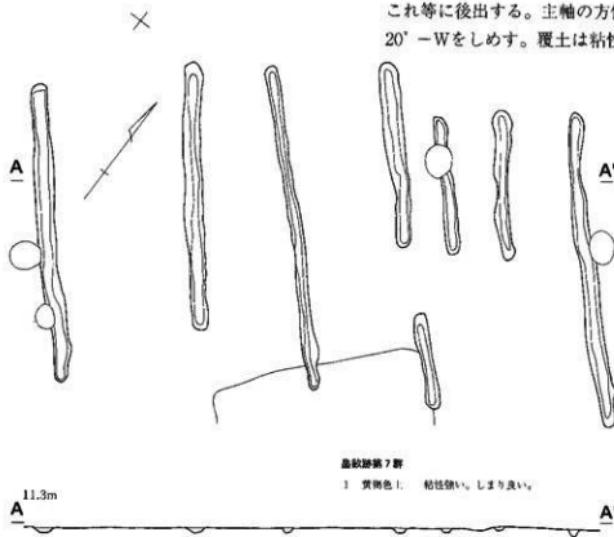
第38図 島歎跡第4群 ($S=1/100$)

島歎跡第4群

調査区北部で検出した。第1号堅穴住居跡、第2号掘立柱建物跡と重複し、前者とは後出、後者とは前出の関係にある。主軸の方位はおよそN-20°-Wをしめす。覆土は粘性の強い黄褐色土を中心充填されている。各歎溝の間はおよそ1m間隔で配置されている。出土遺物はない。



第39図 島歎跡第5・6群 (S=1/100)



第40図 島歎跡第7群 (S=1/100)

島歎跡第5・6群

調査区北東部で検出した。互いに重複関係にあり、5群が6群に後出する。主軸は第5群がN-60°-Wをしめし、第6群がN-20°-Wをしめす。覆土は第5群が粘性の強い黄褐色土を充填し、第6群はシルト質の茶褐色土を充填する。

7・8・9群とは至近の位置にあり、主軸の方向もほぼ類似していることから、本来は同一グループにすべきなのかもしれないが、その積極的な根拠を探し出せなかつたために、別グループと判断したものである。各歎溝の間は5号がおよそ1m、6号がおよそ1.5mの間隔で整然と配置されている。出土遺物はない。

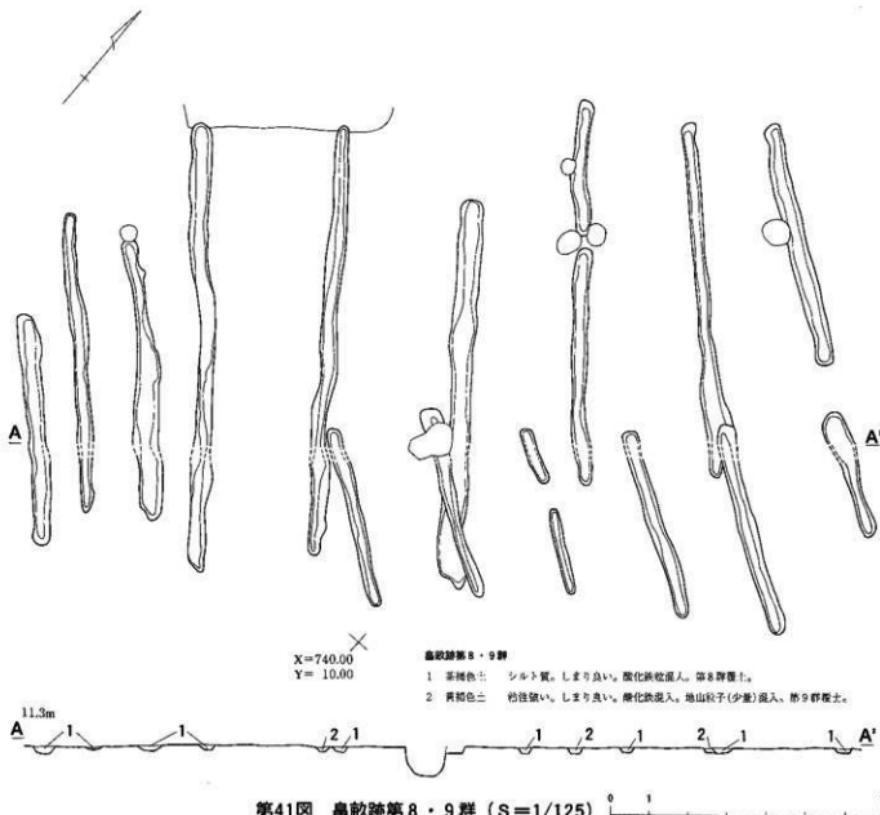
島歎跡第7群

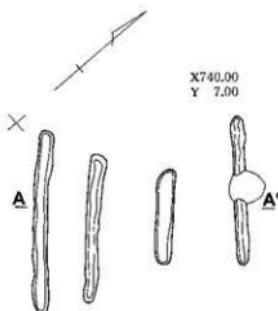
調査区北部で検出した。第2号掘立柱建物跡と重複し、これに前出する。また第3号竪穴住居跡、第3号掘立柱建物跡とも重複し、これ等に後出する。主軸の方針はおよそN-20°-Wをしめす。覆土は粘性の強い黄褐色

土を充填する。6・9群とは至近の位置にあり、主軸の方向もほぼ類似していることから本来は同一グループにすべきなのかもしれないが、その積極的な根拠を探し出せなかったために、別グループと判断した。各歓溝の間はおよそ0.6~2mの間隔では整然と配置されている。

歓歎跡第8・9群

調査区のほぼ中央部で検出した。お互いに重複関係にあり、第8群は第9群に後出する。第8群の主軸の方位はおよそN-60°-Wをしめし、第9群はおよそN-20°-Wをしめす。覆土は第8群が粘性の強い黄褐色土を中心で充填されており、第9群はシルト質の茶褐色土を充填する。方向軸がしめすグループ間の切りあい関係やその覆土の特徴は第5・6群と全く同様である。各歓溝の間はおよそ整然と配置されている。出土遺物はない。



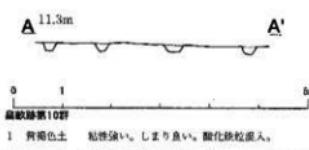


鳥歎跡第10群

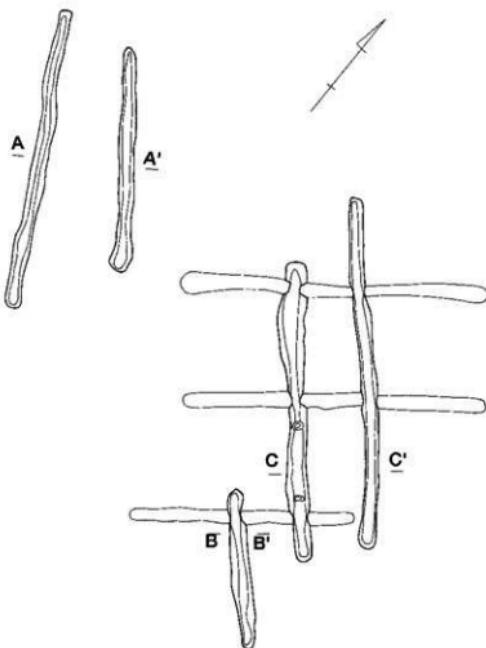
調査区のほぼ中央部で検出した。主軸の方位はおよそ $N - 45^\circ - W$ をしめし、第9群とは至近の位置にあり、主軸の方向もほぼ類似していることから本来は同一グループにすべきなのかもしれないが、その積極的な根拠を探し出せなかったために、別グループと判断したものである。

各歎溝の間はほぼ整然と配置されている。覆土は粘性の強い黄褐色土を中心充填されている。

第2号掘立柱建物跡と重複し、これに前出する。



第42図 鳥歎跡第10群 ($S = 1/100$)



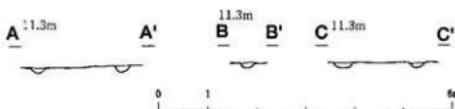
鳥歎跡第11群

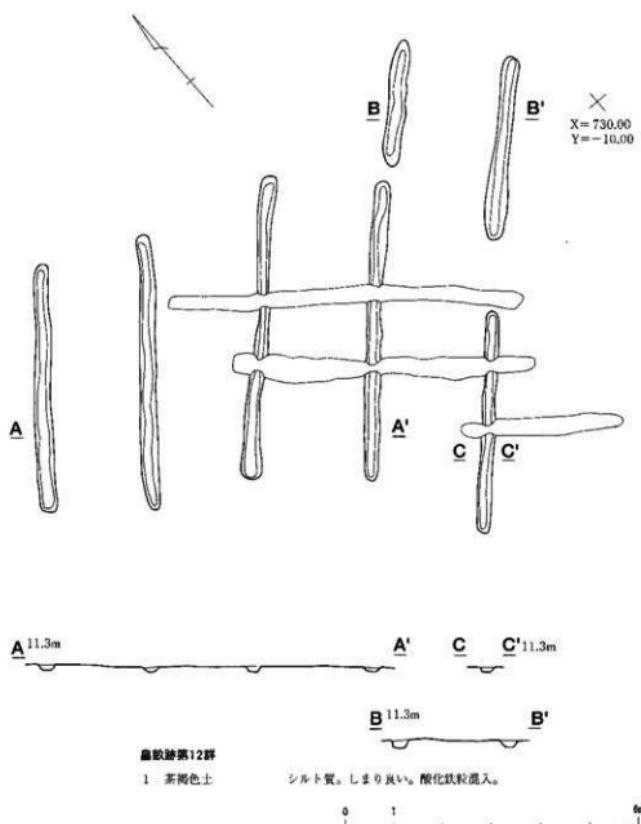
調査区中央部、第4・5号住居跡の至近で検出した。第12群と重複し、これに後出する。主軸の方位は $N - 45^\circ - W$ をしめす。覆土は第1~10群と第11~14群では異なり、黄褐色土より赤みがかったシルト質の茶褐色土が充填される。

第2群と同様に、溝底には直径20cm、深さ5cmの小ビットが存在する。あるいは耕作痕かもしれない。各歎溝の間はおよそ1m間隔で整然と配置されている。

出土遺物はない。

第43図 鳥歎跡第11群 ($S = 1/100$)





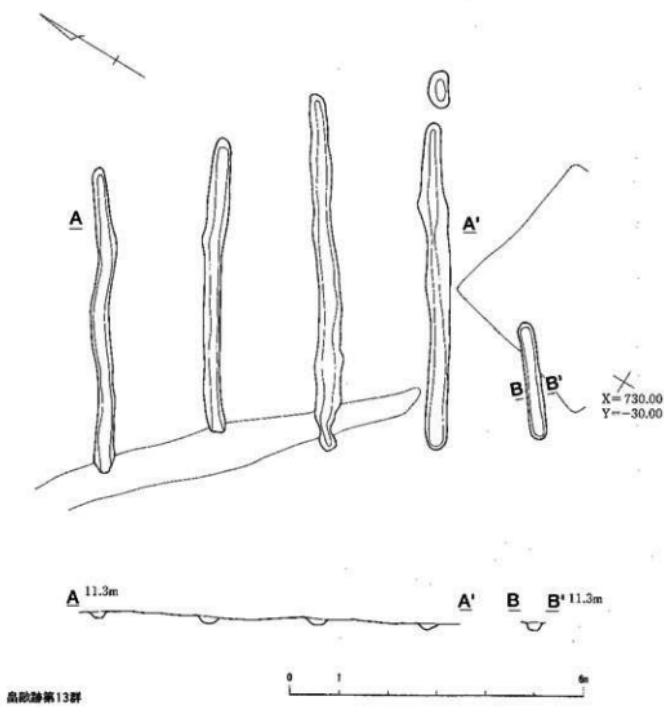
第44図 墓跡第12群 ($S=1/100$)

墓跡第12群

調査区西部、第4・5号住居跡で検出した。第11群と重複し、前出する。主軸の方位はN-40°-Eをしめす。この第12群と第13群のみが東西方向にのびる墓跡溝である。覆土にはシルト質の茶褐色土が充填されている。第11群の覆土とは全くの同質であり、その切りあい関係を把握するのに手間取った。各歿溝の間はおよそ2m間隔で整然と配置されている。出土遺物はない。

墓跡第13群

調査区西部、第4・5号住居跡で検出した。第5号住居跡と重複し、これに後出する。主軸の方

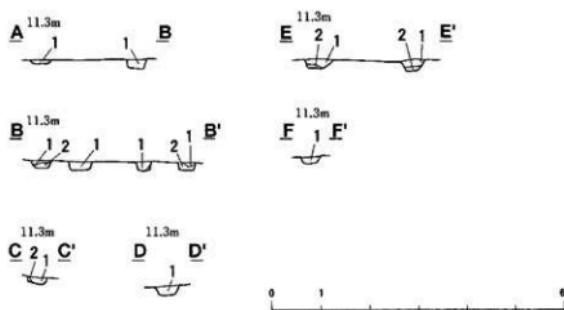
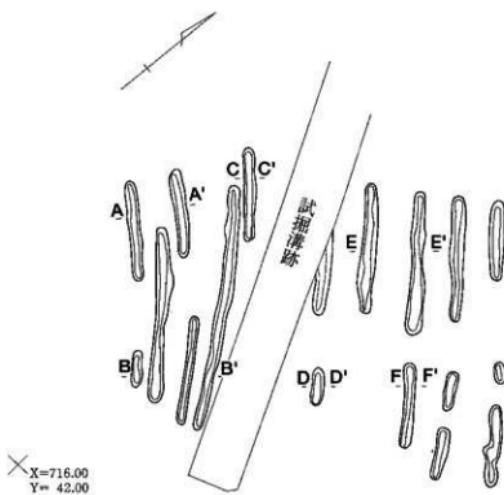


第45図 高砂跡第13群 ($S=1/100$)

位はN-50°-Eをしめす。覆土は第11・12群に比べ、より赤みの帯びた茶褐色土が充填されている。各竪溝の間はおよそ2m間隔で整然と配置されている。出土遺物はない。

高砂跡第14群

調査区西方隅で検出した。一部搅乱を受けて壊されている。主軸の方位はN-50°-Wをしめす。覆土は第13群と同様に、より赤みを帯びた茶褐色土を中心に充填されている。土層断面を観察すると、赤みを帯びた茶褐色土がまず堆積し、その直上に第1~10群でみられた黄褐色土が堆積していた。概には言えないが本遺構でのこの堆積状況から類推すると、茶褐色土を覆土にもつ第1:



第46図 古畝跡第14群 ($S=1/100$)

~14群が、第1~10群に先行するという可能性も指摘できる。各畝跡の間はおよそ50cm程度の狭い間隔で整然と配置されている。出土遺物はない。



第47図 第2号不明遺構周辺 (S=1/150)

第2号不明遺構

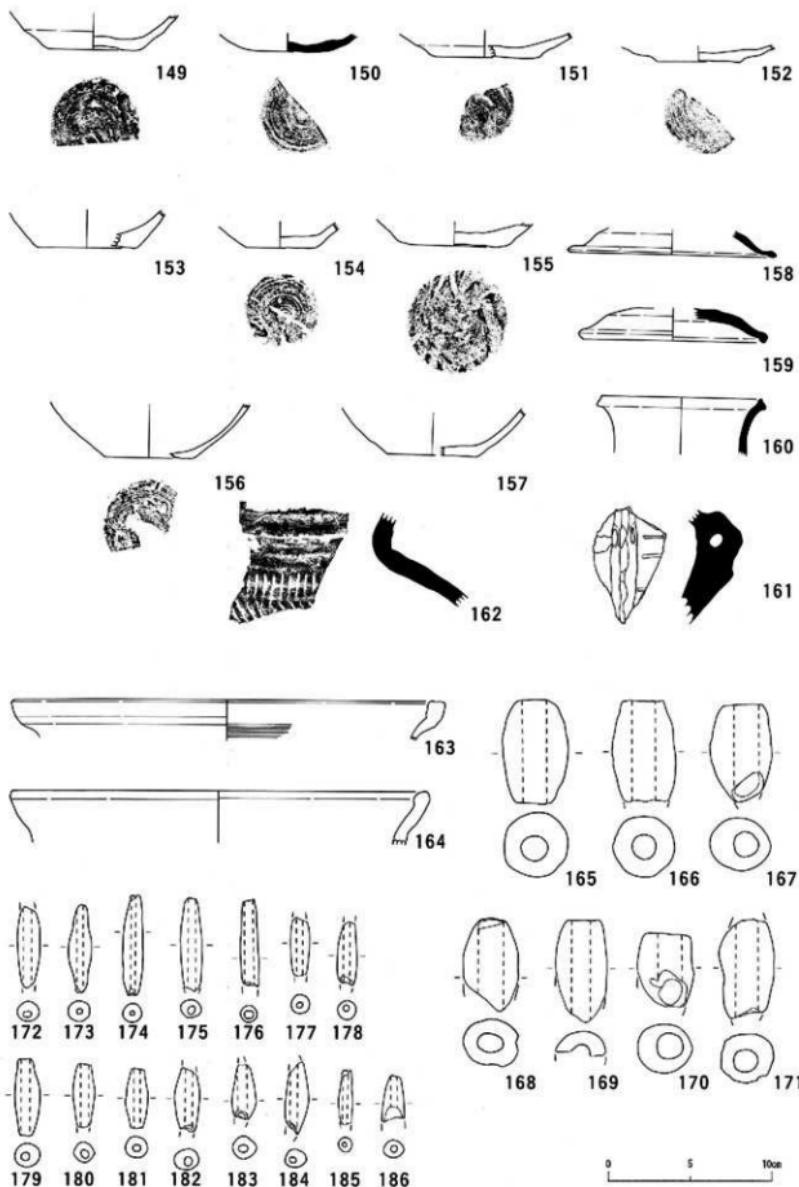
本遺構は調査区南隅で検出した。自然地形の落ち込みである。標高11.00mの等高線を頂点に南方向へ緩やかに傾斜をみせる。本調査区の中で確認された比高差は約20cmである。

隣接する調査区（富山市教育委員会 1999）の図面を合成したものが第59図である。これによるところの自然地形の落ち込みはさらに南東方向に伸びており、標高11.00mよりの最大比高差はマイナス50cmを測る。

第4・5号住居跡はこの落ち込みの間際に位置している。これらの遺構と本遺構の出土遺物ではその年代に大差が無く、ここでそれぞれの立地状況などを勘案すると、ほぼ同時期に存在したと考えられる。つまり、第4・5号住居跡の設置にあたっては本遺構の落ち込みの存在を念頭に選地されて營まれたと推察される。

これに対して、島跡第11～13群はこの自然地形を無視するように本遺構上に進出している。これまでの遺構観察により島跡が全て竪穴住居跡に後出する事がわかっているが、これら遺構群の検出状況をみると本遺構の埋没過程をはさんでその前に竪穴住居跡が、その後に島跡群がそれぞれ營まれたと考えられる。

出土遺物は掲載分も含めて、土師器片29点、須恵器片6点、土錐22点、石1点である。遺物はその多くが標高10.90m付近より出土している。つまりこれらの遺物は埋没過程の最終期に属すると思われる。土錐が多いが、まとまって出土するということはない。



第48図 第2号不明遺構出土遺物 (S=1/3)

2号不明造構出土遺物

遺物番号	所生車之	種類	器種	目録(基準)	表序	留落	出土原人物	構成	形態・手法の特徴・その他
149	2号不明造構	土器部	甕		5.6		白色砂粒	不良	底部には漆面各方向に刷。外部外周は瓦陶器のまま、ローラー成形機で丸く。内面は瓦込み物が未調査のまま。
150	2号不明造構	土器部	壺A		4		白色砂粒	不良	摩滅が激しく、觸感方法等の詳細は不明。
151	2号不明造構	土器部	口か		8.2		白色砂粒	やや良	表面には瓦面軽く刷。底部を覆むに瓦合状に残す。底部内面は瓦面ナガ型。
152	2号不明造構	土器部	直か		5.2		白色砂粒	やや不良	底面には瓦面軽く刷。底部を覆むに瓦合状に残す。底部内面は瓦面ナガ型。内側面漆彩の跡跡あり。
153	2号不明造構	土器部	要か		(6.1)		白色砂粒	不良	摩滅が激しく、觸感方法等の詳細は不明。
154	2号不明造構	土器部	要か		4.6		白色針狀物質	やや良	底面には瓦面軽く刷。底部を覆むに瓦合状に残す。底部内面は瓦面ナガ型。
155	2号不明造構	土器部	要か		5.4		白色小石	やや不良	摩滅が激しく、觸感方法等の詳細は不明。
156	2号不明造構	土器部	甕		5.4		白色針狀物質	やや不良	摩滅が激しく、觸感方法等の詳細は不明。
157	2号不明造構	土器部	甕		(5.6)		白色砂粒	不良	摩滅が激しく、觸感方法等の詳細は不明。
158	2号不明造構	埴生器	蓋	(12.9)			白色砂粒	良・優	11遺器は大きく外反する。口縁端部は丸みを帯びる。
159	2号不明造構	埴生器	蓋	(11.2)			白色砂粒	やや不良	11遺器は外反し、口縁端部は丸みを帯びる。
160	2号不明造構	埴生器	長颈瓶	(10.0)				良・優	
161	2号不明造構	埴生器	双耳瓶				白色小石	良・優	
162	2号不明造構	埴生器	甕	預留標	(26.4)		白色小石	良・優	
163	2号不明造構	土器部	鍋か	(26.7)			白色砂粒	良	11標記を削り落し、方形に成型。
164	2号不明造構	土器部	甕	(25.6)			白色砂粒	良	11標記を削り落し、丸く成型。
遺物番号		出土地点	神奈川 湘南	全長	外径	孔径	造形(%)	出土原人物	その他
165	2号不明造構	土罐		6.5	4.1	1.7	103.9	良	白色砂粒
166	2号不明造構	二種			3.8	1.5	8.4	良	白色砂粒 白色針狀物質
167	2号不明造構	土罐			3.65	1.55	61.9	良	白色小石
168	2号不明造構	土罐			3.4	1.5	43.2	やや不良	白色小石
169	2号不明造構	土罐		6.3	3.2	1.2	22.1	やや不良	白色砂粒
170	2号不明造構	土罐		4.65	3.4	1.6	33.6	やや不良	白色砂粒 白色針狀物質
171	2号不明造構	土罐		6.1	3.5	1.5	53.3	やや不良	白色砂粒 白色針狀物質
172	2号不明造構	土罐			1.35	0.5	7.3	やや良	白色砂粒
173	2号不明造構	二種		5.4	1.35	0.4	2.2	やや不良	白色砂粒 白色針狀物質
174	2号不明造構	土罐		6.3	1.2	0.3	8.2	やや良	白色砂粒
175	2号不明造構	土罐			1.3	0.25	6.7	やや良	白色砂粒
176	2号不明造構	土罐			1.5	0.6	6.7	良	白色砂粒 白色針狀物質
177	2号不明造構	土罐			1.2	0.4	4.5	やや良	白色砂粒
178	2号不明造構	土罐			1.2	0.4	4.9	やや良	白色砂粒
179	2号不明造構	土罐		4.8	1.5	0.55	9.5	やや良	白色砂粒
180	2号不明造構	土罐			1.3	0.5	6.0	やや良	白色砂粒
181	2号不明造構	二種		3.7	1.4	0.5	6.0	やや良	白色砂粒
182	2号不明造構	二種			1.36	0.56	7.7	やや良	白色砂粒 白色針狀物質
183	2号不明造構	二種			1.5	0.56	6.2	やや良	白色砂粒 白色針狀物質
184	2号不明造構	二種			1.3	0.45	6.2	やや良	白色砂粒
185	2号不明造構	二種			0.95	0.3	2.2	やや良	白色砂粒 白色針狀物質
186	2号不明造構	二種			1.25	0.4	3.6	やや良	白色砂粒 白色針狀物質

第2節 近世の遺構

検出した遺構の概要

近世以降に属する遺構として、大型掘立柱建物跡2棟と溝状遺構2条を検出した。これらは遺物包含層の掘削の時点でその平面プランがはんやりと確認されており、本末はこれらの遺構を内包するもう一面上層の遺構確認面があると考えられる。

遺構覆土の特徴や共通点からこれらの遺構は水田耕作上層の直下より掘り込まれたものと考えられる。これらの構築時期を特定し得る遺物の出土には恵まれなかつたが、この地に現在のような一面の水田が営まれはじめた時期の考慮からこれらの遺構の年代を近世（江戸時代前期）と判断した。

なお、第2号溝状遺構のみ覆土の特徴が異なり、その年代を出土遺物から19世紀末と判断した。

第1号掘立柱建物跡

調査区北東部で検出した大型の掘立柱建物跡である。島畝跡第3群と重複する。柱間寸法3mの4間×5間の総柱を基準とするが、最西列のみ構造が異なる。最西列南端のP29～P33は小規模ではあるが、いずれも柱穴である。

土層観察によるとこれら柱穴の構造は、粘性の強い灰黄褐色土を版築土としてしまりよくつき固められており、さらに構造を安定させるために拳大の河原石を投入している。木柱は残存していなかったが、十層断面により柱痕跡が確認された。

また、これら整然と並んだ柱穴を取り囲むように3条の掘り込みの浅い溝が周囲をめぐる。その覆土は柱穴の版築土と同様の粘性の強い灰黄褐色土であるが、しまりはよくない。溝底はごく僅かに酸化している。あるいは建物に付随する雨落としの溝かもしれない。また溝1と溝2の間の空間では若干硬化が認められることから人の動きが推定され、溝2のL字状の形状をも考え合わせると玄関・勝手口といった施設の存在も想定し得えよう。出土遺物はない。

柱穴覆土の灰黄褐色土は本遺構と第2号と第1号溝状遺構にのみで、特徴的である。

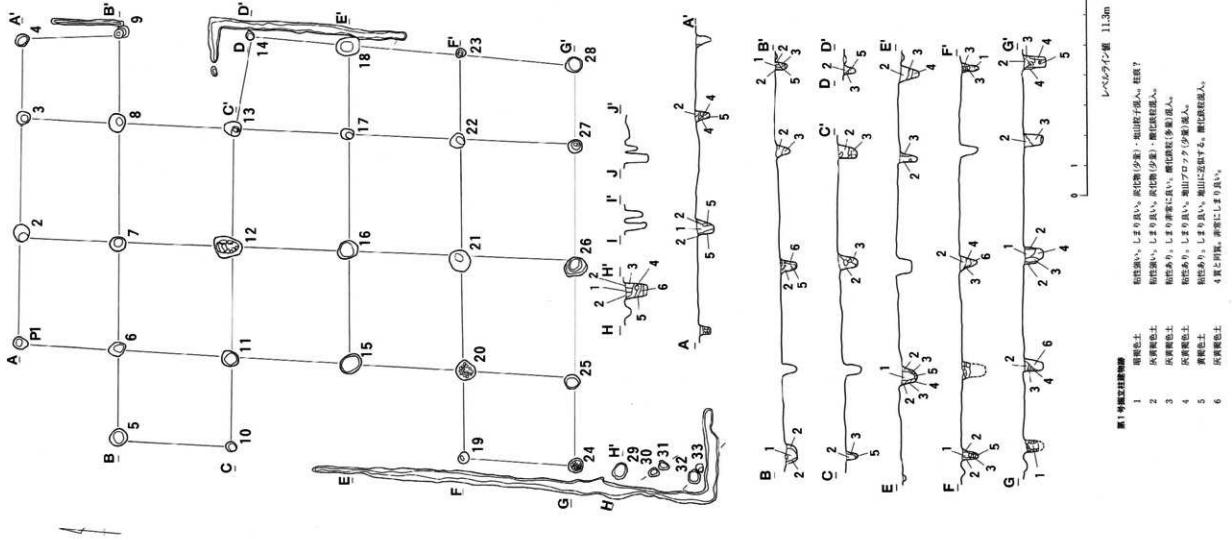
第2号掘立柱建物跡

調査区のはば中央に位置する。第2・3号住居跡、島畝跡第7・8群と重複する。柱間寸法約3mの3間×4間の総柱を基準とするが、最東列のみ構造が異なる。この最東列のピットのみ他と比べて規模が小さく、庇などの構造物を想定すべきかもしれない。

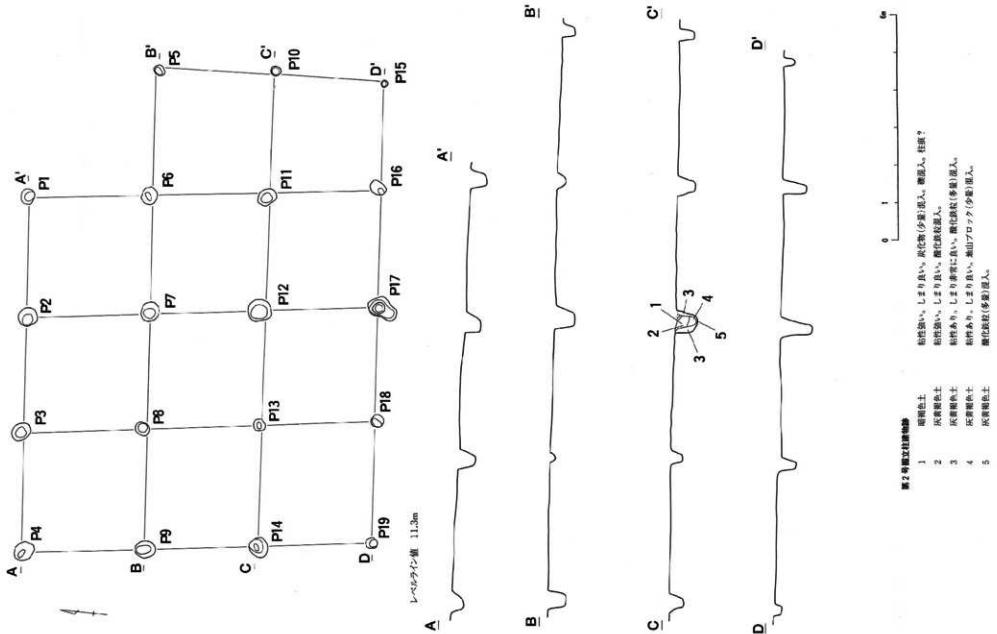
柱穴の規模は第1号とはほぼ同様で、その構造も粘性の強い灰黄褐色土を版築土としてしまりよくつき固めていた。ただし、第1号にみられた根石は検出されなかつた。木柱は検出されず、柱痕跡をP13で確認したのみである。出土遺物はない。

第1号掘立柱建物跡の最南列柱穴（P24～28）のちょうど西方向の延長上に、本遺構の最北列柱穴（P1～4）が所在しており、このふたつの掘立柱建物跡は約7mの間隔を持ち主軸を同じくして存在している。

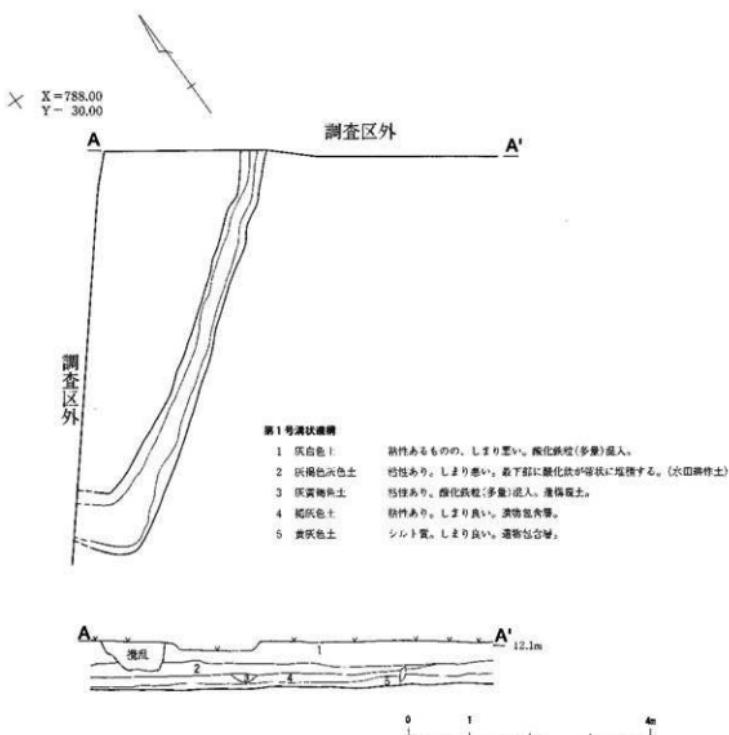
構造・建物の主軸が同一であることから、第1・2号掘立柱建物跡は同時期のしかも直接的関係（主屋と母屋といったような）にあったと考えられる。



第49図 第1号掘立柱建物跡 (S=1/125)



第50図 第2号掘立柱建物跡 (S=1/100)



第51図 第1号溝状遺構 (S=1/80)

第1号溝状遺構

調査区の北東隅で検出した。調査区外にのみおり、遺構の全容・規模は不明である。

土層断面の観察によると、本遺構は水田耕作土（第1～2層）の直上の古代（もしくは中世？）遺物包含層の第4層（第4図 河川跡土層断面図の第7層に相当か）より掘り込まれている。覆土は粘性の強い灰黄褐色土が充填されている。この覆土は木遺構と第1・2号掘立柱建物跡にのみみられるために、これを根拠に木遺構を同一時期の所産と捉え、金屋南遺跡の周辺に水田耕作が営まれる直前ないし直後をその具体的な年代として推定した。ただし木遺構と第1号・2号掘立柱建物跡とは主軸を同一にしない。

溝底は若干酸化しており、往時は水の留まっていた環境であったことを示唆している。これは第1号掘立柱建物跡に付随する溝の特徴と同じであり、さらには形状が同じくL字状を呈していることから、この調査区外に木遺構の主体となるべき掘立柱建物が存在する可能性がある。出土遺物はない。



第2号溝状遺構

調査区北西部で検出した。第4号住居跡と重複し、これに後出する。溝底には深さ5cmほどの、凹凸面ともいるべき小ピットが存在し、一面酸化鉄で覆われている。覆土には、前述の近世遺構とは異なる、しまりの無い灰色粘土が中心にみられる。これは水田耕作土と同質である。酸化鉄に覆われた溝底は全面にわたり硬化している。

溝底より19世紀末と思われる瀬戸・美濃焼の碗破片が出土した。

基本層序の観察から、本遺構の本来の遺構確認面は、現況より約50cm上方にあったと考えられる。検出時ではごく浅い掘り込みであったが、往時は深さ50cmを超える規模を持つ、水の留まるような溝であったと考えられる。

水田と関連する遺構とも考えられたのだがその性格を突き止めることはできなかった。

第53図 第2号溝状遺構出土物 (S=1/3)

第52図 第2号溝状遺構 (平面図1/160・断面図1/40)

2号溝状遺構出土遺物

遺物番号	出土場所	種別	器種	口径(断面)	底径	高さ	置地	時期	文様	その他
187	2号溝状遺構	瀬戸・美濃	碗	(11.2)	4.4	5.1	瀬戸・美濃	19世紀末	紅葉模文	墨刷り

第3節 時期不明の遺構

検出した遺構の概要

ここにあげた遺構は、出土遺物もなく時期を推定し得る材料のないもので、全て遺物包含層の精査時にはプランを確認できずに、遺構確認面の精査時になって確認した。確認はないが、古代に構築された可能性もある。

あるまとまりをもつてゐるのが特徴的であり、大きく調査区北東隅にまとまるグループと調査区中央部にまとまるグループに大別される。いずれも畠跡溝跡に隣接している。

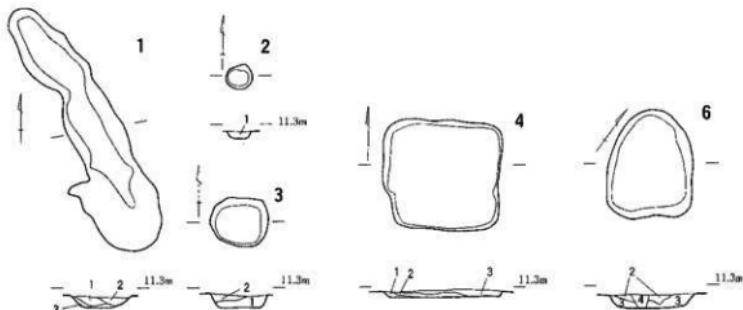
第1・23・24号土坑は、検出した位置や形態から畠跡の溝とも考えられるが、これらの溝とは覆土が全く異なることから別遺構として取り扱った。

第11・16・17・44号土坑は土層断面の観察によると、柱痕跡が確認されている。至近に第1号構列跡を検出し、その関係または新たな遺構の存在を精査したがその可能性を探し出す事ができなかつた。

第31号土坑は底面に焼土ブロックが置かれている。第50号土坑は畠跡第11群と重複し、これに前出する。覆土には炭化物が充填されていた。

一群の平面形態は梢円から隅丸方形を意図し、底面は基本的には平坦である。覆土は茶褐色から暗褐色土の自然堆積を示すものが主流で、下層ほどに黄色味を増す。しまりは無い。地山粒子・ブロックの混入は多く、第27・34号土坑のように地山ブロックの混入が大量に及ぶものは一部埋め戻しされている可能性もある。

土坑構築の目的と用途、さらには群集化の理由については、おそらく一過性の目的に供されたものとして判断しても差し支えないだろう。



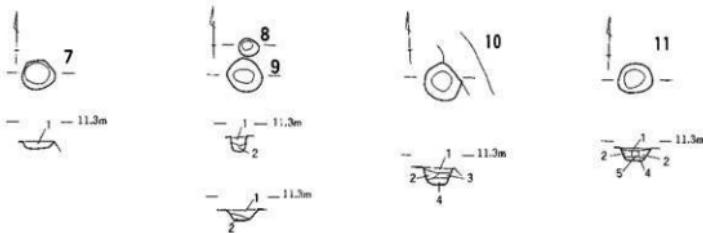
第1・2・3号土坑

- | | | |
|---|------|-------------|
| 1 | 暗褐色土 | シルト質。しまり良い。 |
| 2 | 黄褐色土 | 炭化物(少量)混入。 |
| 3 | 黄褐色土 | 地山粒子(少量)混入。 |

第4・5号土坑

- | | | |
|---|------|------------------|
| 1 | 暗褐色土 | 地山粒子(少量)混入。 |
| 2 | 黄褐色土 | しまり悪い。炭化物(少量)混入。 |
| 3 | 黄褐色土 | シルト質。しまり良い。 |
| 4 | 茶褐色土 | 粘性強い。しまり悪い。 |

第54図 時期不明の遺構 (S=1/60)

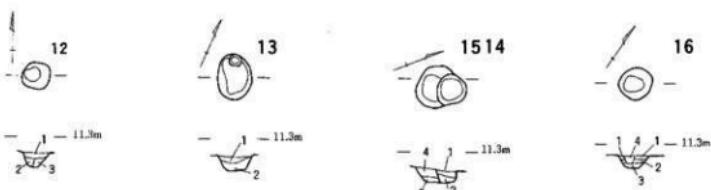


第7・8・9号土坑

- 1 黄褐色土 シルト質。しまり良い。酸化鉄粒(少量)混入。
2 黄褐色土 シルト質。しまり良い。地山粒子(少量)混入。

第10・11号土坑

- 1 黄褐色土 シルト質。しまり良い。酸化鉄粒(少量)混入。
2 黄褐色土 しまり非常に良い。ガチャガチ。
3 黄褐色土 地山粒子(少量)混入。
4 黄褐色土 しまり非常に良い。酸化鉄粒(少量)混入。
5 黄褐色土 黏性強い。柱痕?

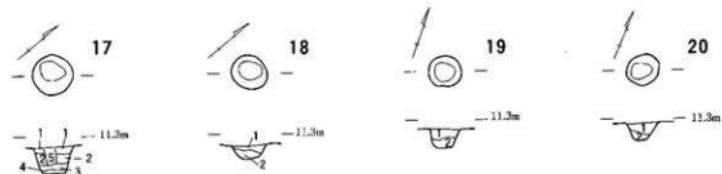


第12・13・14・15号土坑

- 1 にぶい黄褐色土 シルト質。しまり良い。
2 にぶい黄褐色土 シルト質。地山粒子(少量)混入。
3 黄褐色土 シルト質。しまり良い。酸化鉄粒(少量)混入。
4 黄褐色土 シルト質。しまり良い。15号土坑覆土
5 黄褐色土 シルト質。酸化鉄粒(少量)混入。15号土坑覆土

第16号土坑

- 1 黄褐色土 シルト質。しまり良い。
2 黄褐色土 しまり非常に良い。ガチャガチ。
3 黄褐色土 シルト質。酸化鉄粒(少量)混入。
4 黄褐色土 黏性強い。柱痕?



第17号土坑

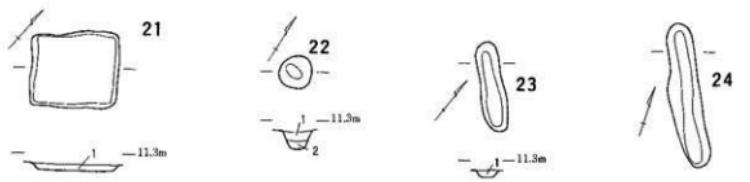
- 1 黄褐色土 シルト質。しまり良い。
2 黄褐色土 しまり非常に良い。ガチャガチ。
3 黄褐色土 シルト質。酸化鉄粒(少量)混入。
4 黄褐色土 地山粒子・酸化鉄粒(少量)混入。
5 素焼き土 黏性あり。柱痕?

第18・19・20号土坑

- 1 黄褐色土 シルト質。しまり良い。炭化物(少量)混入。
2 黄褐色土 シルト質。しまり良い。酸化鉄粒(少量)混入。



第55図 時期不明の遺構 (S=1/60)

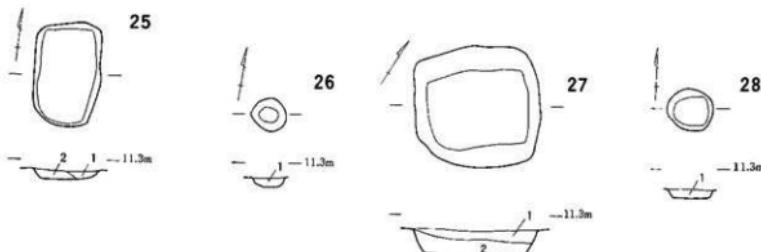


第21・22号土坑

- 1 黄褐色土 シルト質。しまり良い。炭化物(少量)混入。
2 黄褐色土 シルト質。しまり良い。酸化鉄粒(少量)混入。

第23・24号土坑

- 1 黄褐色土 シルト質。しまり良い。炭化物(微量)混入。
2 黄褐色土 粘性あり。地山粒子(少量)混入。

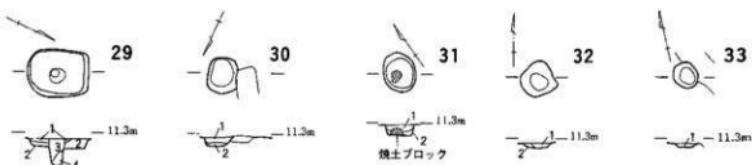


第25・26・27号土坑

- 1 黄褐色土 しまり良い。地山粒子(少量)混入。
2 黄褐色土 しまり良い。炭化物(少量)混入。

第27号土坑

- 1 黄褐色土 粘性あり。しまり良い。地山粒子(多量)混入。
2 黄褐色土 しまり良い。地山ブロック(多量)混入。

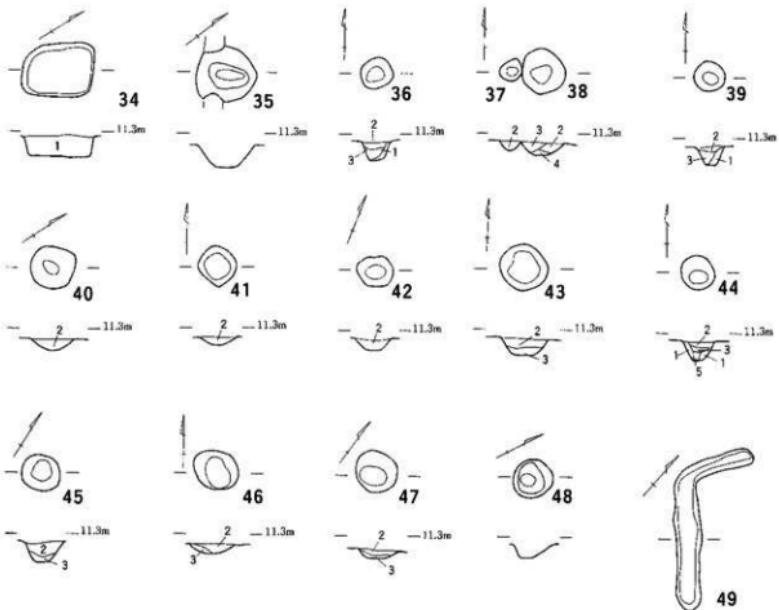


第29~33号土坑

- 1 噴黄褐色土 シルト質。しまり良い。酸化鉄粒(多量)混入。
2 黄褐色土 しまり良い。
3 噴褐色土 シルト質。しまりなくサラサラ。
4 噴褐色土 地山粒子・酸化鉄粒(少量)混入。

第56図 時期不明の遺構 (S=1/60)





第34~49号土坑

- | | | |
|---|---------|------------------------|
| 1 | にぶい黄褐色土 | シルト質。しまり良い。酸化鉄粒(多量)混入。 |
| 2 | にぶい黄褐色土 | しまり良い。 |
| 3 | 黄褐色土 | シルト質。しまりなくサラサラ。 |
| 4 | 灰青褐色土 | 地山粒子。酸化鉄粒(少些)混入。 |
| 5 | 茶青褐色土 | 粘性あり。炭化物(微量)混入。柱状? |
| 6 | 暗青褐色土 | しまり良い。酸化鉄粒(多量)混入。 |

— 11.3m
6

第50号土坑

褐褐色土 粘性あり。炭化物(多量)混入。

第51・52号土坑

黄褐色土 酸化鉄粒・炭化物・地山粒子(多量)混入。

第57図 時期不明の遺構 (S=1/60)

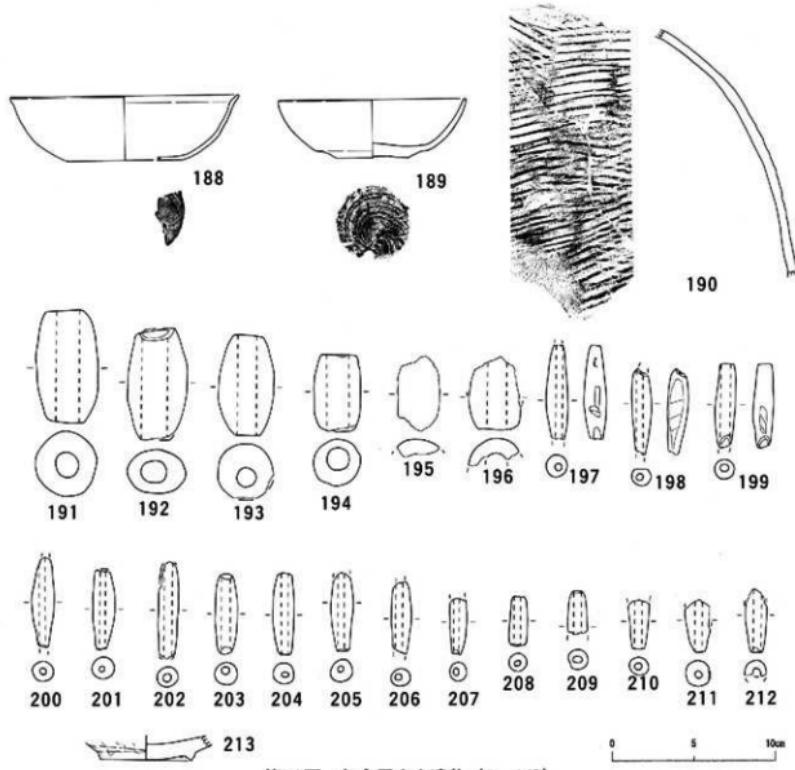
第4節 包含層出土の遺物

包含層と出土した遺物の概観

遺物包含層は調査区全域でみられた。その堆積厚は、概して南西部ほど厚く北東部ほど薄い。これは往時の自然地形のあり方を反映している。平均すると約20cmの厚さである。本遺跡の東側の調査区に比べるとその厚さは薄い。出土遺物量は掲載分も含めて土師器片385点、須恵器片20点、土鍤22点、石15点、近世陶磁器1点である。

古代遺物が圧倒的な数量を成し、それ以外の遺物は僅かに1点に過ぎない。基本層序の項でも述べたが、この出土形態は本調査区では中世遺物包含層が存在しなかつた事の証左となろう。

包含層中の遺物は一箇所でまとまって出土するという事ではなく、調査区全域において漫然とした出土状況を呈する。合計で22点出土した土鍤も同様である。これらの遺物は、幾度かにわたり見舞われたであろう洪水の影響により土砂とともに近隣よりもたらされたものであろう。1点のみ出土した越中瀬戸焼の破片も（河川跡で出土した陶器や鉄滓も）同様の経緯が考えられ、本調査区内に該期の遺構の存在を示唆するわけではない。



第58図 包含層出土遺物 (S=1/3)

包含層出土遺物

遺物番号	出土地点	種別	器種	口径(厘米)	底径	高さ	断土現入物	焼成	形態・手法の特徴・その他	
188	包含層	土師器	壺	(14.2)	7.3	4.0	白色砂粒	やや良	底面には細粒赤切石。外縁外側にはナガ調整。内側は余剰ナガ調整を施す。	
189	包含層	土師器	壺	(10.6)	4.4	3.6	白色砂粒 白色針状物質	やや不良	底面には左回転赤切石。底部を高台状に残す。口縁部内外面に強いナガ調整を施す。内面にはナガ調整を施さず。ロコ成型法が顯る。	
190	包含層	土師器	壺				白色砂粒 白色針状物質	やや不良	外縁に叩き目痕。内面には指頭痕が残る。	
遺物番号	出土地点	種別	器種	全長	外径	孔径	重量(kg)	焼成	断土現入物	その他
191	包含層	土縫			7.0	4.5	1.5	105.8	良	白色砂粒
192	包含層	土縫				3.65	1.6	55.0	やや不良	白色砂粒
193	包含層	土縫		6.3	3.5	1.2	69.4	やや不良	白色砂粒	
194	包含層	土縫		4.8	2.9	1.4	34.2	やや良	白色砂粒	
195	包含層	土縫			(40.1)		11.1	やや不良		
196	包含層	土縫			(3.6)	(1.6)	18	やや不良	白色砂粒	
197	包含層	土縫			1.35	0.4	10.7	良	白色針状物質	
198	包含層	土縫			1.2	0.45	5.8	良	白色砂粒	
199	包含層	土縫			1.25	0.55	7.1	やや良	白色砂粒	
200	包含層	土縫			1.3	0.4	7.9	良	白色砂粒	
201	包含層	土縫		4.9	1.4	0.26	7.9	良	白色砂粒	
202	包含層	土縫		6.0	1.3	0.5	7.9	良	白色砂粒	
203	包含層	土縫		5.0	1.4	0.55	7.4	良	白色砂粒	
204	包含層	土縫		5.1	1.3	0.4	8.3	良	白色砂粒	
205	包含層	土縫		4.9	1.4	0.4	7.9	良	白色砂粒	
206	包含層	土縫			1.2	0.45	5.2	良	白色砂粒	
207	包含層	土縫		3.5	1.2	0.4	3.4	良	白色砂粒	
208	包含層	土縫		3.05	1.15	0.4	3.5	やや良	白色砂粒	
209	包含層	土縫			1.25	0.6	3.8	やや良	白色砂粒	
210	包含層	土縫		3.05	1.3	0.45	3.4	良	白色砂粒	
211	包含層	土縫		3.3	1.6	0.5	6.3	やや良	白色砂粒	
212	包含層	土縫		3.9	1.4	0.5	4.7	やや良	白色砂粒	
遺物番号	出土地点	種別	器種	口径(厘米)	底径	高さ	重地	時期	文様	その他
213	包含層	越中瀬戸	皿		5.7					外縁に鉄粉が流れる。

IV 調査のまとめ

今回の調査では、主な遺構として平安時代の竪穴住居跡5棟、掘立柱建物跡1棟、江戸時代の大規模掘立柱建物跡2棟を検出した。

平成13年度以前に実施された調査区の古代遺構と本調査区の成果を合成した図面が第59図である。(第59図は平成15年1月現在の本報告書作成時の成果を反映している。基本的には、「金屋南遺跡発掘調査報告I」富山市教育委員会 1999(以下、「金屋南I報告書」と略記する)の記載事項をそのまま用いたが、中には未報告分の調査区の成果も一部用いている箇所がある。従って今回報告するこの図面内容は暫定的な検討結果であり、以後新たに報告書が刊行された際にはその記述を最優先としたい。)これによると、西側では今回検出した河川跡、南を第2号不明遺構とした自然地形の落ち込みによって区画された南西から北東に伸びる自然堤防上に古代集落が立地していることがわかる。また、遺構もこれら自然地形の制約に基づいて配置されている。平成13年度までに57,200m²を対象に行われた発掘調査により、この地の古代遺構のほぼ全貌が明らかになったといえるだろう。

竪穴住居跡は通算で8棟以上検出した。「金屋南I報告書」でS X25とされた遺構は竪穴住居の重複であった可能性が高く、出土遺物の年代も今回検出したものとほぼ同一であることから住居棟数に含めた。また、一辺2~3mの方形土坑を2基検出しているが、出土遺物などからあるいは竪穴住居跡の可能性もある。

竪穴住居跡は群を成して位置している。すなわち、第1~3号住居跡のグループ、第4~5号住居跡のグループ、「S X25」のグループである。第4~5号とS X25は遺構が重複したもので、さらには第1~3号も同時期の所産とするにはそれぞれが近接しすぎている事から、これらはグループというよりもむしろそれぞれ独立した3世帯の住居建て替えを表しているのかもしれない。

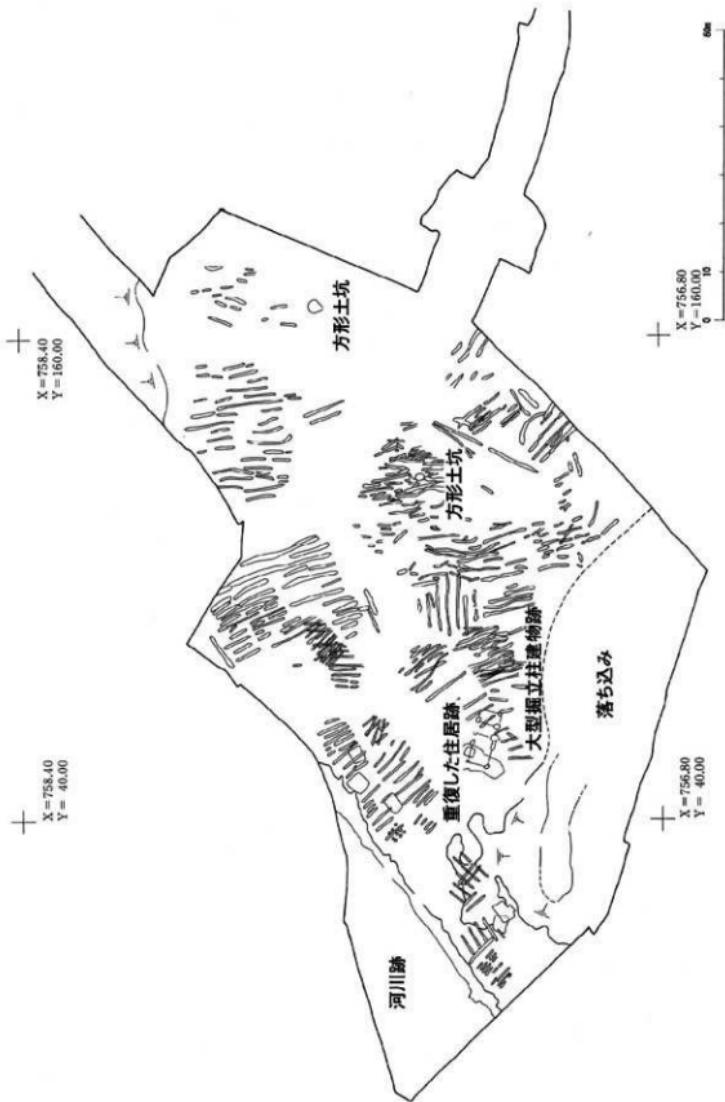
カマドが検出されたのは第4号住居跡のみで、その他は何の設備も持たない簡素なつくりである。第3号掘立柱建物跡は第1~3号住居跡の至近にあり、おそらくこれらと直接的に関係のあったものと考えられる。掘り方は非常に脆弱で柱痕も検出できなかった。調査時は「土坑が建物風に並んでいた」程度の印象しか受けなかつた。

「金屋南I報告書」でS B12・13とされている掘立柱建物跡はS X25と重複している。新旧関係は不明ながらも掘立柱建物が竪穴住居に後出する可能性が指摘されている。2間×1間、1間×1間の側柱建物で、方形基調の柱穴内には小礫や河原石を根石として用いており、大変堅牢なつくりの建物である。「金屋南I報告書」では「公的施設、あるいはそれに準じた建物、富裕層の私邸等が考えられる」とその性格を類推している。

以上に述べた竪穴住居跡、掘立柱建物跡はすべて自然地形の落ち込み、すなわち自然堤防の限界線に面して立地している。

畠畝遺構は、複数の溝状遺構群が整然と並んで構成されるその形態から、性格を判断した。ただし畠作を惹起する種子などの資料は出土していない。第55図をみると畠畝跡が幅約25mのグループでまとまっている事がわかる。これはすなわち、ある種の空間規制のもとで畠作がこの地で行われていた可能性を示すものである。狭い調査範囲の成果で結論付けるのは危険かもしれないが、あえてこのグループ間の空白域を積極的に意味づけるならば、畠の間のあぜ道などの存在が惹起され、この地域における古代陣田制に基づく土地区画の復元にも可能性を残す事になろう。

これら畠畝は第11~13群のような例外もあるが、他の古代遺構と同様に自然地形に制約される状



第59図 金屋南遺跡古代遺構全測図 (S=1/1000)

況をみせている。

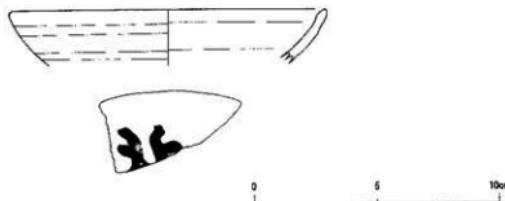
河川跡のへり部分から検出された土器祭祀遺構について現地調査後に他の類例を求めたが、本報告までに探し出す事ができなかった。この河川跡は古代集落が営まれた時期にはすでに水が流れでおらず、湿地化していた事が土層観察や自然化学分析によって明らかになっている。

葦やイネ科の植物が生命力あふれるがごとく生い茂る湿地（湿原）は、古来よりわが国では神聖な地としてとらえられていたようである。湧水地に石製模造品や鏡を沈め供えるという祭祀儀礼が行われていた例は、山岳仏教や修験道関係の信仰遺跡のみならず全国的に見受けられるものである。金井典美氏はこれらを池中などに投げ入れる目的として「必ずしもひとつではなかったであろうが、まず第一に想像されるのは日照りの際などに雨乞いの祭祀儀礼として投じられた（後略）」（金井1977）と述べている。

本遺構を構成する土器はすべて淡い褐色を呈する土師器の塊である。硬質・堅緻な須恵器とは異なり、過水性の強い土師器は幾度もの使用に耐え得るものではなく、そのただ1回のみの限定使用に用いられるという性格から、より時代の下った中世期ではかわらけ（土師質皿）の祭祀的利用が行われている。以上に述べた理由から、土師器が湿地のへりに並べ置かれていたこの遺構に祭祀的な意味づけを付すことは可能であろう。

また、土師器には朱書きで「北」と記されたものがある。朱書きの成分は分析をしていないので不明であるが、一見したところ漆のように見える。

この土器祭祀遺構の真南には出土遺物から同時期ととらえられる第5号住居跡が所在する。両者の間には直接的な関係があったものと判断し得る。つまり土器祭祀を行った主体が第5号ないしは第4号住居跡の住人であったと考えられる。ちなみに平成12年度に行った調査区からは、今回の「北」と同様の朱書きが記された土師器塊の体部破片（第60図）が出土している。



第60図 平成12年度出土「北」朱書き土器 (S=1/2)

第53号土坑は単独の柱穴痕で、壺の底部を蓋にして被せた小型壺が埋納されたという特異な遺構であるが、報告までに同時期の類例遺構を探し出すことができなかった。蓋を被せた壺という検出形態から考へるならば、火葬後の遺骸を収めた骨壺やあるいは後産処理の胞衣皿などが想起させられる。小型壺内の土壤からは動物に由來するリン酸の高濃度が認められており、このような推測が考えられる。そもそも単独して柱穴が設けられるという事象自体が珍しく、柱（＝標識？）と蓋付小型壺との間にある何かしらの因果関係は不明である。いずれにせよ、位置関係からして第4・5住居跡とは有機的・直接的関係にある事はほぼ確かであり、これらの住居跡は前述の土器祭祀遺構の営みにも関わっている事から、住居跡を介したこの3つの相関関係は大変興味深い。

第5号土坑からは40点の土錐が一括出土した。土層観察からは、これらの土錐が網などの漁労用

具に付随したまま土坑に投棄・収納されていた可能性を示唆しており、一般的に上鍾の形態の相違については漁網の構造の差などに求められると考えられている。この大型1点、小型39点という出土構成はそのまま、往時の漁労用具の構造の一単位を示している可能性がある。また、時期を特定することが可能な共伴遺物を多数得られ、貴重な出土例となった。

以上、今回検出した遺構のうち古代のものについて考察を加えたが、出土遺物から見たそれらの成立年代はおよそ9世紀後半から10世紀前半に限定される。これは近隣の調査区の成果と矛盾しない。その後の営みは本調査区では確認されなかつたが『金屋南Ⅰ報告書』によると「B区金屋線交差点北側北半」調査区からは12世紀前後の非クロ上師質皿が出土する溝が検出されている。この間約200年の空白があるが、これはこの地における集落の廃絶を示すものではなく、おそらく度重なる洪水被害を受けた結果、頻繁に集落の移動・変遷があった事に起因するであろう。

その後、中世に至り遺跡の東側で鋳造を営む大規模集落が築かれると、本調査区は集落の縁辺にあたるのか、該期の営みを認めることができなくなる。ただし河川跡で検出された中世遺物包含層（第7図 第20層）からはイネ属の植物遺体が検出されており、この河川跡（湿地）の窪地を利用した水田耕作が中世期に営まれていた可能性がある。

中世集落廃絶後の様子は明らかではないが、土層断面をみるとどの時期差を持たずして水田化が進んだようである（第7図 第25層）。この地に大規模な新田開発の波が押し寄せたのは文献資料によると、牛ヶ首用水の開削が契機であったと考えられる。

牛ヶ首用水は加賀藩三代藩主前田利常が、金屋の地を含む婦負郡及び射水郡の近隣33ヶ所の村役人の請願を聞き入れて寛永元年（1624）に開削された神通川左岸の大用水で、山田川、井田川、神通川から取水し、井田川と呉羽山丘陵の間を北流して市内八ヶ山付近で四方に分流する。四万石の水田を潤したといい、俗に「四万石用水」とも呼ばれたという。寛永元年（1624）8月の起工を端緒に寛永9年（1632）には一応の完成をみたが、新田の増加による用水量の増加等などの理由により増改修を重ね、承応3年（1654）に至り、ほぼ現在の流路と同じものが完成した。これにより婦負郡の村々で新田開発が進んだとされる。

第1・2号掘立柱建物跡と第1号溝状遺構は水田耕作土の直下より検出した。すなわちこれらの遺構はこの地に水田が営まれる直前のものであり、前述した新田開発の経緯をふまると17世紀中頃に構築された可能性が高い。

ここまで今回の調査で検出した遺構について年代を追って概観してみたが、いずれの遺構の存在も現況の地形からは想定し得ないものばかりであった。

これは、繰り返しになるが、井田川をはじめとする河川洪水による厚い堆積土と近世以降の水田開発事業により、中世以前の自然堤防の微高地などの地形が覆い隠されてしまった結果、現況のような平坦地形が現出されたと推測できる。よって本調査区のような沖積地においては、現在遺跡として認知されていない箇所においても新たに遺跡が発見される可能性が高く、今回報告した金屋南遺跡の古代集落の全容も周辺の遺跡の発見や調査の進展という過程のなかでこそ一層明らかにされるはずである。

今後の周辺の歴史的環境の復原に期待したい。

引用・参考文献

富山県	1983	『富山県史通史編Ⅳ 近世』
富山市教育委員会	1999	『富山市金屋南遺跡発掘調査報告Ⅰ』
富山市教育委員会	2001	『富山市水橋金広・中馬場遺跡』
富山市教育委員会	2001	『富山市開ヶ丘中山Ⅳ遺跡』
富山市教育委員会	2002	『富山市開ヶ丘中山Ⅲ遺跡・中山Ⅳ遺跡・中山Ⅴ遺跡・狐谷遺跡』
富山市教育委員会	2002	『富山市向野池遺跡』
(財)富山県文化振興財団 埋蔵文化財調査事務所	2003	『清水島Ⅱ遺跡・中名Ⅱ遺跡・持田Ⅰ 遺跡発掘調査報告』
婦中町教育委員会	1984	『友坂遺跡調査報告書』
婦中町教育委員会	1997	『友坂遺跡発掘調査報告Ⅲ』
北陸古代土器研究会	1997. 3	『北陸古代土器研究第6号』
北陸古代土器研究会	1997. 11	『北陸古代土器研究第7号』
北陸古代土器研究会	1997. 5	『シンポジウム北陸の10・11世紀代の土器様相』
名古屋市博物館	2000	『企画展 川と遺跡 展示図録』
浅川滋男・箱崎和久編	2001	『埋もれた中近世の住まい 奈良国立文化財研究所シンポジウム報告』
金井典美	1977	『湿原祭祀』法政大学出版局
谷本進	1995	『朱書き号と漆書き号の展開』『但馬考古学第9集』
細村直澄	2001	『任海宮田遺跡出土の土鍤について』『富山考古学研究第4号』 (財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
森隆	2001	『富山県出土の上鍤集成』『富山考古学研究第4号』 (財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
青山晃	2002	『古代北陸におけるカマドについて(2) -カマド構築方位についての検討-』『富山考古学研究第4号』(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

附 編

金屋南遺跡の自然科学分析

はじめに

富山県富山市金屋に所在する金屋南遺跡は、神通川支流である井田川左岸の自然堤防上に立地している。本遺跡のこれまでの発掘調査では、9~15世紀にわたる集落跡であることが確認されており、掘立柱建物跡群を中心とした居住域、島などの生産域、溝・道路跡・土坑群が検出され、居住・生産などの様相を示す資料が多数得られている。

今回の発掘調査では、古代（9世紀後半）の掘立柱建物跡・駄穴住居跡群・土器埋設遺構・島跡・河川跡、さらに川べりの土器祭祀遺構が確認されている。今回の分析調査では、これら遺構や河川跡から採取した試料を対象に、1) 占環境推定、2) 土器の内容物推定、3) 燃料材の推定を目的として分析を実施する。

1. 試料

分析試料は、河川跡から採取された土壌7点、柱穴内から出土した土器内の土壌2点、土器祭祀遺構から採取された土壌1点の計10点である。以下に、遺構および各試料の詳細を記し、分析項目を表1に示す。

・河川跡

河川跡は、出土遺物等などから古代～中世の所産と想定されている。河川跡部分の層序は35層に分層されており、上位の堆積物は表土および水田耕作土である。分析試料は、4層～6層・10層・15層・16層・20層から採取された土壌7点である。4層・6層は、炭化物を多量に含む黄灰色を呈するシルト質の堆積物で、植物等による腐植が見られる。5層は、黄褐色を呈するシルト質の堆積物で、古代～中世の遺物を包含する洪水性の堆積物である。10層・16層は、黄褐色～灰黄色を呈するシルト～砂質シルトの洪水性の堆積物である。15層は、黄灰色を呈する砂質シルトの堆積物で、植物等による腐植が見られる。20層は、褐灰色を呈するシルト質砂の堆積物で、炭化物を多量に含む。また、当層の年代は中世とされる。

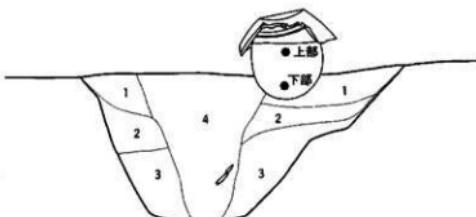
以上の試料について、河川跡の年代観とされる古代～中世の遺跡周辺および河川跡の植生および水域などの古環境推定を目的として分析を実施する。分析は、全点を対象として珪藻分析を実施する。また、4~6・15・20層の5点

を対象に花粉分析・植物珪酸体分析

を実施する。

・第53号土坑（図61）

第53号土坑は、土坑の断面観察などから柱穴であることが確認されており、当土坑の覆土上位からは土師器壺の底部で蓋をした小形の壺が出土している。この小形の壺内には土壤が充填されており、炭化物の混入が認められる。また、土器内土壤は、オリーブ褐色ないし暗オリーブ褐色を呈し、軽塗土（LiC：粘土25~45%、シルト0~45%、砂10~55%）からなる。分析試料は、これら土壤を上・下位に分



第61図 第53号土坑土層断面略図および試料採取位置

け採取した2点である。なお、土色は、マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修、1967）に、土性は土壤調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編、1984）の野外土性に基づく。

以上の試料について、土器内容物の検証を目的として、土器内土壤2点（上・下部）を対象に土壤理化分析を実施し、土器内土壤の下位を対象として微細遺物分析を実施する。

・土器祭祀遺構

土器祭祀遺構は、河川跡の川べり部分から検出されており、土師器碗の出土状況や炭化物の集中する様相から祭祀遺構と想定されている。分析試料は、炭化物の集中部から採取された土壤である。本試料について、微細遺物や炭化材の由来推定を目的として、微細遺物分析を実施する。なお、微細遺物分析により検出された炭化材を無作為に10点を選択し、炭化材同定を実施する。

表1 分析試料一覧

調査区	遺構名	層名	土質等	分析項目				
				珪藻分析	花粉分析	植物遺体分析	微細遺物分析	土壤理化分析
B地区	河川跡	20層 桃木底積土	暗褐色シルト質砂	<input type="checkbox"/>				
		16層 混水堆積土	暗褐色砂質シルト	<input type="checkbox"/>				
		15層 草木底積土	暗褐色砂質シルト	<input type="checkbox"/>				
		10層 混水堆積土	暗褐色シルト	<input type="checkbox"/>				
		6層 草木底積土	暗褐色シルト	<input type="checkbox"/>				
	鶴引川下位	5層 混水堆積土	暗褐色シルト	<input type="checkbox"/>				
		4層 草木底積土	暗褐色シルト	<input type="checkbox"/>				
		上位 土器内土壤	オリーブ褐色粘土	<input type="checkbox"/>				
調査区				炭化物集中区	暗褐色シルト質砂	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

2. 分析方法

(1) 珪藻分析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理をして、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する（化石の少ない試料はこの限りではない）。種の同定は、原口ほか（1998）、Krammer（1992）、Krammer and Lange-Bertalot（1986, 1988, 1991a, 1991b）などを参照する。

同定結果は、海水生種、海水～汽水生種、汽水生種、淡水～汽水生種、淡水生種の順に並べ、その中の各種類をアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種はさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度（pH）・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。そして、産出個体数100個体以上の試料については、産出率2.0%以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析は、海水～汽水生種については小杉（1988）、淡水生種については安藤（1990）、陸生珪藻については伊藤・堀内（1991）、汚濁耐性については、Asai and Watanabe（1995）の環境指標種を参考とする。

(2) 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による飴物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9：濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現

する全ての種類について同定・計数する。

(3) 植物珪酸体分析

湿重5g前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理(70W, 250KHz, 1分間)、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。

400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤・佐瀬(1986)の分類に基づいて同定・計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から古植生について検討するために、植物珪酸体群集と珪化組織片の分布図を作成した。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎に、それぞれの総数を基準とする百分率で求めた。

(4) 微細遺物分析

湿重秤量した土壤試料(第53号土坑内容物下部33.55g、土器祭祀遺構内容物972.3g)を5%水酸化ナトリウム水溶液(NaOH)に一晩液浸し、試料の泥化を促す。0.5mmの篩を通して水洗し残渣を集め、双眼実体顕微鏡下で観察し、同定可能な遺体等を抽出する。その形態的特徴から種類を同定する。同定した遺体等は、種類毎にビンに入れ、ホウ酸・ホウ砂水溶液による液浸保存をおこなう。

(5) 土壤理化学分析

今回測定する成分は、特に動物の体組織や骨に多く含まれるリン酸とカルシウムの含量測定を行う。中でもリン酸は骨に多量に含まれ、土壤中に固定されやすい性質を持つ。そのため、遺体が埋葬されると土壤中にリン酸の富化が認められることから、遺体あるいは遺骨の痕跡を推定することができる。また、リン酸の供給源としては植物体もあげられる。植物由來のリン酸成分が供給された場合、リン酸含量よりも腐植含量が高くなる。よって、植物体の影響を調べるために腐植含量も測定した。

リン酸は硝酸・過塩素酸分解-バナドモリブデン酸比色法、カルシウムは硝酸・過塩素酸分解-原子吸光光度法、腐植はチューリン法でそれぞれ行う(土壤養分測定法委員会、1981)。以下、具体的な操作工程を示す。

試料を風乾後、軽く粉碎して2.00mmの篩を通過させる(風乾細土試料)。風乾細土試料の水分を加熱減量法(105℃、5時間)により測定する。風乾細土試料の一部を粉碎し、0.5mmのふるいを全通させる(微粉碎試料)。

風乾細土試料2.00gをケルダール分解フラスコに秤量し、硝酸約5mLを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸約10mLを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mLに定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸(P2O5)濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム(CaO)濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量(P2O5mg/g)とカルシウム含量(CaOmg/g)を求める。

微粉碎試料0.100~0.500gを100mL三角フラスコに正確に秤りとり、0.4Nクロム酸・硫酸混液10mLを正確に加え、約200℃の砂浴上で正確に5分間煮沸する。冷却後、0.2%フェニルアントラニ

ル酸液を指示薬に0.2N硫酸第1鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの有機炭素量 (Org-C 乾土%) を求める。これに1.724を乗じて腐植含量(%) を算出する。

(6) 炭化材同定

木口 (横断面)・柵目 (放射断面)・板目 (接線断面) の3断面の割断面を作製し、实体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

3. 結果

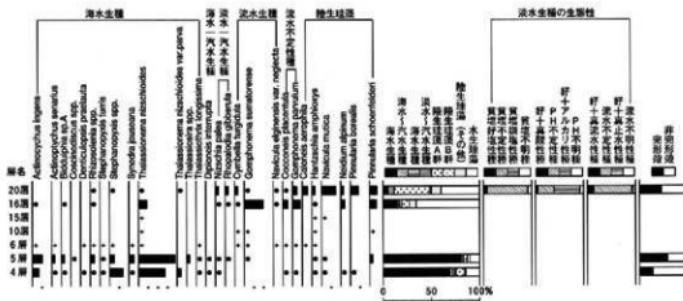
(1) 珪藻分析

結果を表2・3、第62図に示す。6層・10層・15層は珪藻化石の産出が少ない。4層・5層・16層・20層では100個体以上産出する。完形殻の出現率は、50%以下である。産出分類群数は、44属97種類である。以下に珪藻化石群集の特徴を下位から述べる。

4層・5層では、全体の70%以上を海水生種が優占する。海水浮遊性の *Thalassionema nitzschiooides* が30~40%と優占し、*Actinocyclus ingens*、*Denticulopsis cf. praelauta*、*Synedra jouseana*などの絶滅種を含む。この他、低率であるが、淡水生で流水にも止水にも生育する流水不定性の *Gomphonema sumatrense*、*Cocconeis placentula*、陸生珪藻A群の *Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica*なども産出する。珪藻化石が少なかった6層・10層・15層は、上述と同様に、絶滅種を含む海水生種や淡水生種、陸生珪藻などが産出する。

16層では、淡水生種が全体の約70%産出するが、海水生種も約15%産出する。淡水生種では、真流水性で上流性河川指標種群の *Gomphonema sumatrense* が約20%と多産し、流水不定性の *Cocconeis placentula*、*Gomphonema parvulum*、中~下流性河川指標種群の *Cymbella turgidula*などを伴う。海水生種では、浮遊性の *Thalassionema nitzschiooides* が約10%産出し、絶滅種の *Actinocyclus ingens*などが産出する。上流性河川指標種群とは、河川上流部の峡谷部に集中して出現することから上流部の環境を指標する可能性の大きい種群とされる（安藤、1990）。

20層は、陸上の乾いた好気的環境に耐性のある陸生珪藻と、水域に生育する淡水生種が産出する。陸生珪藻の主なものは、陸生珪藻の中でも分布がほぼ陸域に限られる耐乾性の高いA群（伊



第62図 河川跡における主要珪藻化石群集の層位分布

海水～淡水～淡水生種産出率、各種産出率、完形産出率は全休眠殻、淡水生種のうち絶滅種の比率は淡水生種の合計として百分率で算出した。いずれも100個体以上抜き出された試料について示す。なお、●は2%未満、+は100個体未満の試料について後出した個数を示す。

表2 河川跡の珪藻分析結果(1)

種類	生態性		環境指標種	層名							
	場所	pH	流水	4層	5層	6層	10層	15層	16層	20層	
Actinocyclus ingens Rattray	Euh				7	10	3	-	-	2	-
Actinocyclus spp.	Euh				-	-	2	-	-	-	-
Actinopycetes setarius (Ehr.) Ehrenberg	Euh	A		1	3	1	-	-	-	-	-
Bidulphia sp.A	Euh			1	3	-	-	-	1	-	-
Chaetoceros spp.	Euh			1	-	-	-	-	-	-	-
Cocinodiscus marginatus Ehrenberg	Euh			1	-	1	-	-	-	-	-
Cocinodiscus spp.	Euh			-	2	-	-	-	-	-	-
Denticlospis praeculta Akiba & Koizumi	Euh			3	-	1	-	-	-	-	-
Denticlospis spp.	Euh			2	-	1	-	-	-	2	-
Grammatophora oceanica (Ehr.) Grunow	Euh			-	1	-	-	-	-	-	-
Grammatophora spp.	Euh			-	1	-	-	-	-	-	-
Melosira sol (Ehr.) Kuetzing	Euh			-	-	-	-	-	-	1	-
Paralia sulcata (Ehr.) Cleve	Euh	B		1	1	1	-	-	-	1	1
Rhizosolenia spp.	Euh			2	4	1	-	-	-	1	1
Stephanopyxis turris Grev. et Arn.	Euh			1	2	2	-	-	-	-	-
Stephanopyxis spp.	Euh			14	5	3	-	-	-	-	1
Synedra jousseaumei Scheshukova	Euh			2	5	1	-	-	-	-	-
Thalassionema nitzschioleum (Grun.) Grunow	Euh			28	38	14	5	2	9	3	3
Thalassionema nitzschioleum var. parva Heiden und Kolbe	Euh			4	-	-	-	-	-	-	1
Thalassiosira oestrupii (Osten.) Proskina-Lavrenko	Euh			-	-	-	-	-	-	-	-
Thalassiosira spp.	Euh			-	3	-	-	-	-	-	-
Thalassiothrix longissima Cleve and Grunow	Euh			2	2	1	-	-	-	-	-
Xanthophysix spp.	Euh			-	1	-	-	-	-	-	-
Diploneis interrupta (Kuetz.) Cleve	Euh,Meh			-	-	-	-	-	-	-	-
Achnanthus brevipes var. intermedia (Kuetz.) Cleve	Meh	D1		-	-	-	-	-	-	-	-
Nitzschia lerenziana Grunow	Meh	E2		-	-	-	-	-	-	-	-
Opephora martyi Heribaud	Meh	D1		-	-	1	-	-	-	-	-
Pseudopodosira kougoi Tamura et Sato	Meh	E2		-	-	-	-	-	-	-	-
Navicula capitata var. hungarica (Grun.) Ross	Ogb-Meh	al-II	r-ph	U	-	-	-	-	1	-	-
Nitzschia levidensis var. victoriae Grunow	Ogb-Meh	al-II	ind	U	-	-	-	-	1	-	-
Nitzschia palea (Kuetz.) W.Smith	Ogb-Meh	ind	ind	S	2	1	-	-	1	4	4
Rhopalodiella gibberula (Ehr.) Moller	Ogb-Meh	ind	ind	-	1	-	-	-	1	-	-
Achnanthus hungarica Grunow	Ogb-ind	al-II	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Achnanthus japonica H.Kobayasi	Ogb-ind	al-II	r-ph	J,T	-	-	-	-	1	-	-
Achnanthus lanceolata (Breb.) Grunow	Ogb-ind	ind	r-ph	K,T	-	-	-	-	-	2	2
Achnanthus minirrimus Kuetzing	Ogb-ind	ind	ind	U	1	-	-	-	-	-	-
Amphora affinis Kuetzing	Ogb-ind	al-II	ind	U	-	1	-	-	1	-	-
Aulacoseira distans (Ehr.) Simonsen	Ogb-hob	ind	l-bi	N,J	-	-	-	-	-	1	-
Caloneis aerophila Bock	Ogb-ind	al-II	ind	RA	-	-	1	-	-	1	2
Caloneis bacillifera (Grun.) Cleve	Ogb-ind	al-II	ind	U	-	-	-	-	-	-	1
Caloneis silicula (Ehr.) Cleve	Ogb-ind	al-II	ind	-	-	-	-	-	-	-	-
Ceratoneis arcus var. haueriana Meister	Ogb-ind	ind	l-bi	J	-	-	1	-	-	-	-
Cocconeis neodimitria Kramer	Ogb-ind	al-II	ind	U	3	2	-	1	-	5	1
Cocconeis placentula (Ehr.) Cleve	Ogb-ind	al-II	r-ph	T	-	-	-	-	1	2	2
Criticula cuspidata (Kuetz.) G.Mane	Ogb-ind	al-II	ind	S	-	-	1	-	1	1	1
Cymbella japonica Reichelt	Ogb-ind	unk	unk	T	-	-	1	-	-	-	-
Cymbella silesiaca Bleisch	Ogb-ind	ind	ind	T	-	1	-	-	-	2	-
Cymbella sinuata Gregory	Ogb-ind	ind	r-ph	K,T	2	-	-	-	-	1	-
Cymbella tumida (Breb. ex Kuetz.) V.Hurck	Ogb-ind	al-II	ind	T	-	1	-	-	-	1	-
Cymbella turgida Grunow	Ogb-ind	al-II	r-ph	K,T	-	-	1	2	-	3	4
Cymbella turgida var. niponica Skvortzow	Ogb-ind	al-II	r-ph	T	-	-	1	-	1	-	-
Cymbella spp.	Ogb-ind	unk	unk	-	-	-	-	-	-	-	-
Diploneis ovalis (Hilse) Cleve	Ogb-ind	al-II	ind	-	1	-	-	-	-	-	1
Epithemia adnata (Kuetz.) Brebisson	Ogb-ind	al-II	ind	-	-	1	-	-	-	-	-
Epithemia turgida (Ehr.) Kuetzing	Ogb-ind	al-II	ind	-	-	1	-	-	-	-	-
Euatoia arcus Ehrenberg	Ogb-hob	al-II	l-ph	T	2	-	-	-	-	-	-
Euatoia hiseriatoidea H.Kobayasi	Ogb-hob	al-II	l-ph	-	1	-	-	-	-	-	-
Euatoia praeputia var. bidens Grunow	Ogb-hob	al-II	l-ph	RA	1	1	1	-	-	1	-
Euatoia spp.	Ogb-hob	al-II	l-ph	RB,O	-	-	-	1	-	-	-
Fragilaria capucina Desmazières	Ogb-ind	unk	unk	-	1	-	-	-	-	-	-
Fragilaria capucina var. gracilis (Oestr.) Hustedt	Ogb-ind	al-II	ind	T	-	-	-	-	-	1	2
Fragilaria construens fo. tenera (Ehr.) Hustedt	Ogb-ind	al-II	l-ph	T	-	-	-	-	-	1	-
Fragilaria leptostaura (Ehr.) Hustedt	Ogb-ind	al-II	l-ph	S	-	-	1	-	-	2	-
Fragilaria ulna (Nitzsch.) Lange-Bertalot	Ogb-ind	al-II	l-ph	-	-	1	-	-	-	2	-
Fragilaria vaucheriae (Kuetz.) Petersen	Ogb-ind	al-II	r-ph	K,T	1	-	1	-	-	1	-
Fragilaria virescens Ralfs	Ogb-ind	al-II	l-ph	-	-	-	-	-	-	1	-
Frustulia vulgaris (Thwait.) Dc Toni	Ogb-ind	al-II	ind	U	-	-	-	-	1	1	-
Gomphonema acuminatum Ehrenberg	Ogb-ind	ind	l-ph	O	-	1	-	-	-	-	-
Gomphonema olivaceum (Lyngb.) Kuetzing	Ogb-ind	al-II	ind	U	-	-	-	-	-	-	1
Gomphonema parvulum Kuetzing	Ogb-ind	ind	ind	U	1	-	1	-	-	8	6
Gomphonema pumilum (Grun.) Reichenbach & Lange-Bertalot	Ogb-ind	al-II	ind	-	1	-	-	-	-	-	-
Gomphonema surakorense Fricke	Ogb-ind	ind	r-ph	J	-	2	1	1	-	20	2

表3 河川跡の珪藻分析結果（2）

種類	分類	生息性	環境指標	種名							
				4谷	5川	6川	10川	13川	16川	20川	
Gyrosigma spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	-	-	-	-	1
Hantzschia amphioxys (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	3	1	3	3	4	2	4
Meridion circula var. constrictum (Ralfs)V.Herck	Ogh-ind	al-il	r-bi	K,T	-	-	-	-	-	-	-
Navicula conteria fo. biceps (Amett)Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	-	-	-	-	-	-	1
Navicula corynecephala Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	1	-	-	-	-
Navicula decussis Oestrup	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,U	1	-	-	-	-	-	-
Navicula elginiensis (Greg.)Ralfs	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	-	-	-	-	-	-	2
Navicula elginiensis var. cuneata H.Kobayasi	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	-	1	-	-	-	1
Navicula elginiensis var. neglecta (Kras.)Patrick	Ogh-ind	al-il	ind	R,A,S	2	1	-	-	1	-	19
Navicula mutica Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	RB	1	-	-	-	-	-	1
Navicula paramatica Bock	Ogh-ind	al-bi	ind	RI	-	-	-	-	-	-	1
Navicula tridentata Kraske	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,U	-	-	-	-	-	-	1
Navicula viridula var. rostellata (Kuetz.)Cleve	Ogh-ind	unk	ind	RA	1	-	-	-	4	4	-
Neidium alpinum Hustedt	Ogh-ind	ind	I-ph	-	-	-	-	-	-	-	1
Neidium amplissimum (Hhr.)Krammer	Ogh-ind	al-il	ind	RB,U	-	-	1	-	-	-	-
Nitzschia brevissima Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	-	-	-	-	-	1
Nitzschia cf. permixta (Grun.)Peragallo	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	-	2
Nitzschia romana Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Nitzschia sinuata var. delegni (Grun.)Lange - Bertalot	Ogh-ind	al-il	I-ph	U	-	-	-	-	-	-	2
Nitzschia sinuata var. tabellaria (Grun.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	-	-	-	1	1	2
Nitzschia tuberculata Grunow	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	-	-	-	-	1
Nitzschia spp.	Ogh-ind	unk	unk	-	-	1	-	-	-	-	2
Orthosira roseana (Rabb.)O'Meara	Ogh-ind	ind	ind	RA	1	1	-	-	-	-	-
Pinnularia borealis Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	-	-	-	-	-	11
Pinnularia divergensissima (Grun.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	-	-	-	1
Pinnularia gibba Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	O	-	-	-	-	-	-	1
Pinnularia mesolepta (Hhr.)W.Smith	Ogh-hob	ind	S	-	-	-	-	-	-	-	1
Pinnularia microtauron (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	S	-	-	-	-	-	-	2
Pinnularia nodosa Ehrenberg	Ogh-hob	al-il	I-ph	O	-	-	-	-	-	-	1
Pinnularia obscura Kraske	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	-	-	-	-	-	1
Pinnularia schoenfelderi Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	-	3	-	1	-	7	10
Pinnularia subcapitata Gregory	Ogh-ind	al-il	ind	RB,S	-	-	-	-	1	-	-
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	-	-	-	-	1
Rhoicosphenia abbreviata (Ag.)Lange - B.	Ogh-hil	al-il	r-ph	K,T	-	-	-	-	1	2	1
Sellaphora papula (Kuetz.)Merschikowsky	Ogh-ind	ind	ind	S	-	-	-	-	-	-	1
Stauroneis obsoeta Lagerstöm	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	-	-	-	-	-	1
Stauroneis thermocisica (Petersen)Lund	Ogh-unk	unk	unk	RI	-	-	-	-	-	-	2
Surirella angusta Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-bi	U	1	-	-	-	-	-	-
Surirella ovata var. punctata (W.Smith)Hustedt	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	-	-	-	-	-	1
海水牛糞合計				71	80	32	5	2	15	7	
海水～汽水生種合計				3	1	0	0	0	0	0	
汽水生種合計				2	0	0	2	0	2	0	
淡水～汽水生種合計				2	2	0	0	1	3	1	
淡水生種合計				23	17	22	10	10	82	115	
珪藻化石總數				103	100	54	17	13	102	130	

凡例

H.R.: 総分濃度に対する適応性
 Euh: 海水生種
 Euh-Meh: 海水生種～汽水生種
 Meh: 汽水生種
 ogh-Meh: 汽水～汽水牛糞
 ogh-hil: 貧塩好塚生種
 ogh-ind: 貧塩不定性種
 ogh-hob: 貧塩嫌塚生種
 ogh-unk: 貧塩不明種

C.R.: 淡水に対する適応性

I-bi: 真止水性種
 I-ph: 止水性種
 ind: 淡水不定性種
 r-ph: 好淡水性種
 r-bi: 真淡水性種
 unk: 淡水不明種

環境指標種群
 A: 外洋指標種、B: 内湾指標種、D1: 深水砂質土沿岸帶種、E2: 汽水泥質下層指標種 (以上は小杉, 1988)

J: 上流性河口指標種、K: 中・下流性河川指標種、O: 沿岸漂油付生種 (以上は安藤, 1990)

S: 好汚泥性種、U: 底泥適応性種、T: 好清潔水性種 (以上はAsai, K. & Watanabe, T., 1986)

R: 淡生珪藻 (RA: A群, RB: B群, RI群, 伊東・船内, 1991)

藤・堀内, 1991) の *Navicula mutica*, *Pinnularia borealis*, *Caloneis aerophila* である。淡水生種は、特に多産するものが多く、淡水~汽水生で富栄養水域にも多く生育する *Nitzschia palea*, *Rhopalodia gibberula*、好流水性の *Cymbella turgidula*, *Navicula elginensis var. neglecta* などが産出する。このうち、*Cymbella turgidula* は、河川中~下流部や河川沿いの河岸段丘、扇状地、自然堤防、後背湿地などに集中して出現することから、その環境を指標することができる中~下流性河川指標種群とされている(安藤, 1990)。

(2) 花粉分析

結果を表4に示す。いずれの試料においても花粉化石はほとんど検出されず、微粒炭化片が多量に含まれる。わずかに検出された花粉化石は保存状態が悪く、ほとんどの花粉外膜が溶けた状態で産出する。また、検出された花粉化石には、色が濃く保存状態が極端に悪いものも含まれる。プレバート内の状況写真を図版2に示す。

(3) 植物珪酸体分析

結果を表5、図63に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。4層~6層では、栽培植物のイネ属、タケア科、ヨシ属、ウシクサ族、イチゴツナギ亞科などが検出されるものの、検出個数が少ない。15層でも、下位層試料と同様の種類が検出され、ヨシ属やスキ属の短細胞珪酸体、不明キビ型の産出が目立つ。20層では、下位よりもイネ属の出現率が高い。また、栽培種を含むオオムギ族も検出されるが、検出された植物珪酸体が栽培種に由来するものか否かの判別が困難である。この他にタケア科、ヨシ属、ウシクサ族、イチゴツナギ亞科などが検出される。

(4) 微細造物分析

篩別後の残渣は、粗い砂分が主体で、同定可能な種実遺体は検出されな

表4 河川跡の花粉分析結果

種類	層名	4層	5層	6層	15層	20層
本木花粉		—	—	—	—	—
トウヒ属		—	—	—	—	1
マツ属		—	1	—	—	—
スギ属		—	—	2	—	—
カバノキ属		—	1	—	—	—
ハンノキ属		—	—	2	—	—
コナラ属アカガシ属		—	1	1	—	—
草木花粉		—	—	—	—	—
イネ科		—	—	—	3	1
ナデシコ科		1	—	—	—	—
ヨモギ属		—	—	—	—	1
小川花粉		1	1	—	—	1
シダ類胞子		—	—	—	—	—
ヒカゲノカズラ属		1	—	—	1	—
イノモトソウ属		1	—	—	—	—
他のシダ類胞子		34	12	9	9	8
合計		0	3	3	2	1
木本花粉		2	0	0	3	2
草木花粉		1	1	0	0	1
不明花粉		26	12	9	10	8
シダ類胞子		38	15	12	15	11

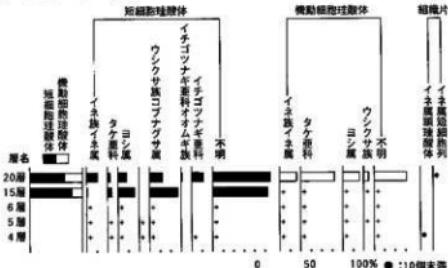


表5 河川跡の植物珪酸体分析結果

種類	層名	4層	5層	6層	15層	20層
イネ科葉茎短細胞珪酸体		—	—	—	—	—
イネ科イネ属		2	1	1	2	26
タケア科		11	22	—	8	6
ヨシ属		49	14	6	32	20
ウシクサ族コブナギ属		2	2	—	—	—
ウシクサ族スキ属		14	2	6	54	31
イチゴツナギ亞科オオムギ族		—	—	—	—	3
イチゴツナギ亞科		4	—	—	—	28
不明キビ型		57	16	15	99	110
不明ヒカンバ型		12	6	1	6	18
不明シナギ型		11	1	1	1	12
イネ科葉茎長細胞珪酸体		—	—	—	—	—
ノリ族イネ属		1	1	1	1	21
タケア科		10	15	11	18	42
ヨシ属		3	8	5	18	21
ウシクサ族		—	3	—	2	6
不明		6	6	3	11	40
合計		162	64	30	202	254
イネ科葉茎短細胞珪酸体		20	33	20	50	130
イネ科葉茎長細胞珪酸体		182	97	50	252	384
組織片		—	—	—	—	—
イネ葉珪酸体		—	—	—	—	—
イネ茎珪酸体		—	—	—	—	—

かった。炭化材の細片と、土器祭祀遺構から動物遺骸（卵？）が2個体検出されたのみであった。

（5）土壤理化学分析

土壤理化学分析の結果、土器内土壤の上位では、腐植含量が0.50%、リン酸含量が3.02P₂O₅mg/g、カルシウム含量が3.32CaOmg/gである。土器内土壤の下位では、腐植含量が0.66%、リン酸含量が4.04P₂O₅mg/g、カルシウム含量が3.70CaOmg/gである。

土器内土壤の腐植含量、カルシウム含量は、上位と下位でほとんど差は認められない。一方、リン酸含量は、上位よりも下位において高い値を示す。

（6）炭化材同定

炭化材は、針葉樹のヒノキ属が3点、落葉広葉樹のブナ属が3点、ヤマグワが4点であった。以下に、各種類の主な解剖学的特徴を記す。

・ヒノキ属 (Chamaecyparis) ヒノキ科

仮道管の早材部から晚材部への移行は緩やかへやや急で、晚材部の幅は狭い。樹脂細胞が晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、1~15細胞高。

・ブナ属 (Fagus) ブナ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に2~3個が複合して散在し、年輪界付近で径を減ずる。道管の分布密度は高い。道管は單穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は対列状~階段状に配列する。放射組織は同性~異性型、単列、数細胞高のものから複合放射組織まである。

・ヤマグワ (Morus australis Poiret) クワ科クワ属

環孔材で、孔圈部は1~5列、晩材部に向かって管径を漸減させ、のち塊状に複合する。道管は單穿孔を有し、壁孔は密に交叉状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性II~III型、1~6細胞幅、1~50細胞高で、しばしば結晶を含む。

4. 考察

（1）河川跡の堆積過程

河川跡堆積物における珪藻分析の結果、古代相当層とされている4層・5層では、第三紀の絶滅種を含む海水生種が淡水生種に比べて圧倒的に多く産出する。坂本・野沢（1960）によると、本道跡の背後の丘陵地には、新第三系北陸層群中・上部の八尾累層、音川累層などの海成層が分布する。したがって、本層準で検出された海水生種は、前述の海成層に含まれるもののが再堆積した誘導化石であると考えられる。また、他の生態性の珪藻化石がほとんど検出されることから、上記の海成層を削除した洪水性の堆積物と考えられる。

上位の6層・10層・15層では、珪藻化石の産出が少ないものの、絶滅種を含む海水生種、淡水生種、乾いた環境に生育する陸生珪藻が混在する。よって、本層堆積時も流水環境下にあった可能性がある。

16層では、明らかに第三系からの誘導化石と考えられる海水生種は少なくなったが、*Gomphonema sumatorense*などの上流性河川指標種群を含む流水性種が多産する。よって、本層堆積時も、上流域の堆積物が供給される流水環境が引き続いたと考えられる。

中世の可能性が指摘される20層では、乾いた好気的環境に生育する陸生珪藻の産出が目立ち、中~下流性河川指標種群を含む淡水生種、絶滅種と考えられる海水生種も低率ながら産出する。このような群集は、堀内ほか（1996）で示された混合群集と類似する。堀内ほか（1996）によると、こ

のような組成は、洪水後の乾いた表層やある程度の期間に地表として露出した時期の層準にみられるとしてされている。従って、本層が堆積した後に水が引き、陸生珪藻が生育する乾燥した環境となっていた可能性がある。

(2) 周辺植生

花粉分析・植物珪酸体分析の結果、全体的に検出された個体数は少ない。特に花粉化石では定量的に扱うことができない。検出された個体数が少ない要因として、試料が採取された場所は河川跡で、採取層準には堆積速度が速い洪水堆積物も含まれることから、堆積物中に取り込まれる化石が相対的に少なかった可能性が考えられる。これは珪藻分析結果からも明らかである。また、検出された化石は保存状態が悪く、いずれの化石も腐蝕を受けていた。花粉化石の種類は、比較的分解に強い花粉や分解が進んでも同定可能な花粉やシダ類胞子からなる。花粉・シダ類胞子は、腐蝕に対する抵抗性が種類により異なっており、花粉よりもシダ類胞子の方が酸化に対する抵抗性が高いとされている（中村、1967；徳永・山内、1971）。したがって、堆積後の経年変化により化石が分解・消失し、分解に強い種類が選択的に残された可能性も考えられる。

なお、珪藻分析より誘導化石が多い結果が得られていることから、花粉化石や植物珪酸体に関しても同様のことが考えられ、検出された花粉化石や植物珪酸体は、遺跡周辺の植生だけでなく、集水域を含む広範囲の植生を反映していることになる。具体的な種類としては、タケア科、ヨシ属、ウシクサ族、イチゴツナギ亞科などのイネ科植物やナデシコ科、ヨモギ属が挙げられ、これらは河道沿いや荒廃地に先駆的に入りこみ草地を作る種類（を含む分類群）であり、旧河川周辺に生育していたものに由来すると考えられる。

また、今回は栽培植物のイネ属が検出された。中世と想定されている20層ではイネ属の出現率が短細胞珪酸体で約10%、機動細胞珪酸体で約16%であった。現在の水田土壤中に含まれる植物珪酸体の調査によれば、機動細胞珪酸体中のイネ属の割合は9%であるが、稻藁を堆肥として与えている水田では16%に上るという結果が得られている（近藤、1988）。今回のイネ属機動細胞珪酸体の出現率は、これら調査例と近似している。また、20層は下位の層序と不整合であることや、層序の観察から人為的擾乱も確認されることから、本層準堆積時には、本地点付近で稲作が行われていた可能性が考えられる。また、同層からは、わずかながらオオムギ族も検出されているが、本遺跡で検出された畠跡での栽培植物に関する資料がないため、栽培由来するものであるか判断できない。なお、20層の上層からは、水田耕作上層が認められており、上層からの影響も考えられる。そのため、今回検出されたイネ属やオオムギ族の由来についてはあらためて検証する必要がある。

(3) 第53号土坑内土器の内容物

第53号土坑覆土上位から出土した土器内土壤の理化学分析の結果、腐植含量は0.50%および0.66%と極めて低い値を示す。また、微細遺物分析では、種実遺体などは検出されない。したがって、土器内部に植物体あるいは種実等が存在していた可能性は示唆できない。

一方、土器内土壤のカルシウム含量は、上位・下位で大きな差異は認められず、3.3~3.7CaO mg/gを示す。カルシウムが土壤中に含まれる量、すなわち天然賦存量は普通1~50CaO mg/gとされ（藤賀、1979）、今回の測定値は天然賦存量の範囲内にある。また、リン酸含量は3.02~4.04 P₂O₅ mg/gを示す。リン酸の天然賦存量の上限については、Bowen (1983)、Bolt&Bruggenwert (1980)、川崎ほか (1991)、天野ほか (1991)などの調査事例によれば、約3.0 P₂O₅ mg/g程度と推定される（なお、各調査例の記載単位が異なるため、ここでは P₂O₅ mg/gで統一している）。これらの調査事例と比較すると、土器内土壤のリン酸含量は、天然賦存量の上限を上回る値

であり、上位と下位を比較すると、下位においてリン酸含量が高い。したがって、本分析結果から、土器内土壤は植物体以外の要因、すなわち動物に由来するリン酸の富化が推測される。ただし、今回の分析結果は土器内土壤に限定される結果であることから、本分析結果をより詳細に評価するためには、第53号上坑覆土や発掘調査区内の基本層序の土壤理化学性と比較することが必要である。

(4) 土器祭祀遺構出土炭化材の検討

土器祭祀遺構から採取した炭化物集中の微細遺物分析の結果、種実遺体等は検出されなかった。また、検出された動物遺骸は、擾乱や遺構が埋没する際に混入した後代のものと想定され、遺構の用途等を検証するに至らない。

一方、検出された炭化材は、針葉樹1種類、広葉樹2種類（ヒノキ属・ブナ属・ヤマグワ）が認められた。したがって、少なくとも3種類の木材の利用が考えられる。ただし、いずれの炭化材も細片であるため、同一個体の可能性もあり、種類の構成比等の詳細については言及できない。

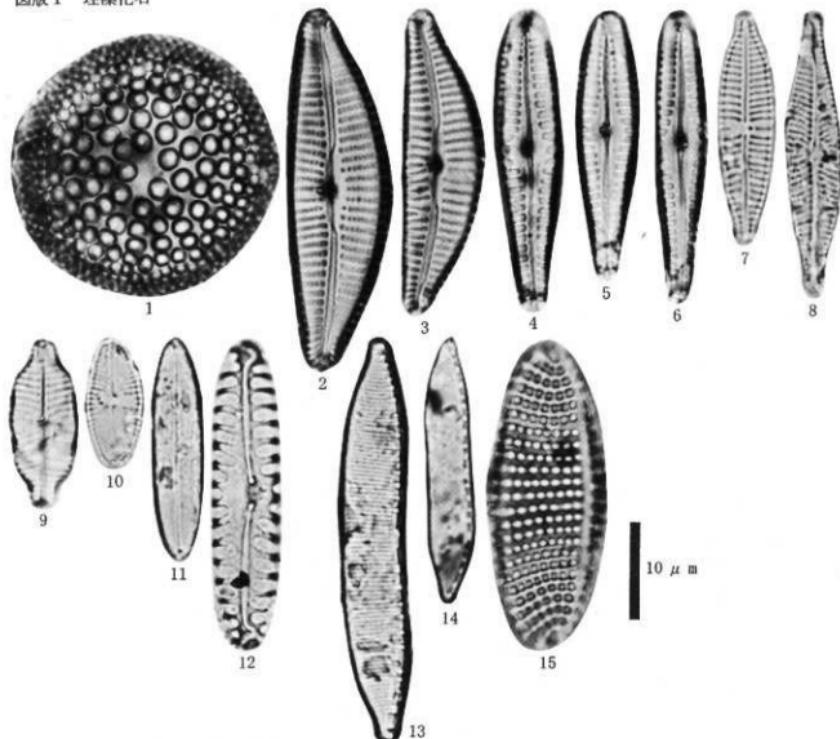
本遺跡では、中世の井戸に用いられた木材や木製品の樹種同定が行われている（パリノ・サーウェイ株式会社、1999）。これら結果によれば、井戸材にはヤマグワ、斎場にはヒノキ属のサワラなどがそれぞれ確認されている。これら樹種については、前述の分析結果や炭化材同定の結果から、遺跡周辺に生育していたものを採取・利用された可能性が考えられるが現状では明らかでない。そのため、この点については、さらに資料の蓄積を待つ評価したい。

引用文献

- 天野洋司・太田 健・草場 敏・中井 信（1991）中部日本以北の土壤型別蓄積リンの形態別計量、農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発」、p.28-36。
- 安藤一男（1990）淡水底生藻による環境指標種群の設定と占葉度復元への応用、東北地理、42、p.73-88。
- Asai, K. and Watanabe, T. (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa, Diatom, 10, p.35-47.
- Bowen, H. J. M. (1983) 「環境無機化学－元素の循環と生化学－」、浅見輝男・才野光男訳、297p.、
博友社。[Bowen, H. J. M. (1979) Environmental Chemistry of Elements].
- Bolt, G. H. & Bruggenwert, M. G. M. (1980) 「土壤の化学」、岩田進介・三輪寿太郎・井上隆弘・陽 挑行訳、309 p.、学会出版センター。[Bolt, G. H. and Bruggenwert, M. G. M. (1976) SOIL CHEMISTRY]、
p.235-236.
- 土壤養分測定法委員会編（1981）「土壤養分分析法」、440 p.、農業出版社。
- 藤賀 正（1979）カルシウム、地質調査所化学分析法、52、p.57-61、地質調査所。
- 原口和夫・三友 清・小林 弘（1998）埼玉の藻類 硅藻類、埼玉県植物誌、埼玉県教育委員会、
p.527-600。
- 堀内誠示・高橋 敏・横木真紀夫（1996）珪藻化石群集による低地堆積物の古環境推定について、
-混合群集の認定と堆積環境の解説-、日本文化財科学会、第13回大会研究発表要旨集、
p.62-63。
- 伊藤良永・堀内誠示（1991）陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用、珪藻学会誌、6、
p.23-45。
- 川崎 弘・吉田 澤・井上恒久（1991）九州地域の土壤型別蓄積リンの形態別計量、農林水産省農林水
産技術会議事務局編「土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発」、p. 23-27。
- 近藤謙三（1988 a）十二遺跡土壤の植物珪酸体分析、「鍋屋遺跡群 十二遺跡 -長野県北佐久郡御 代田町十二遺跡発

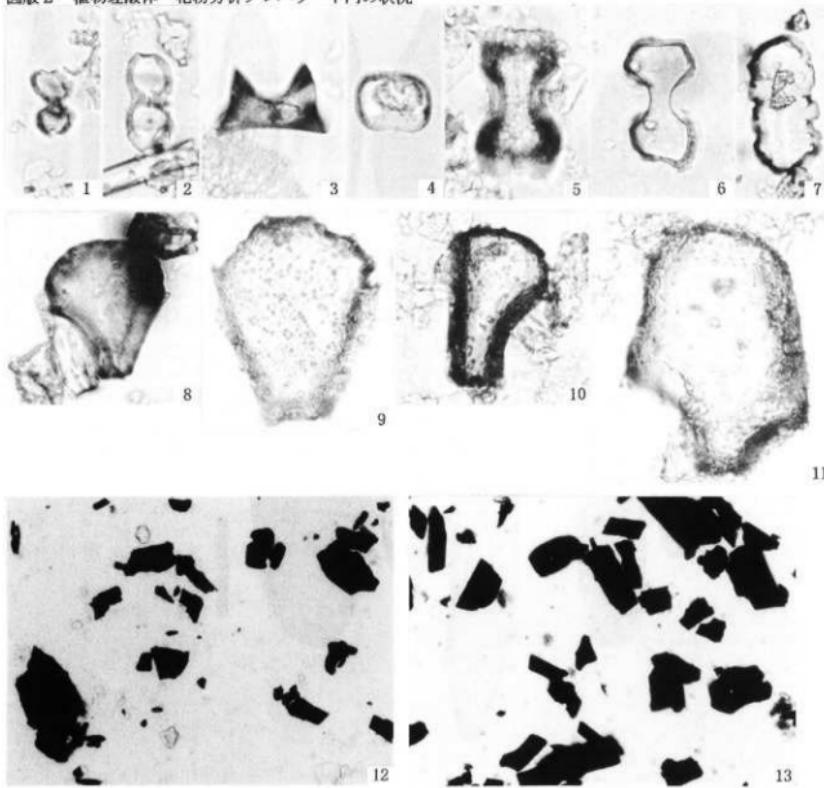
- 調査報告書ー」, p.377-383, 御代田町教育委員会。
- 近藤錦三・佐瀬 隆 (1986) 植物誌類似分析, その特性と応用, 第四紀研究, 25, p.31-64.
- 小杉正人 (1988) 珪藻の環境指標群の設定と古環境復原への応用, 第四紀研究, 27, p.1-20.
- Krammer, K. (1992) PINNULARIA, eine Monographie der europäischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA, BAND 26, p.1-353., BERLIN · STUTTGART.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1986) Bacillariophyceae, Teil 1, Naviculaceae. Band 2/1 von : Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 876p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1988) Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaccae, Bacillariaceae, Surirellaceae. Band 2/2 von : Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 536p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1991a) Bacillariophyceae, Teil 3, Centrales, Fragilariaccae, Eunotiaceae. Band 2/3 von : Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 230p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1991b) Bacillariophyceae, Teil 4, Achnanthaceae, Kritische Ergänzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. Band 2/4 von : Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 248p., Gustav Fischer Verlag.
- 中村 誠 (1967) 花粉分析, 232p., 山今書院。
- 農林省農林水産技術会議事務局監修 (1967) 新版標準土色誌。
- パリノ・サーヴェイ株式会社 (1999) 金屋南遺跡における自然科学分析, 「金屋企業用地造成に伴う埋蔵文化財調査 富山県富山市 企尾南遺跡発掘調査報告 I」, p.127-140, 富山市教育委員会。
- ペドロジスト懇談会編 (1984) 「土壤調査ハンドブック」, 156p., 博友社。
- 徳永重元・山内禪子 (1971) 花粉・孢子, 「化石の研究法」, p.50-73, 共立出版株式会社。
- 坂本 亨・野沢 保 (1960) 5万分の1地質図幅「八尾」及び同説明書, 69p., 工業技術院地質調査所。
- 富山市教育委員会 (1999) 「金屋南遺跡発掘調査報告 I」, 山武考古学研究所編, 140p., 富山市教育委員会。

图版 1 硅藻化石



1. *Actinocyclus ingens* Rattray (河川跡; 6層)
2. *Cymbella turgidula* Grunow (河川跡; 6層)
3. *Cymbella turgidula* Grunow (河川跡; 6層)
4. *Gomphonema sumatorensense* Fricke (河川跡; 16層)
5. *Gomphonema sumatorensense* Fricke (河川跡; 10層)
6. *Gomphonema sumatorensense* Fricke (河川跡; 16層)
7. *Gomphonema parvulum* Kuetzing (河川跡; 16層)
8. *Navicula cryptocephala* Kuetzing (河川跡; 6層)
9. *Navicula elginiensis* var. *neglecta* (Krass.) Patrick (河川跡; 16層)
10. *Navicula mutica* Kuetzing (河川跡; 20層)
11. *Neidium alpinum* Hustedt (河川跡; 16層)
12. *Pinnularia borealis* Ehrenberg (河川跡; 20層)
13. *Hantzschia amphioxys* (Bhr.) Grunow (河川跡; 6層)
14. *Nitzschia brevissima* Grunow (河川跡; 6層)
15. *Achnanthes brevipes* var. *intermedia* (Kuetz.) Cleve (河川跡; 4層)

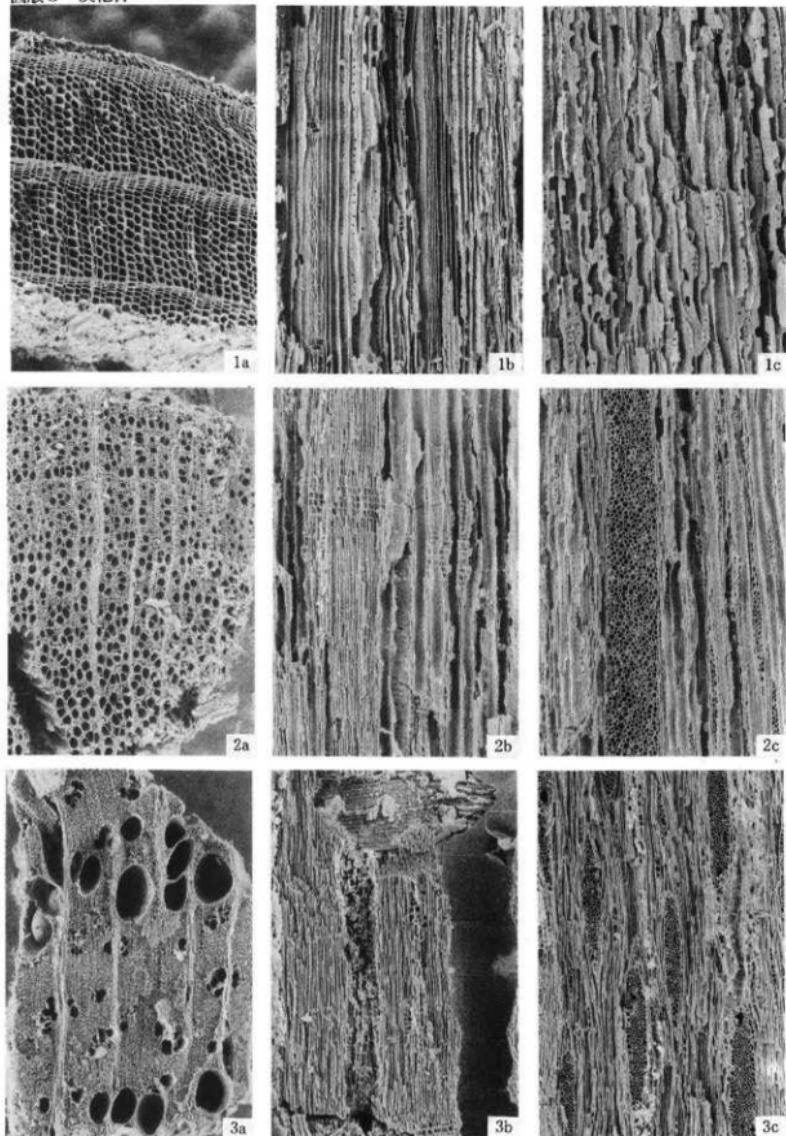
図版2 植物珪酸体・花粉分析プレパラート内の状況



1. イネ属短細胞珪酸体(河川跡;5層)
2. イネ属短細胞珪酸体(河川跡;20層)
3. タケ亜科短細胞珪酸体(河川跡;5層)
4. ヨシ属短細胞珪酸体(河川跡;5層)
5. コブナグサ属短細胞珪酸体(河川跡;20層)
6. ススキ属短細胞珪酸体(河川跡;6層)
7. オオムギ族短細胞珪酸体(河川跡;20層)
8. イネ属機動細胞珪酸体(河川跡;20層)
9. タケ亜科機動細胞珪酸体(河川跡;5層)
10. ウシクサ族機動細胞珪酸体(河川跡;5層)
11. ヨシ属機動細胞珪酸体(河川跡;5層)
12. 花粉分析プレパラート内の状況写真(河川跡;5層)
13. 花粉分析プレパラート内の状況写真(河川跡;20層)

50 μ m
(1-6)
50 μ m
(7-11)
50 μ m
(12, 13)

図版3 炭化材



1. ヒノキ属 (土器祭祀遺構 炭化物集中区)
 2. ブナ属 (土器祭祀遺構 炭化物集中区)
 3. ヤマグワ (土器祭祀遺構 炭化物集中区)
- a : 木口, b : 斜目, c : 板目

— 200 μ m:a
— 200 μ m:b, c



調査区全景（西から）



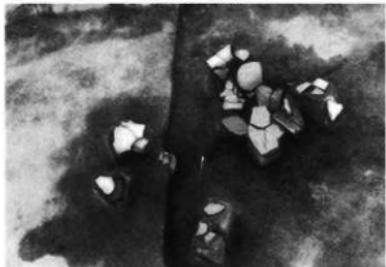
調査区全景 奥に富山市街、西に呉羽山丘陵をのぞむ（南から）



第1号住居跡



第2号住居跡



第2号住居跡 遺物出土状況



第3号住居跡



第4号住居跡



第4号住居跡 遺物出土状況



第4号住居跡 カマド近影



第4号住居跡 カマド近影

写真図版
3



第5号住居跡



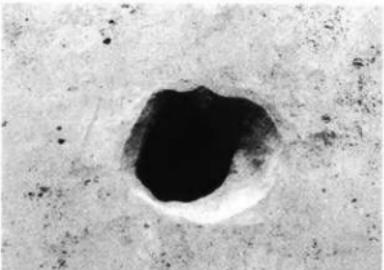
第5号住居跡 遺物出土状況



第53号土抗 検出状況



第53号土抗 土層断面



第53号土抗 完掘状況



第45号住居跡と第53号土抗



第5号土抗 土層断面



第5号土抗 遺物出土状況



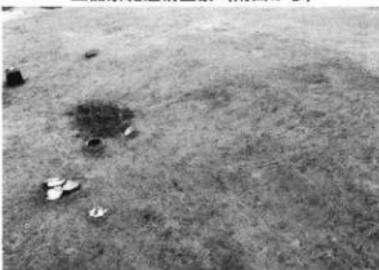
第5号土抗 土錐出土状況



土器祭祀遺構全景（南西から）



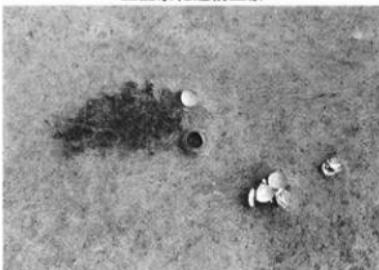
土器祭祀遺構近影



土器祭祀遺構全景



土器祭祀遺構近影



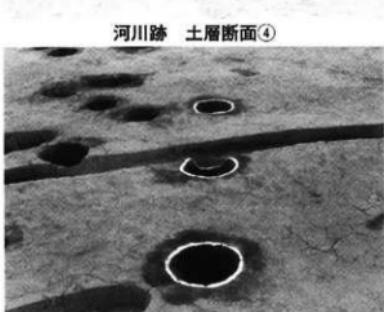
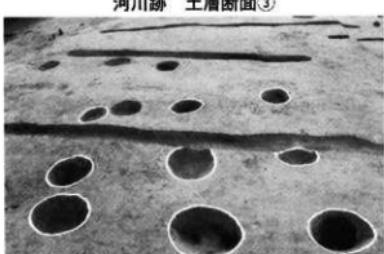
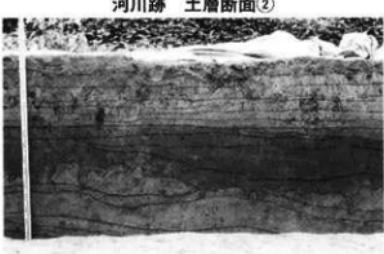
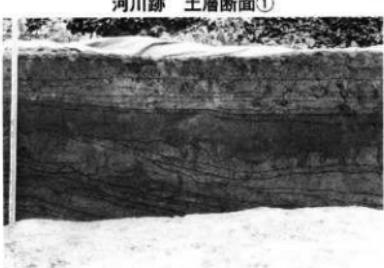
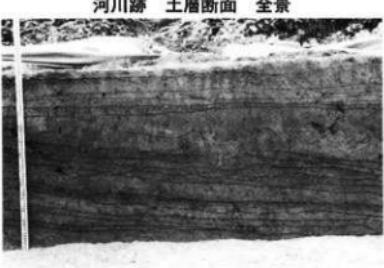
土器祭祀遺構近影



実測風景



土器祭祀遺構近影（復原）





第2号不明遺構全景（南西から）



第2号不明遺構遺物出土状況



第2号不明遺構遺物出土状況



第2号不明遺構出土遺物近影



崩歟跡 第1群



崩歟跡 第2群



崩歟跡 第3群



崩歟跡 第4群



鳥歎跡 第5・6群



鳥歎跡 第7群



鳥歎跡 第8群①



鳥歎跡 第8群②



鳥歎跡 第9群



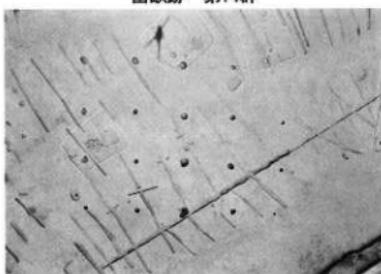
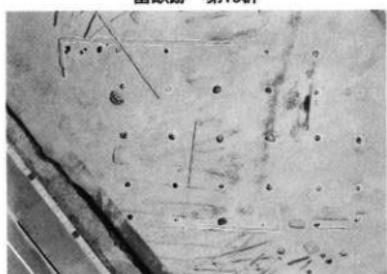
鳥歎跡 第10群



鳥歎跡 第11群



鳥歎跡 第12群



写真図版
9



第1号堀立柱建物跡 P 26



P 27



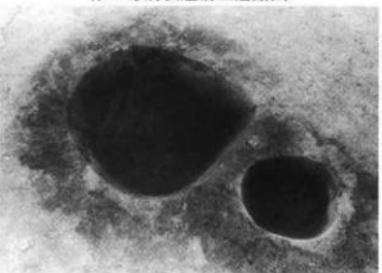
P 28



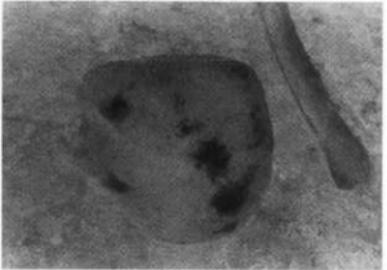
第1号溝状遺構土層断面



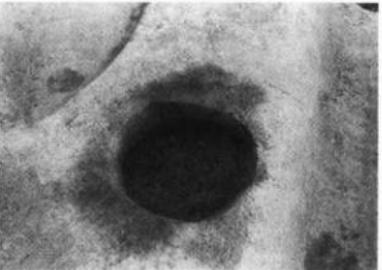
第2号溝状遺構全景（南から）



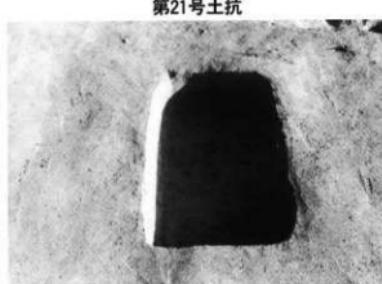
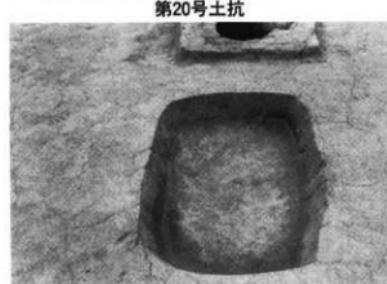
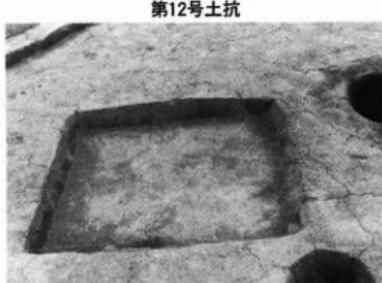
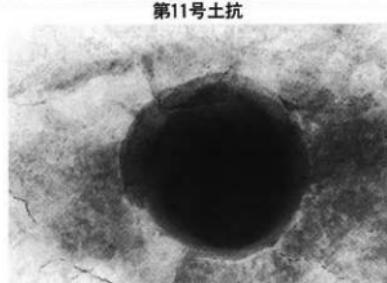
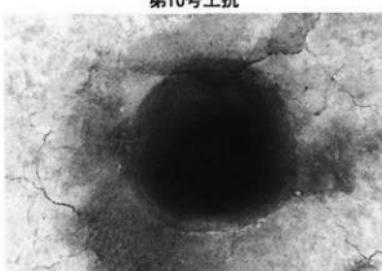
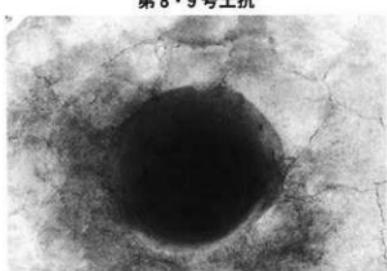
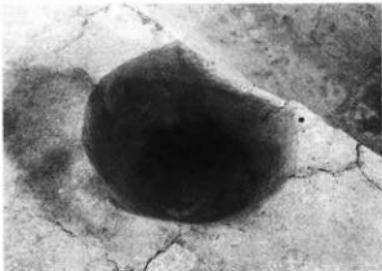
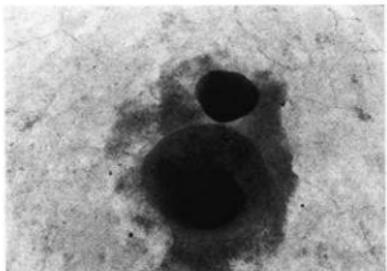
第2・3号土坑



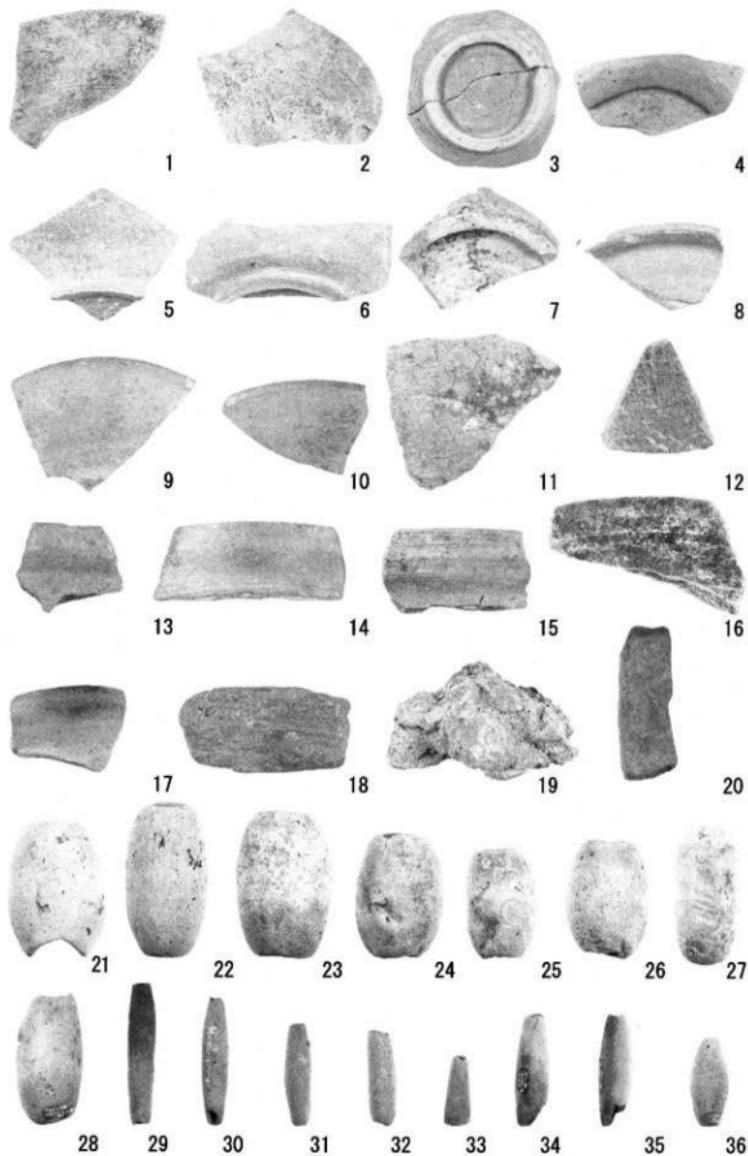
第6号土坑



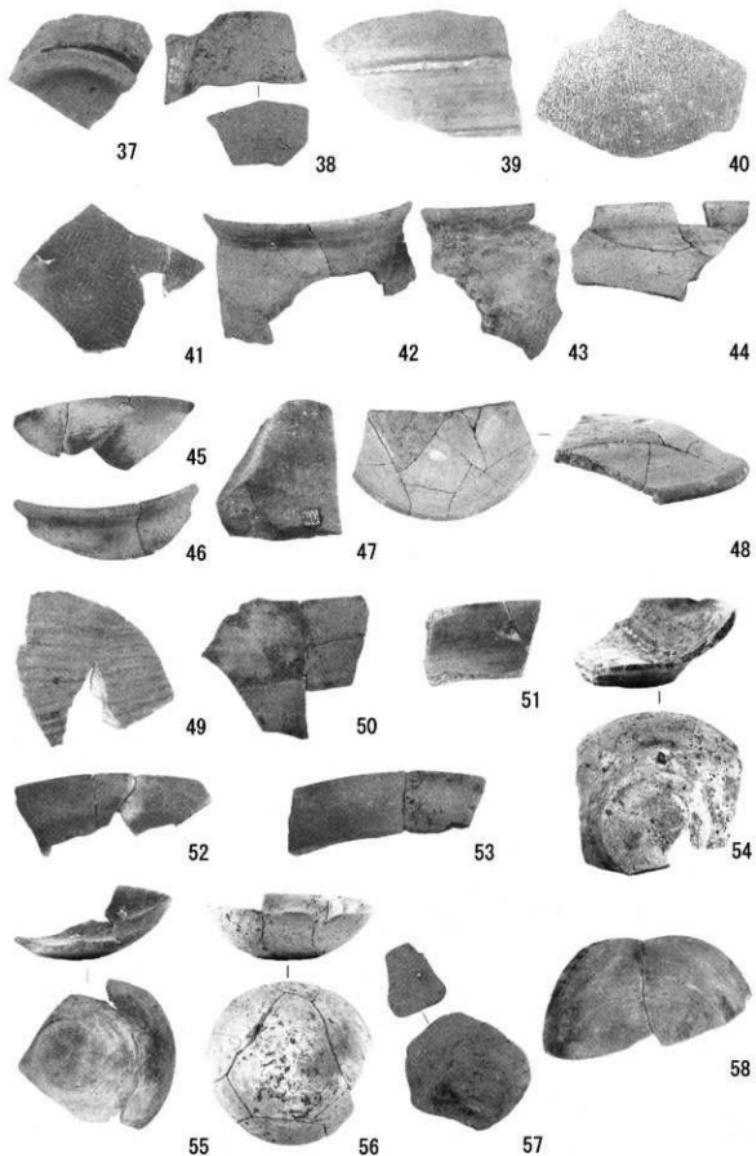
第7号土坑



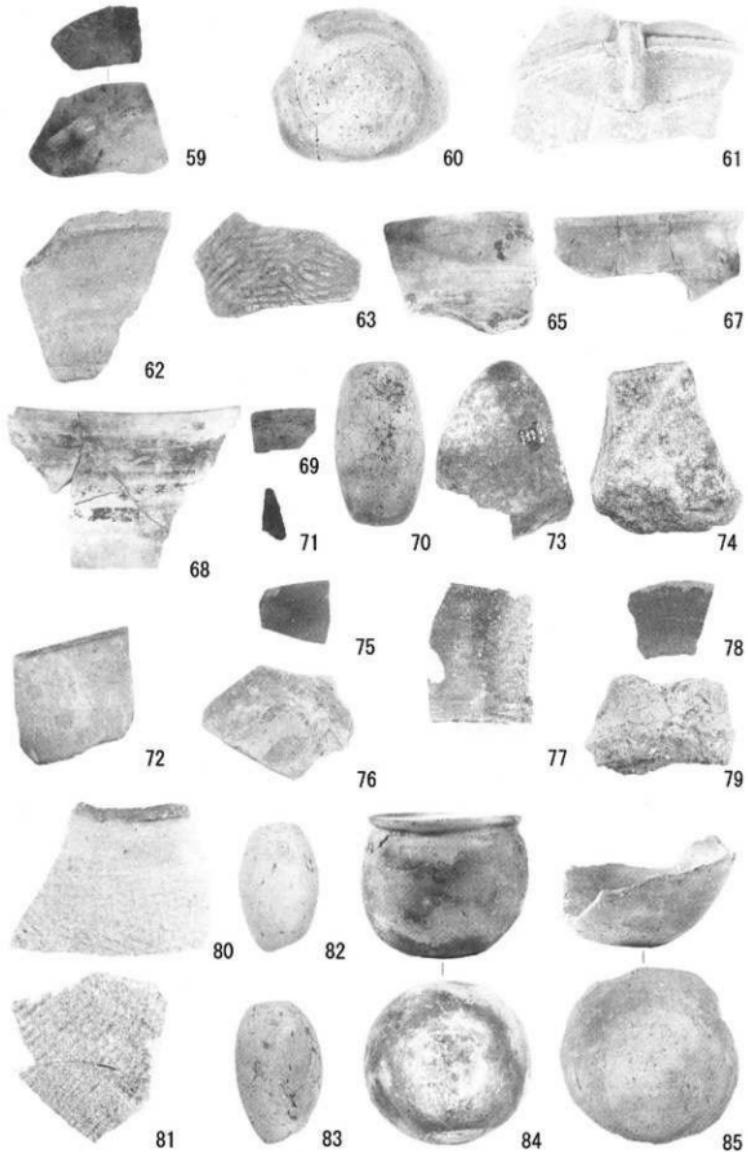
写真図版
11



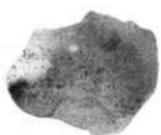
写真図版
12



写真図版
13



写真図版
14



86



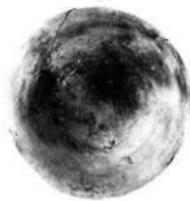
87



88



89



90



91



92



93



94



95



96



97



98

99



100



101



102



103

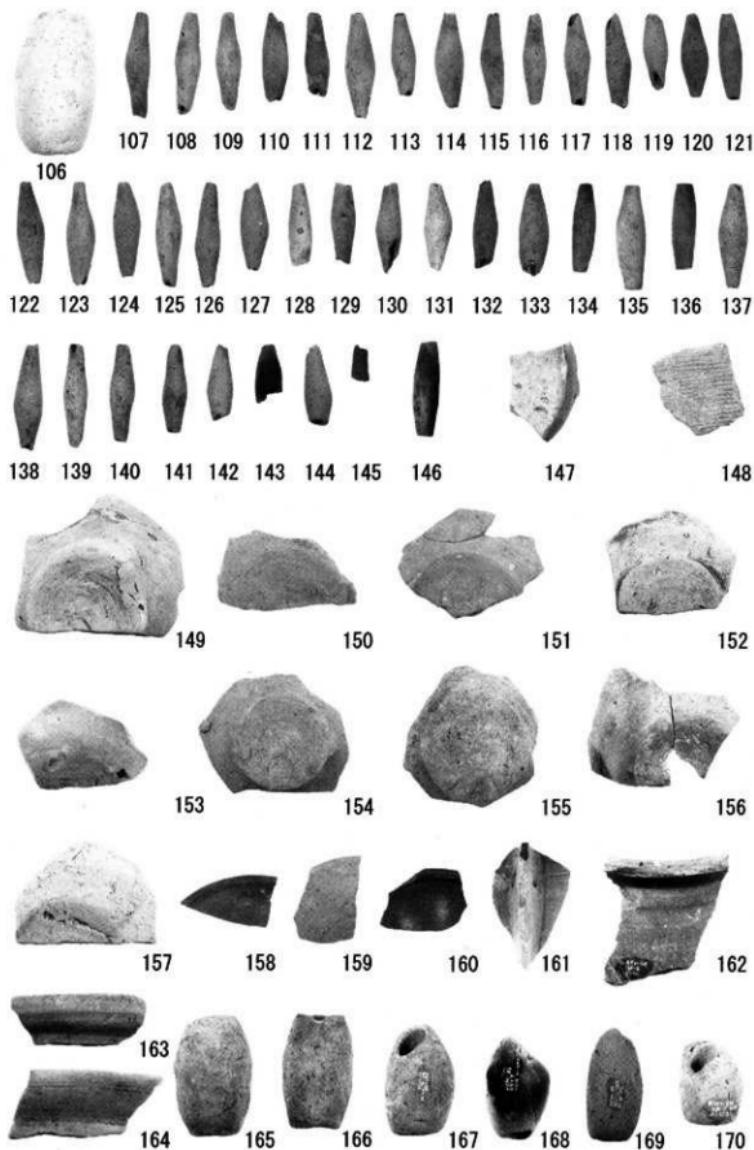


104



105

写真図版
15





171 172 173 174 175 176 177 178 179 180 181 182 183 184 185 186



187 188 189 190



191 192 193 194 195 196 197 198 199 200 201 202 203



204 205 206 207 208 209 210 211 212 213

報告書抄録

書名	富山市金屋南遺跡発掘調査報告書Ⅱ							
シリーズ名	金屋企業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(2)							
シリーズ番号	(2)							
編著者名	小林高範、小林貴郎							
編集機関	富山市教育委員会埋蔵文化財センター〒930-0803 富山市下新本町5番12号 Tel076-442-4246							
発行機関	富山市教育委員会							
発行年月日	西暦 2003年3月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所住地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
かねやまけんとやまし 金屋南遺跡	富山県富山市 金屋字川端 地内	16201	591	36° 40' 10"	137° 10' 20"	20010514 ~ 20011213	4,700m ²	金屋企業 団地造成
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
金屋南遺跡	集落跡	平安時代	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 土坑、壇跡、 土器祭祀跡、河川 跡	須恵器、土師器、 土錐、石製品、近世 陶磁器	平安時代の竪穴住居跡、掘立柱 建物跡、土錐が40点一括出土した 土坑などを検出した。旧河川の縁 では上部器塊と炭化物集中区で構 成される祭祀遺構を検出した。土 師器塊のひとつには「北」の朱書き がある。また壇の底部を蓋にして 小壺を埋納した柱穴を1か所検 出した。			
		中世	河川跡					
		近世	大型掘立建物跡					

富山市埋蔵文化財調査報告131

富山市金屋南遺跡発掘調査報告書Ⅱ

－金屋企業用地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（2）－

2003年（平成15年）3月28日発行

発行 富山市教育委員会

編集 富山市教育委員会埋蔵文化財センター

〒930-0803

富山市下新本町5番12号

Tel 076-442-4246

FAX 076-442-5810

E-mail : maizoubunka-01@city.toyama.lg.jp

印刷 松濤印刷株式会社

